

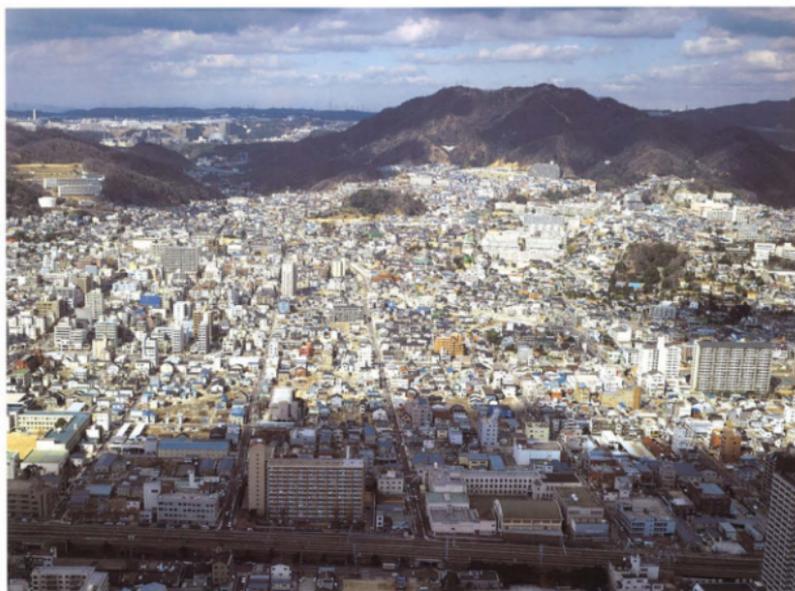
鷹取東第二地区震災復興土地区画整理事業に伴う

戎町遺跡第35・38・50・56次
松野遺跡第32・33・38次

—発掘調査報告書—

2005

神戸市教育委員会



1 調査地遠景 (1997<平成9>年撮影)



2 調査地近景 (市営松野住宅より) 2005<平成17>年1月17日震災10年目の日撮影)



戎町遺跡第50-6次調査区検出の方形周溝墓（南から）



戎町遺跡 方形周溝墓群出土の遺物



1 戎町遺跡第56-2次調査区 方形周溝墓出土の遺物



2 戎町遺跡出土の石器群

序

神戸の町並みを一変させた阪神・淡路大震災から10年の月日が流れました。

今回、発掘調査の成果について報告を行います須磨区の南東部でも地震による被害は大きく、一帯は大きな痛手を被りました。10年を経た今でも一部では未だ復興途上にあるのが現状でしょう。

しかし、4カ年に及ぶ発掘調査の期間中には、完成した区画に新たな住宅や店舗が建てられ、新しい街づくりは着実に進んでおり、私たちは活力みなぎる街づくりの雰囲気に触れながら、迅速な発掘調査の実施に努めて参りました。

今回の発掘調査では、竪穴住居をはじめとする多くの遺構のほかに、土器などを供え、丁寧に人々を葬った「方形周溝墓」と呼ばれる墓の跡が発見され、弥生時代には、この付近の中心となる大きな集落の一端がその姿を現しました。

今回の調査で、この地域に長い歴史が刻まれていることが明らかになりましたがこの成果が、新しい街づくりや地域の活性化に役立つことを願うとともに、さらに多くの方々に活用していただけることを期待しております。

時とともに記憶は失われてしまうものといわれますが、震災の記憶とともに今回の発掘調査の成果を地域の歴史として語り継いでいただければ幸いです。

最後になりましたが、現地での発掘調査事業の円滑な推進ならびに報告書刊行にご協力いただきました関係諸機関、各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

神戸市教育委員会

教育長 小川 雄三

例 言

1. 本書は、神戸市須磨区寺田町1丁目・2丁目に所在する戎町遺跡第35次調査（平成13年度）・第38次調査（平成14年度）・第50次調査（平成15年度）・第56次調査（平成16年度）及び神戸市須磨区常磐町1丁目に所在する松野遺跡第32次調査（平成13年度）・第33次調査（平成14年度）・第38次調査（平成15年度）の発掘調査報告書である。

なお、戎町遺跡第35・38次調査及び松野遺跡第32・33次調査については、既に当該年度の『神戸市埋蔵文化財年報』でその概要を報告しているが、本書をもって正式報告とする。

2. 調査は、神戸国際港都建設事業取東第二地区震災復興土地地区西整理事業に伴い、神戸市都市計西総局より委託を受けて実施したもので、神戸市教育委員会・財団法人神戸市体育協会が現地調査を実施した。
3. 本書の執筆は、戎町遺跡第50-4次及び第56-2次調査については中居さやかが、第7章第2節の樹種同定の項については中村大介が、その他の調査については第2表調査担当者一覧に示した各調査担当者が実績報告書及び平成13・14年度『神戸市埋蔵文化財年報』において執筆したものをもとに、藤井太郎がまとめた。

なお、本書の記述は基本的には年度毎に順を追って記し調査の進捗状況を示すものとし、後年度に隣接する調査区で得られた成果により整合するデータ等は特記事項として先の調査成果に書き加えた。

4. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1の地形図「神戸首部」・「神戸南部」を、詳細位置図は、神戸市発行の2,500分の1の地形図「禪昌寺」・「長田」・「東須磨」・「大橋」の一部を使用した。
5. 本書で使用した方位は座標北で、その座標は日本測地系の平面直角座標系第V系である。標高は東京湾中等潮位（T.P.）で表示した。
6. 調査地における遺構写真等については各調査担当者が撮影を行い、遺物写真の撮影については、神戸市埋蔵文化財センターにおいて奈良文化財研究所 牛嶋茂氏の撮影指導の下、杉本和樹氏（西大寺フォト）が行った。
7. 整理作業は水洗・接合・復元・実測を神戸市埋蔵文化財センターにて実施した。上器の実測は戎町遺跡第50-4次及び第56-2次調査分については中居が、その他は藤井が行った。図面の浄書は各担当者が実績報告書、年報作成時に行ったものを編集し、本報告において必要となった新たな図面の浄書は藤井が行った。
8. 本書にかかわる遺物及び記録類は、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。
9. 最後に、現地での調査、また本書の作成にあたっては下記の方々にご協力いただきました。記して深く感謝の意を表します。

都市計画総局西部都市整備課、兵庫県教育委員会 岸本一宏氏、篠宮正氏

また、巻末の一あとがき一において使用させていただきました「震災直後の寺田町1丁目」の写真は、寺田町1丁目にお住まいの岡本美治氏よりお借りいたしました。調査期間中から地震時の様子や震災前の寺田町界隈の様子について伺うことができ、本書の作成に際し、参考にさせていただきました。

本文目次

序

例言

目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査地の位置	1
第2節	調査に至る経緯と経過	2
(1)	調査に至る経緯	2
(2)	事業地内の遺跡について—戎町遺跡・松野遺跡—	4
(3)	発掘調査の経過	7
(4)	発掘調査組織	10
第2章	戎町遺跡 第35次調査の成果	13
第1節	調査の概要	13
第2節	第35—1次調査	14
第3節	第35—2次調査	17
第4節	第35—3次調査	20
第5節	第35—4次調査	22
第6節	第35—5次調査	26
第7節	第35—6・7次調査	27
第8節	第35—8次調査	28
第9節	第35—9次調査	33
第10節	第35—10次調査	37
第3章	戎町遺跡 第38次調査の成果	39
第1節	調査の概要	39
第2節	第38—1次調査	40
第3節	第38—2次調査	41
第4節	第38—3次調査	45
第5節	第38—4次調査	46
第6節	第38—5次調査	47
第7節	第38—6次調査	48
第8節	第38—7次調査	49
第9節	第38—8次調査	50
第10節	第38—9次調査	51
第11節	第38—10次調査	52
第12節	第38—11次調査	55
第13節	第38—12次調査	58

第4章 戎町遺跡 第50次調査の成果	61
第1節 第50次調査の概要	61
第2節 第50-1次調査	62
第3節 第50-2次調査	66
第4節 第50-3次調査	70
第5節 第50-4次調査	74
第6節 第50-5次調査	76
第7節 第50-6次調査	78
第8節 第50-7・8次調査	82
第5章 戎町遺跡 第56次調査の成果	83
第1節 第56次調査の概要	83
第2節 第56-1次調査	84
第3節 第56-2次調査	85
第6章 松野遺跡の発掘調査	91
第1節 はじめに	91
第2節 第32次調査の成果	92
第3節 第33次調査の成果	94
第4節 第38次調査の成果	96
第5節 松野遺跡での調査のまとめ	96
第7章 まとめ	97
第1節 戎町遺跡の調査について	97
第2節 方形周溝墓について	101
第3節 結びにかえて—あとがき—	107

挿図目次

第1図	戎町遺跡・松野遺跡の位置図(1/300,000) ……1	第36図	第38-1次調査区 平・断面図 ……40
第2図	嘉取東第二地区震災復興区画整理事業位置図 ……2	第37図	第38-2次調査区 平・断面図 ……41
第3図	区画整理前・後対照図 ……3	第38図	S B101 平・断面図 ……42
第4図	地形分類図 ……4	第39図	S B101・S D101 出土遺物実測図 ……42
第5図	周辺の遺跡(1/30,000) ……6	第40図	S D201 出土遺物実測図 ……43
第6図	戎町遺跡調査範囲図 ……7	第41図	第38-3次調査区 平・断面図 ……45
第7図	戎町遺跡第35次調査 調査位置図 ……13	第42図	第38-4次調査区 平・断面図 ……46
第8図	第35-1次調査区 平・断面図 ……15	第43図	第38-5次調査区 平・断面図 ……47
第9図	S D02 出土遺物実測図 ……16	第44図	第38-6次調査区及び第41次調査区 平面図 ……48
第10図	第35-2次調査区 S X01 平・断面図 ……17	第45図	第38-7次調査区 平・断面図 ……49
第11図	第35-2次調査区 平・断面図 ……18	第46図	第38-8次調査区 平・断面図 ……50
第12図	第35-3次調査区 平・断面図 ……20	第47図	第38-9次調査区 平面図 ……51
第13図	S X01 平面図及び出土遺物実測図 ……21	第48図	第38-10次調査区 断面図 ……52
第14図	第35-4次調査区 第1遺構面 平面図 ……22	第49図	第1～3遺構面 平面図 ……53
第15図	S B101 平・断面図 ……23	第50図	S D02 出土遺物実測図 ……53
第16図	S B101 出土遺物実測図 ……23	第51図	S K04 平・立面図 ……54
第17図	第35-4次調査区第2遺構面 平・断面図 ……24	第52図	第38-11次調査区 平・断面図 ……56
第18図	S D201・202 出土遺物実測図 ……25	第53図	S K01 平・立面図 ……57
第19図	第35-5次調査区 平・断面図 ……26	第54図	方形周溝墓 平面図 ……57
第20図	第35-6・7次調査区 平・断面図 ……27	第55図	周溝1・2及びS K01 出土遺物実測図 ……57
第21図	第35-8次調査区 断面図 ……28	第56図	第38-12次調査区 平・断面図 ……59
第22図	第1遺構面 平面図 ……28	第57図	S D01・02 平・断面図 ……60
第23図	S B101 平・断面図 ……29	第58図	出土遺物実測図 ……60
第24図	S B101 出土遺物実測図 ……29	第59図	戎町遺跡第50次調査 調査位置図 ……61
第25図	第2遺構面 平面図 ……30	第60図	第50-1次調査区 平・断面図 ……62
第26図	S D205 平・断面図 ……31	第61図	S D01 平・断面図 ……63
第27図	S D205 出土遺物実測図 ……31	第62図	S B01 平・断面図 ……64
第28図	S K202 出土遺物実測図 ……32	第63図	S D01 出土遺物実測図 ……65
第29図	第35-9次調査区 S D201 平・断面図 ……33	第64図	第50-2次調査区及び第49次調査区 平・断面図 ……66
第30図	第2遺構面 平・断面図 ……34	第65図	S D01 平・断面図 ……67
第31図	S D201・S P210 出土遺物実測図 ……35	第66図	S D01・S X02 出土遺物実測図 ……68
第32図	S K210 出土遺物実測図 ……36	第67図	第50-3次調査区 平・断面図 ……70
第33図	S K210 平・断面図 ……36	第68図	S D01 平・断面図 ……71
第34図	第35-10次調査区 平・断面図 ……37	第69図	S D01 出土遺物実測図 ……72
第35図	戎町遺跡第38次調査 調査位置図 ……39		

第70図	S D04	出土遺物実測図	73	第84図	S K02	平・断面図	87
第71図	S D04	平・断面図	73	第85図	第56-2次調査	出土遺物実測図	88
第72図	第50-4次調査区	平・断面図	74	第86図	区画整理前・後対照図		91
第73図	S D06	出土遺物実測図	75	第87図	松野遺跡	調査区配置図	91
第74図	第50-5次調査区	平・断面図	77	第88図	第32-1次調査区	平・断面図	92
第75図	第50-6次調査区	平・断面図	79	第89図	S D04	出土遺物実測図	93
第76図	S X01・S D03・S X03	出土遺物実測図	80	第90図	第33-1次調査区	平・断面図	94
第77図	S X02	出土遺物実測図	81	第91図	松野遺跡	調査区全体図	95
第78図	第50-7次調査区	平・断面図	82	第92図	戎町遺跡	既往調査位置図	97
第79図	第50-8次調査区	平・断面図	82	第93図	集落域を中心とする遺構分布図		100
第80図	戎町遺跡第56次調査	調査位置図	83	第94図	六甲山南麓～明石川流域の方形周溝墓		101
第81図	第56-1次調査区	平面図	84	第95図	戎町遺跡における方形周溝墓分布図		103
第82図	第56-2次調査	I区 平・断面図	85	第96図	第50-6次調査	S X01・02 平・断面図	106
第83図	第56-2次調査	II区 平・断面図	86				

表目次

第1表	周辺の遺跡	5	第2表	調査担当者一覧表	9
第3表	戎町遺跡出土石器 覧	89	第4表	戎町遺跡における既往の調査歴	98
第5表	方形周溝墓検出遺跡一覧	101			

巻頭写真図版目次

巻頭写真図版 1	1	調査地遠景 (1997<平成9>年撮影)
	2	調査地近景 (市営松野住宅より 2005<平成17>年1月17日震災10年目の日撮影)
巻頭写真図版 2		戎町遺跡第50-6次調査区検出の方形周溝墓 (南から)
巻頭写真図版 3		戎町遺跡 方形周溝墓群出土の遺物
巻頭写真図版 4	1	戎町遺跡第56-2次調査区 方形周溝墓出土の遺物
	2	戎町遺跡出土の石器群

挿図写真目次

挿図写真 1	大地小学校6年生現地見学の様子	8
挿図写真 2	復興工事の進む街中	8
挿図写真 3	第51次調査地全景 (北東から)	74
挿図写真 4	第50-4次調査地全景 (東から)	74
挿図写真 5	第56-2次調査II区全景 (北西から)	86
挿図写真 6	第50-3次調査 S D01土器出土状況	104

挿図写真7	第50-3次調査	S D01出土土器内の粘土検出状況	……104
挿図写真8	出土炭化材樹種写真	……	105
挿図写真9	第50-6次調査	S X02土器出土状況	……105
挿図写真10	第53次調査地遺物出土状況(参考)	……	105
挿図写真11	方形瀬溝墓出土土器(個人住宅建設地調査・参考)	……	107
挿図写真12	震災直後の守田町1丁目	……	108
挿図写真13	震災後10年を迎えた守田町1丁目	……	108

写真図版目次

写真図版1	戎町遺跡第35-1次調査	1. 第1遺構面 調査区北半(北から)	2. 第1遺構面 調査区南半(北から)
		3. 第2遺構面 調査区北半(北から)	4. 第1遺構面 S D02遺物出土状況(北から)
写真図版2	戎町遺跡第35-2次調査	1. 第1遺構面 調査区北半(南から)	2. 第1遺構面 調査区南半(北から)
		3. 第1遺構面 S X101遺物出土状況(南から)	
写真図版3	戎町遺跡第35-2次調査	1. 第2遺構面 調査区北半(南から)	2. 第2遺構面 調査区中央(南から)
		3. 第2遺構面 調査区南半(北から)	
写真図版4	戎町遺跡第35-3次調査	1. 調査区全景(東から)	2. S X01遺物出土状況(東から)
写真図版5	戎町遺跡第35-4次調査	1. 第1遺構面 S B101(南から)	2. S B101 カマド周辺遺物出土状況1(南から)
		3. S B101 カマド周辺遺物出土状況2(西から)	
写真図版6	戎町遺跡第35-4次調査	1. 第2遺構面全景(南から)	2. S D201遺物出土状況(北から)
		3. S D202遺物出土状況(東から)	
写真図版7	戎町遺跡第35-5~7次調査	1. 第35-5次調査区全景(南から)	2. 第35-6次調査区全景(東から)
		3. 第35-7次調査区全景(東から)	
写真図版8	戎町遺跡第35-8次調査	1. 1区(東半)第1遺構面全景(西から)	2. 1区(東半)第2遺構面全景(西から)
写真図版9	戎町遺跡第35-8次調査	1. 2区(西半)第1遺構面全景(東から)	2. S B101全景(東から)
写真図版10	戎町遺跡第35-8次調査	1. 2区(西半)第2遺構面全景(東から)	2. S D205遺物出土状況(南から)
写真図版11	戎町遺跡第35-9次調査	1. 1~2区 第2遺構面全景(西から)	2. 3区 第2遺構面全景(西から)

3. 4～5区 第2遺構面全景(東から)

写真図版12 戎町遺跡第35-9次調査

1. S D201遺物出土状況1-石器(東から)
2. S D201遺物出土状況2-土器(東から)
3. S K210遺物出土状況(北から)
4. S K211遺物出土状況(北西から)
5. S B201・S X201遺物出土状況(東から)

写真図版13 戎町遺跡第38-1・3次調査

1. 第38-1次調査区 第1遺構面全景(南から)
2. 同 第2遺構面全景(南から)
3. 第38-3次調査区 第1遺構面全景(東から)
4. 同 第2遺構面全景(東から)

写真図版14 戎町遺跡第38-2次調査

1. 第1遺構面全景(北西から)
2. S B101全景(北西から)

写真図版15 戎町遺跡第38-2次調査

1. 第1遺構面北半全景(南東から)
2. S X101遺物出土状況1(東)
3. 同遺物出土状況2(北)
4. 同遺物出土状況3(南)
5. S D101遺物出土状況(北)

写真図版16 戎町遺跡第38-2次調査

1. 第2遺構面全景(南東から)
2. S D201遺物出土状況(南から)

写真図版17 戎町遺跡第38-4・5次調査

1. 第38-4次調査区 第1遺構面全景(南から)
2. 同 第2遺構面全景(南から)
3. 第38-5次調査区 全景(北から)
4. 同 全景(南から)

写真図版18 戎町遺跡第38-6・7次調査

1. 第38-6次調査区 第1遺構面(南東から) 手前は第41次調査地
2. 同 第2遺構面(南東から)
3. 第38-7次調査区 第1遺構面全景(南西から)
4. 同 第2遺構面全景(北東から)

写真図版19 戎町遺跡第38-8・9次調査

1. 第38-8次調査区全景(北西から)
2. 釜溝検出状況(南東から)
3. 釜溝断面(南東から)
4. 第38-9次調査区全景(北西から)

写真図版20 戎町遺跡第38-10次調査

1. 第2遺構面全景(南東から)
2. 第2遺構面 S D02・04・07及びS K01全景(北西から)
3. 第2遺構面 S D00遺物出土状況(南東から)
4. 第3遺構面全景(北西から)

写真図版21 戎町遺跡第38-10次調査

1. 第3遺構面 S K04 断面(北東から)
2. S K04遺物出土状況(北東から)

写真図版22 戎町遺跡第38-11次調査 調査区全景(北から)

写真図版23 戎町遺跡第38-11次調査

1. 方形周溝墓全景(南東から)
2. 主体部検出状況(北から)

写真図版24 戎町遺跡第38-11次調査

1. S K01全景(東から)
2. S B01全景(北から)

写真図版25 戎町遺跡第38-12次調査 調査区全景(南東から)

写真図版26 戎町遺跡第38-12次調査

1. S D01・02 全景(東から)
2. S D02 遺物出土状況(北から)

写真図版27 戎町遺跡第38-11・12次調査 空撮(垂直)写真 上:第38-11次調査 下:第38-12次調査

- 写真図版28 戎町遺跡第50-1次調査
1. 調査区全景(南東から) 2. S D 01断面(西から)
- 写真図版29 戎町遺跡第50-1次調査
1. S D 02全景(北西から) 2. S B 01全景(北東から)
- 写真図版30 戎町遺跡第50-2次調査
1. 東地区 S D 01全景(北から) 2. 西地区 S X 02全景(東から)
- 写真図版31 戎町遺跡第50-3次調査
1. 調査区南半全景(北西から) 2. 調査区北半全景(南から)
- 写真図版32 戎町遺跡第50-3次調査
1. S D 01全景(南から) 2. 同(北)遺物出土状況(南から) 3. 同(南)遺物出土状況(南から)
- 写真図版33 戎町遺跡第50-3次調査
1. S D 04全景(西から) 2. 南半全景(S D 06~09・S X 01~03・S K 01~03)
- 写真図版34 戎町遺跡第50-5次調査
1. 調査区全景(南東から) 2. 鋤溝検出状況(南東から) 3. S D 01・02全景(北から)
- 写真図版35 戎町遺跡第50-6次調査 調査区全景(北から)
- 写真図版36 戎町遺跡第50-6次調査
1. S X 01遺物出土状況(東から) 2. S X 01穿孔土器出土状況(北東から)
- 写真図版37 戎町遺跡第50-6次調査
1. S X 02全景(南から) 2. S X 02遺物出土状況(北から)
- 写真図版38 戎町遺跡第50-6次調査
1. S D 03遺物出土状況(東から) 2. S X 03遺物出土状況(北西から)
- 写真図版39 戎町遺跡第56-1次調査
1. 調査区全景(東から) 2. 調査区全景(南から)
- 写真図版40 戎町遺跡第56-2次調査
1. S B 01全景(東から) 2. S D 02全景(南から) 3. S K 02全景(北東から)
- 写真図版41 戎町遺跡第35-1・第35-3次調査出土遺物
- 写真図版42 戎町遺跡第35-2次調査出土遺物
- 写真図版43 戎町遺跡第35-4次調査出土遺物
- 写真図版44 戎町遺跡第35-8次調査出土遺物(1)
- 写真図版45 戎町遺跡第35-8次調査出土遺物(2)
- 写真図版46 戎町遺跡第35-9次調査出土遺物
- 写真図版47 戎町遺跡第38-2次調査出土遺物
- 写真図版48 戎町遺跡第38-2次調査・第38-10次調査出土遺物
- 写真図版49 戎町遺跡第38-11次調査・第38-12次調査出土遺物
- 写真図版50 戎町遺跡第50-1次調査・第50-2次調査出土遺物(1)
- 写真図版51 戎町遺跡第50-2次調査出土遺物(2)
- 写真図版52 戎町遺跡第50-3次調査出土遺物(1)
- 写真図版53 戎町遺跡第50-3次調査出土遺物(2)・第50-5次調査出土遺物

- 写真図版54 戎町遺跡第50—6次調査出土遺物(1)
- 写真図版55 戎町遺跡第50—6次調査出土遺物(2)
- 写真図版56 戎町遺跡第56—2次調査出土遺物
- 写真図版57 戎町遺跡第35・38・50・56次調査出土石器(1) —集合
- 写真図版58 戎町遺跡第35・38・50・56次調査出土石器(2)
- 写真図版59 松野遺跡第32—1次調査
1. 調査区全景(北から) 2. S D 01全景(北から) 3. S D 02全景(北から)
- 写真図版60 松野遺跡第32—2次調査
1. 調査区全景(南東から) 2. S D 05全景(北から)
- 写真図版61 松野遺跡第32—2次調査
1. S D 04全景(北から) 2. S D 04遺物出土状況(南から) 3. S D 04出土遺物
- 写真図版62 松野遺跡第33次調査
1. 第33—1次調査区全景(北から) 2. 第33—2次調査区全景(南東から)
- 写真図版63 松野遺跡第38次調査(1)
1. 第38—1次調査柱穴検出状況(南から) 2. 第38—2次調査区全景(北西から)
- 写真図版64 松野遺跡第38次調査(2)
1. 第38—3次調査区全景(北西から) 2. 第38—4次調査区全景(南から)

第1章 はじめに

第1節 調査地の位置

震災復興土地区画整理事業鷹取東第二地区は、神戸市須磨区の南東部、長田区との区界に位置する。

主要地方道神戸・明石線を挟み、地区の北側は山陽電鉄板宿駅前の商業地域に接し、飲食店やその周囲に住宅地が広がる。長田区に近い地区の南、寺田町、千歳町、常磐町界隈には、神戸の著名な地場産業であるケミカルシューズの製造を主とするゴム関連の軽工業の工場と住宅が混在している。

付近は早くから市街地化が進んでいたが、神戸市営地下鉄山手線の延伸に伴い、西神ニュータウン等へのアクセスの要衝として新長田・板宿駅という二つの駅間に位置する利便性から、神戸の市街地、西の中心地として発展してきた。

今回の区画整理事業地内には戎町遺跡・松野遺跡の二箇所の埋蔵文化財包蔵地が存在し、寺田町1・2丁目及び常磐町1丁目の範囲において工事に先立ち、文化財に影響を及ぼす街路部分で発掘調査を実施した。

地形的には六甲山系の南面に広がる平野部の西端に位置し、西に妙法寺川、東に蒔深川が南流し、両河川により形成された複合扇状地から沖積地上への境付近に両遺跡は立地する。戎町遺跡付近での現標高は約14m、松野遺跡付近では標高約8mを測り、緩やかな南下がりの地形を呈する。



第1図 戎町遺跡・松野遺跡の位置図 (1/300,000)

第2節 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

平成7年1月17日未明に突然発生した地震は、神戸市を含む兵庫県南部を中心とする地域に甚大な被害を及ぼした。事業地周辺は軽工業の工場や住宅が密集する地域であったため、一面に火の手が回り、ほとんどの建物はその姿を消してしまった。

災害に強く、また居住性に優れた快適な街づくりをめざし、平成9年度に鷹取東第二地区として震災復興都市計画事業が決定し、新たな区画整備が策定された。当地域における埋蔵文化財の状況については北側に戎町遺跡、南側に松野遺跡という著名な遺跡の存在が知られており、当事業地においても埋蔵文化財への影響が予測された。

事業が進む平成13年7月に戎町遺跡に隣接する寺田町2丁目において試掘調査を実施した。調査の結果、弥生時代の遺構・遺物が確認され、遺跡範囲の拡大として埋蔵文化財の包蔵地に指定される。またこの成果に基づき、東の寺田町1丁目の範囲についても同年9～11月に試掘調査を実施し、同様に弥生時代の遺構・遺物が発見された。これを受け、寺田町1・2丁目の街路部分については、早急に発掘調査の実施が必要となった。

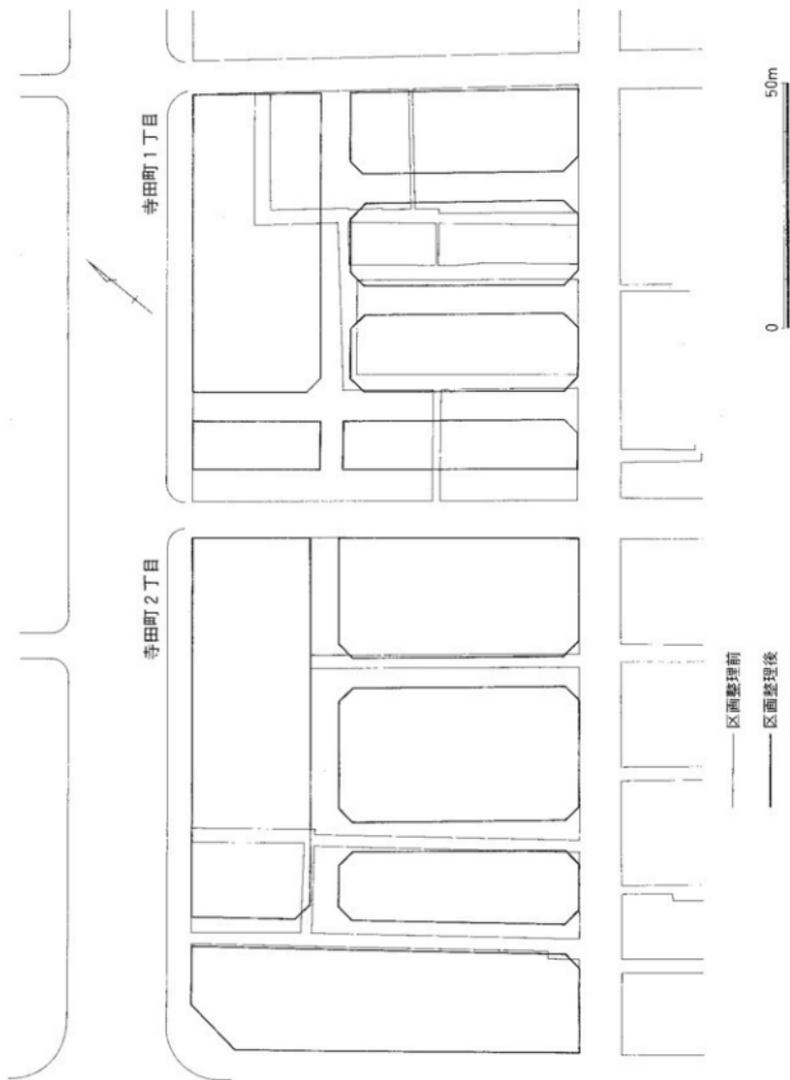
また、松野遺跡の範囲に含まれる常磐町1・2丁目については、遺跡の残存状況の確認を中心に試掘調査を実施した。結果、常磐町1丁目の範囲では弥生時代～古墳時代と考えられる遺物包含層が確認され、発掘調査が必要と判断された。また常磐町2丁目の範囲については既に遺跡が削平されている状況が確認され、今回の試掘調査の結果により、松野遺跡の範囲から削除されることとなった。

事業地内の発掘調査は換地指定の進捗状況や、建物の移転、従前建物の基礎の撤去・除却作業が完了し、発掘調査の実施が可能な範囲から都市計画総局と協議の上、鋭意進めることとした。

同年11月に寺田町2丁目第1次調査を開始し、以降、平成16年4月に発掘調査対象街路部の調査を完了するまでに4カ年を要した。



第2図 鷹取東第二地区震災復興土地区画整理事業位置図



第3図 区画整理前・後対照図

(2) 事業地内の遺跡について—戎町遺跡・松野遺跡—

妙法寺川、菊深川により形成された扇状地末端から沖積地上に立地する戎町遺跡・松野遺跡は、両川流域の代表的な遺跡であり、これまでに多くの発掘調査が実施され、付近の中心的な集落遺跡であることが判明している。

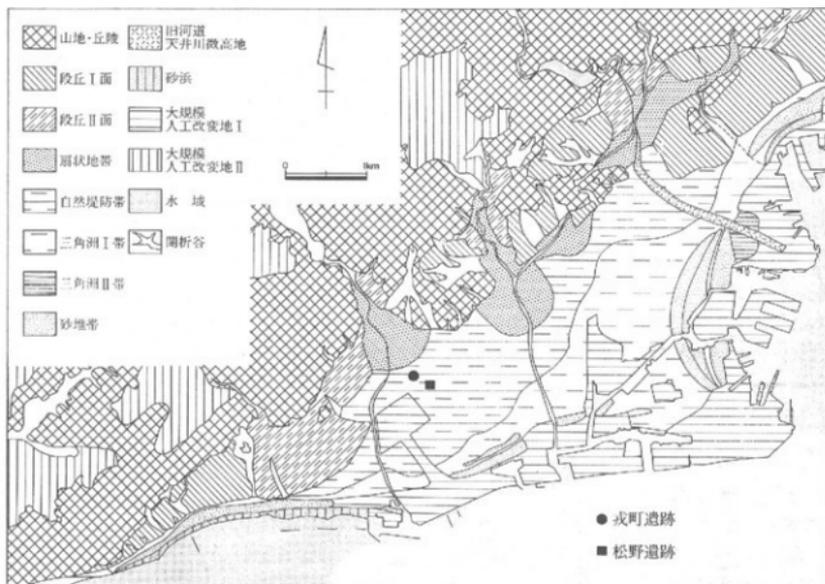
戎町遺跡は、今回の鷹取東第二地区区画整理事業に伴い新たに寺田町1・2丁目の範囲で遺跡の広がりが確認され、須磨区の南東部、板宿駅の周辺から南にかけての地域、東西約500m、南北約800mに及ぶ広大な遺跡となった。

遺跡の発見は昭和62年のビルの再開発に伴う調査が契機で、弥生時代前期の水田址や大銀木製品の出土、木製農具貯蔵施設と考えられる円形杭列等が検出された。以降、豊富な遺物の出土や多くの遺構が検出され、特に弥生時代の遺構・遺物の検出状況から西摂平野西端の拠点集落と想定されている。

但し、発掘調査の件数は多いものの、大規模な調査はあまり実施されておらず、遺跡の範囲に比して調査面積は極限られたものであり、全容を知るには未だ程遠い状況にある。

一方、松野遺跡は昭和56年の市営松野住宅の建設に伴い発見された遺跡で、古墳時代後期の掘立柱建物とそれを取り囲む柵列の検出は、その後の同様の居館遺構の発見の先駆けとなり、神戸市域における古墳時代の代表的な遺跡として位置付けられる。

近年はJR新長田駅周辺での再開発事業に伴う調査により、古墳時代の竪穴住居等の遺構の検出や遺物の出土があり、居館遺構を取り巻く当時の様相が明らかになりつつある。



第4図 地形分類図 (S=1:6,000)

高橋孝「第6章考察編 第1節 戎町遺跡の地形環境—澗川・妙法寺川流域の地形環境Ⅰ—」

山本雅和「戎町遺跡第1次発掘調査概報」1989 神戸市教育委員会所収 P.P.95 第60図 地形分類図を一部改変

周辺の遺跡

両遺跡の周辺には多くの遺跡が存在する。特に今回の事業同様、震災復興に伴う発掘調査によりその内容が知られた遺跡も多い。以下、代表的なものを記す。

番号	遺跡名	時代	主な遺構・遺物
1	戎町遺跡	弥生時代前期～室町時代	(弥生前期) 水田・円形杭列・広域未製品
2	松野遺跡	弥生時代後期～鎌倉時代	(古墳中期) 居館・(古墳後期) 竪穴住居・掘立柱建物
3	祇園遺跡	弥生時代後期～江戸時代	(平安末期) 庭園遺構
4	榑・荒田町遺跡	弥生時代前期～鎌倉時代	(弥生前期) 貯蔵穴・(弥生中期) 方形周溝墓
5	大開遺跡	縄文時代晩期～鎌倉時代	(弥生前期) 環濠集落
6	兵庫津遺跡	奈良時代～江戸時代	(中世) 礎石建物(江戸時代) 町屋
7	上沢遺跡	縄文時代晩期～鎌倉時代	(古墳中期) 大壁遺造物・(奈良・平安) 掘立柱建物・井戸・銅鍋
8	長田神社境内遺跡	縄文時代～鎌倉時代	(弥生後期) 竪穴住居・小型仿製鏡
9	御蔵遺跡	弥生時代後期～鎌倉時代	(飛鳥～平安) 掘立柱建物
10	神楽遺跡	弥生時代後期～平安時代	(古墳後期) 竪穴住居・(平安) 掘立柱建物
11	水笠遺跡	弥生時代中期～鎌倉時代	(弥生中期) 溝
12	二葉町遺跡	奈良時代～鎌倉時代	(鎌倉) 掘立柱建物・井戸・井戸転用舟
13	大田町遺跡	古墳時代～平安時代	(奈良・平安) 掘立柱建物
14	大手町遺跡	弥生時代中期～江戸時代	(弥生後期) 竪穴住居・溝
15	得能山古墳	古墳時代前期	竪穴式石室・内行花文鏡・面文帯神獸鏡

第1表 周辺の遺跡

参考文献

- 1 戎町遺跡
 - 山本雅和 1989 「戎町遺跡第1次発掘調査概報」神戸市教育委員会
 - 山本雅和 1998 「戎町遺跡第19次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財調査年報』神戸市教育委員会
 - 山口英正 1999 「戎町遺跡第15次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財調査年報』神戸市教育委員会
- 2 松野遺跡
 - 千穂浩編 1983 「松野遺跡発掘調査概報」神戸市教育委員会
 - 口野博史編 2001 「松野遺跡発掘調査報告書 第3～7次調査」神戸市教育委員会
 - 関野豊編 2002 「松野遺跡第11～23・25・26・29～31次 水笠遺跡第2・3・5～15・17～21次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 3 祇園遺跡
 - 須藤宏 1997 「祇園遺跡第2次調査」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
 - 富山直人 2000 「祇園遺跡第5次発掘調査調査報告書」神戸市教育委員会
- 4 榑・荒田町遺跡
 - 丸山潔 1980 「榑・荒田町遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会
 - 丸山潔 1990 「榑・荒田町遺跡Ⅱ」神戸市教育委員会
- 5 大開遺跡
 - 前田佳久 1993 「大開遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 6 兵庫津遺跡
 - 岡田章一編 2002 「兵庫津遺跡Ⅱ」兵庫県教育委員会
 - 内藤俊哉 2001 「兵庫津遺跡第15次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 7 上沢遺跡
 - 口野博史・関野豊 2002 「上沢遺跡第33次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 8 長田神社境内遺跡
 - 谷正俊福 2003 「上沢遺跡Ⅲ」神戸市教育委員会
 - 黒田恭正 1990 「長田神社境内遺跡発掘調査概要」神戸市教育委員会
 - 藤井太郎・丸杉俊一郎 2000 「長田神社境内遺跡第10次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 9 御蔵遺跡
 - 安田滋編 2001 「御蔵遺跡第4・6・14・32次調査報告書」神戸市教育委員会
 - 安田滋編 2001 「御蔵遺跡第17・38次調査報告書」神戸市教育委員会
 - 谷正俊福 2003 「御蔵遺跡Ⅴ 第26・37・45・51次調査」神戸市教育委員会
- 10 神楽遺跡
 - 菅本宏明 1981 「神楽遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 11 水笠遺跡
 - 関野豊編 2002 「松野遺跡第11～23・25・26・29～31次 水笠遺跡第2・3・5～15・17～21次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 12 二葉町遺跡
 - 川上厚志編 2001 「二葉町遺跡第3・5・8・9・12次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 13 大田町遺跡
 - 森内秀造・山上雅弘 1993 「神戸市須磨区大田町遺跡発掘調査報告書」兵庫県教育委員会
 - 口野博史・川上厚志 1994 「大田町遺跡第2次調査」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 14 大手町遺跡
 - 中谷正樹 2003 「大手町遺跡 第1～4・6次発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 15 得能山古墳
 - 喜谷美堂 1989 「古墳時代 前方後円墳の成立と発展」『新修神戸市史 歴史編1』神戸市



第5図 周辺の遺跡 (1/30,000)

(3) 発掘調査の経過

平成13年7月～11月に実施した事業地内での試掘調査の結果から早急な発掘調査の必要性が生じ、同8月より建物の移転、従前建物の基礎の撤去・除却作業が完了し発掘調査の実施が可能な範囲から都市計画総局と協議の上、鋭意進めることとなった。

同年8月に寺田町2丁目目で第1次調査（枝番号一以降同じ）を開始し、以降平成16年4月に発掘調査対象街路部の調査を完了する。

平成13年度

戎町遺跡第35次調査・松野遺跡第32次調査

戎町遺跡の調査は寺田町2丁目の街区から実施し、第1次調査では弥生時代中期の遺構面2面を検出し、柱穴、溝を確認した。生活道路部を残し、また残土置き場の関係から掘削範囲を南北に2分割して反転作業する制約のかかる調査であったが、戎町遺跡における弥生時代の遺構・遺物の広がり方が確認された。その後寺田町2丁目の街区北西部では竪穴住居が確認される等の成果が得られた。

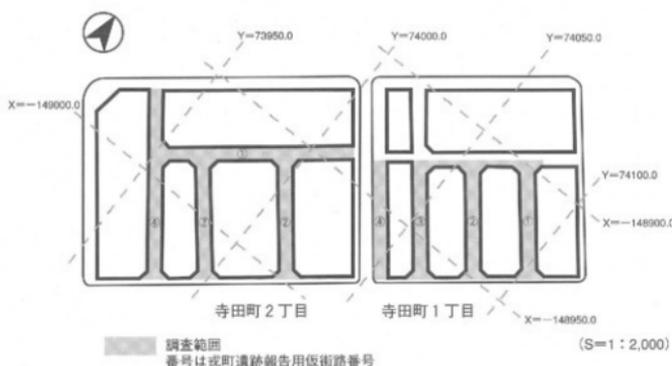
また同年12月からは寺田町1丁目の範囲において、15～40㎡の小規模な面積ではあったが掘削可能な範囲の調査を順次実施し、弥生時代中期の遺構の広がり方が確認された。第3・4次調査では方形周溝墓に伴う溝（状遺構）を確認し、弥生時代中期の墓域の存在を予測させる結果が得られた。さらに第4次調査では古墳時代後期の竪穴住居が確認された。

常磐町1丁目での調査は平成14年1月より開始した。遺物包含層からの出土遺物は少ないものの弥生時代後期の大規模な溝を検出した。2箇所で開催した調査でこの一連の溝を確認した。

平成14年度

戎町遺跡第38次調査・松野遺跡第33次調査

戎町遺跡では寺田町2丁目で昨年度実施した調査区の近隣において、既存建物の除却等が未了のため調査が行えなかった部分を中心に小規模な調査を実施した。またこの頃から新たな街路に面して個人住宅の建設がはじまり、同時に調査を実施するよう効率化を図ることに努めた。街区の北西部では引き続き竪穴住居や



第6図 戎町遺跡調査範囲図

柱穴・土坑を検出し、集落域の広がりを確認した。

寺田町1丁目では中央から東にかけての街路部で比較的面积の大きな調査を実施することができた。昨年度に引き続き、主体部等の残りは悪いものの方形周溝墓を検出し、また周溝墓を構成するものと考えられる溝を部分的に確認している。

街区の北半では鋤跡が明瞭に残る耕作痕が遺存しており、広範囲に分布する遺構として認識される。但し、遺物の出土はなく、時期については他の遺構との切り合いにも欠け、不明な部分が残った。

常磐町1丁目では2箇所で開催したが、顕著な遺構の検出はなかった。遺物・遺構の残りが悪いものか、あるいは遺構の分布状況が希薄になるのか判然としなかった。

平成15年度

戎町遺跡第50次調査・松野遺跡第38次調査

戎町遺跡においては前年度までに調査予定範囲の半分以上の調査を完了しており、残りの部分と個人住宅の建て替えに伴い住宅前面道路部分の調査を同時に実施する例が増えた。小規模な調査地においても地元と都市計画総局の協力を得て、近隣に残上置き場を確保して調査を実施することが可能となり、円滑に調査が進められた。寺田町1丁目では方形周溝墓を構成する溝（状遺構）の検出が続き、良好な状態で供献土器の遺存する状況が確認された。

平成15年12月には大地小学校の6年生が現場を訪れ、地元の遺跡に親しんでもらう機会を得た。また須磨区長、まちづくり推進課が見学を訪れ、翌年度には大黒プラザにおいて「須磨区の遺跡・戎町遺跡展」が開催された。

常磐町1丁目の調査は最終年度となり、残りの部分の調査を行ったが、従前建物の基礎や地下鉄敷設工事時の開削により遺構はほとんど残っておらず、顕著な遺構の発見はなかった。

平成16年度

戎町遺跡第56次調査

戎町遺跡の調査も最終年度を迎え、寺田町1・2丁目に残り1箇所ずつの調査を実施した。

街路予定部分ですべての建物の移転が完了し、寺田町2丁目では、前年度までに調査を実施した調査区の両端で遺構の続きを確実に検出した。寺田町1丁目では2丁目に比して遺構面の削平の度合いが強く、北側へ行くほど残りは悪い状況にあった。



挿図写真1 大地小学校6年生 現地見学の様子



挿図写真2

復興工事の進む街中（手前は個人住宅建設に伴う調査地）
〈調査完了とともに早急に埋設管工事が進む街路部〉

現地での調査は複数の年度に渡り、細分化して行われたため、調査区内の基本層序の記載等については各調査担当者の認識により、また調査地点毎に全く堆積層が異なる部分が多い。報告では調査時の表記方法に基づくが、標準的な状況は下記の通りである。

戒町遺跡では①表土・盛土・擾乱層（瓦礫・基礎等）

②灰色砂質土（旧耕土～複数層）

③暗灰褐色～褐色（砂質）シルト（寺田町2丁目中央付近上層包含層）

黒褐色シルト（寺田町1・2丁目包含層）

④灰色～灰褐色砂質土（寺田町2丁目中央付近第1遺構面基礎層及び下層包含層）

⑤灰黄色～黄色系（砂質）シルト（寺田町1丁目遺構面・2丁目第2遺構面基礎層）

遺構面までの深さは、寺田町2丁目の西半では第1遺構面までは50～80cm、第2遺構面までは70～90cm、寺田町1丁目の北半では20～30cm、南半では60cmほどを測る。（松野遺跡については第6章にて記す。）

戒町遺跡						
調査次数	枝番	調査期間	調査地区	調査面積	遺構面数	調査担当者
平成13年度 (2001)						
35次	1	2001.08.09～2001.08.31	寺田町2丁目	55㎡	2面	東暮代秀
	2	2001.10.04～2001.11.12	寺田町2丁目	120㎡	2面	池田敏
	3	2001.12.03～2001.12.20	寺田町1丁目	35㎡	1面	山口英正
	4	2001.12.03～2001.12.20	寺田町1丁目	40㎡	2面	山口英正
	5	2001.12.03～2001.12.20	寺田町1丁目	15㎡	1面	山口英正
	6	2001.12.03～2001.12.20	寺田町1丁目	20㎡	1面	山口英正
	7	2001.12.03～2001.12.20	寺田町1丁目	15㎡	1面	山口英正
	8	2001.12.07～2002.01.28	寺田町2丁目	115㎡	2面	池田敏
	9	2001.12.28～2002.02.19	寺田町2丁目	260㎡	1面	山口英正
	10	2002.01.16～2002.01.17	寺田町2丁目	7㎡	2面	山口英正
平成14年度 (2002)						
38次	1	2002.05.13～2002.06.04	寺田町2丁目	16㎡	2面	井原格
	2	2002.05.13～2002.06.18	寺田町2丁目	40㎡	2面	井原格
	3	2002.06.03～2002.06.21	寺田町2丁目	23㎡	2面	井原格
	4	2002.06.19～2002.06.28	寺田町2丁目	29㎡	2面	井原格
	5	2002.07.15～2002.07.29	寺田町1丁目	75㎡	1面	井原格
	6	2002.07.23～2002.07.25	寺田町2丁目	4㎡	2面	西原巧次
	7	2002.07.29～2002.08.03	寺田町2丁目	52㎡	2面	井原格
	8	2002.08.19～2002.09.06	寺田町1丁目	120㎡	1面	川上寿三
	9	2002.10.21～2002.10.28	寺田町1丁目	38㎡	1面	石島三和
	10	2002.11.13～2002.12.15	寺田町2丁目	30㎡	3面	須藤宏
	11	2003.02.12～2003.03.05	寺田町1丁目	150㎡	1面	山口英正
	12	2002.02.19～2003.03.11	寺田町1丁目	130㎡	1面	山口英正
平成15年度 (2003)						
50次	1	2003.06.06～2003.06.25	寺田町1丁目	95㎡	1面	山口英正
	2	2003.06.07～2003.06.26	寺田町1丁目	15㎡	1面	藤井太郎
	3	2003.07.02～2003.08.05	寺田町2丁目	100㎡	1面	藤井太郎
	4	2003.07.16～2003.07.22	寺田町1丁目	25㎡	1面	中扇さやか
	5	2003.08.06～2003.08.27	寺田町1丁目	60㎡	1面	藤井太郎
	6	2003.11.14～2003.12.26	寺田町1丁目	80㎡	1面	藤井太郎
	7	2003.11.18	寺田町1丁目	10㎡	1面	藤井太郎
	8	2004.01.14	寺田町1丁目	6㎡	1面	藤井太郎
平成16年度 (2004)						
56次	1	2004.04.05～2004.04.20	寺田町1丁目	61㎡	1面	石島三和
	2	2005.06.14～2005.06.28	寺田町2丁目	75㎡	1面	中扇さやか

松野遺跡						
調査次数	枝番	調査期間	調査地区	調査面積	遺構面数	調査担当者
平成13年度						
32次	1	2002.01.22～2002.02.04	常盤町1丁目	55㎡	1面	井原格
	2	2002.02.05～2002.02.26	常盤町1丁目	150㎡	1面	井原格
平成14年度						
33次	1	2002.04.15～2002.04.24	常盤町1丁目	50㎡	1面	井原格
	2	2002.08.19～2002.08.27	常盤町1丁目	40㎡	1面	渡谷誠吾
平成15年度						
38次	1	2003.05.21～2003.05.23	常盤町1丁目	36㎡	1面	山口英正
	2	2003.05.27～2003.05.29	常盤町1丁目	200㎡	1面	山口英正
	3	2003.09.16～2003.09.26	常盤町1丁目	65㎡	1面	阿部裕生
	4	2003.09.26～2003.10.06	常盤町1丁目	63㎡	1面	阿部裕生

第2表 調査担当者一覧

(4) 発掘調査組織

発掘調査は神戸市文化財保護審議会の指導のもと、以下の組織で実施した。

平成13～16年度

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）

植上重光	前神戸女子短期大学教授
工藤善通	ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長（平成13～14年度） 大阪府立狭山池博物館館長（平成13～16年度）
和田晴吾	立命館大学文学部教授

平成13年度（現地調査）

教育委員会事務局

教育長	木村 良一
社会教育部長	岩畔 法夫
文化財課長	桑原 泰豊
社会教育部主幹	奥田 哲通
社会教育部主幹	宮本 郁夫（1月～）
社会教育部主幹	渡辺 伸行
（埋蔵文化財指導係長事務取扱）	
埋蔵文化財調査係長	丹治 康明
文化財課主査	宮本 郁雄（～12月）
同	丸山 潔
同	菅本 宏明
同	千種 浩
事務担当学芸員	斎木 巖
保存科学担当学芸員	中村 大介
調査担当学芸員	東 喜代秀

(財) 神戸市体育協会

会長	笹山 幸俊
副会長	木村 良一
同	鞍本 昌男
（専務理事事務取扱）	
同	山田 隆
同	家治川 豊
常務理事	静観 圭
総務課長	前田 豊春
事業係長	瀬田 良則
事業係長（兼務）	丸山 潔
同	菅本 宏明
事務担当学芸員	斎木 巖
調査担当学芸員	山口 英正・池田 毅
	井尻 格

平成14年度（現地調査）

教育委員会事務局

教育長	西川 和機
社会教育部長	岩畔 法夫
文化財課長	桑原 泰豊
社会教育部主幹	宮本 郁雄
社会教育部主幹	渡辺 伸行
（埋蔵文化財指導係長事務取扱）	
埋蔵文化財調査係長	丹治 康明
文化財課主査	丸山 潔
同	菅本 宏明
同	千種 浩
事務担当学芸員	内藤 俊哉
調査担当学芸員	西岡 巧二・須藤 宏
	浅谷 誠吾・井尻 格
	石島 三和
保存科学担当学芸員	中村 大介

(財) 神戸市体育協会

会長	久田 立郎
副会長	鞍本 昌男
（専務理事事務取扱）	
常務理事	梶井 昭志
総務課長	谷川 博志
総務課主査（兼務）	丸山 潔
同	菅本 宏明
事務担当学芸員	池田 毅
調査担当学芸員	山口 英正・川上 厚志

平成15年度（現地調査）

教育委員会事務局

教 育 長	西川 和機
社会教育部長	高橋 英比古
参 事	桑原 泰豊
(文化財課長事務取扱)	
社会教育部主幹	宮本 郁夫
(埋蔵文化財センター事務取扱)	
社会教育部主幹	渡辺 伸行
(埋蔵文化財指導係長事務取扱)	
埋蔵文化財調査係長	丹治 康明
文化財課主査	丸山 潔
同	菅本 宏明
同	千種 浩
事務担当学芸員	内藤 俊哉
調査担当学芸員	山口 英正・藤井 太郎
	中居 さやか
保存科学担当学芸員	中村 大介

(財) 神戸市体育協会

会 長	矢田 立郎
副 会 長	矢野 栄一郎
(専務理事事務取扱)	
常務理事	野波 建作
総務課長	谷川 博志
総務課主査(兼務)	菅本 宏明
事務担当学芸員	中谷 正
調査担当学芸員	阿部 敬生

平成16年度（現地調査・遺物整理報告書作成）

教育委員会事務局

教 育 長	小川 雄二
社会教育部長	高橋 英比古
参 事	桑原 泰豊
(文化財課長事務取扱)	
社会教育部主幹	宮本 郁夫
(埋蔵文化財センター所長事務取扱)	
社会教育部主幹	渡辺 伸行
(埋蔵文化財指導係長事務取扱)	
埋蔵文化財調査係長	丹治 康明
文化財課主査	丸山 潔
同	菅本 宏明
事務担当学芸員	東 喜代秀
調査担当学芸員	石島 三和
	中居 さやか
遺物整理担当学芸員	谷 正俊
同	藤井 太郎・中居 さやか
保存科学担当学芸員	中村 大介

(財) 神戸市体育協会

会 長	矢田 立郎
副 会 長	矢野 栄一郎
(専務理事事務取扱)	
常務理事	野波 建作
総務課長	横関 勇
総務課主査(兼務)	菅本 宏明

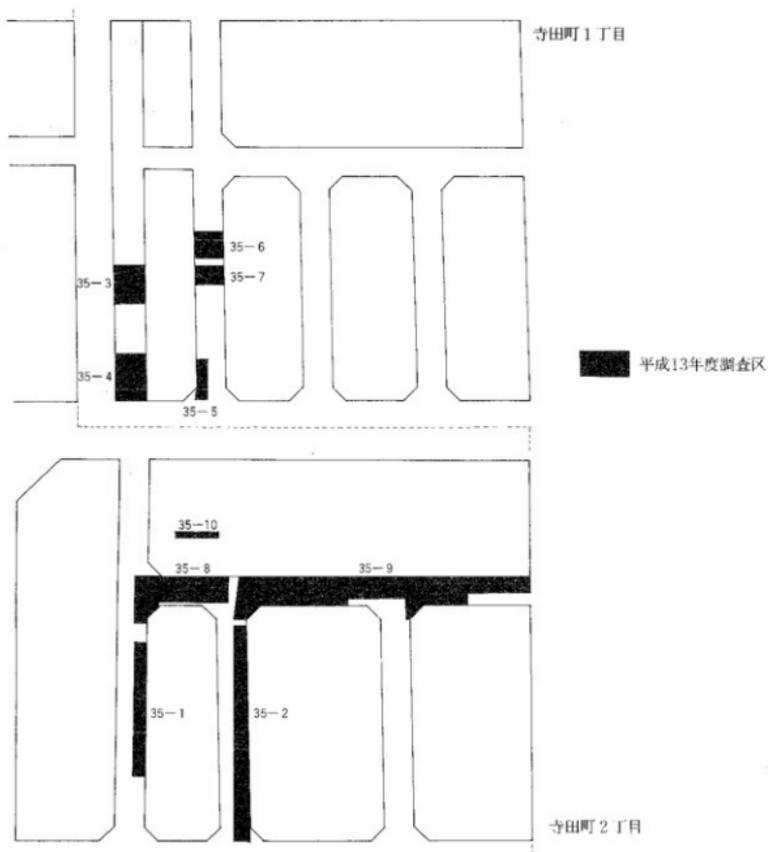
第2章 戎町遺跡 第35次調査の成果

第1節 第35次調査の概要

鷹取東第二地区復興区画整理事業にかかる寺田町1・2丁目内における戎町遺跡の発掘調査で、平成13年度に実施した調査箇所は第7図に示した通りである。

調査は都市計画総局と調整を行い、建物移転、基礎等の障害物の除却が完了した範囲から開始した。

寺田町1丁目内で5箇所、2丁目内で5箇所の計10地点の調査区を設定して実施した。寺田町2丁目では東西街路と西半の南北街路の調査を実施し、街区の中央から南半にかけての様相が明らかになった。寺田町1丁目では上に南西部分での様相が明らかになった。



第7図 戎町遺跡第35次調査 調査地位置図

第2節 第35-1次調査

1. 調査の概要

寺田町2丁目④番街路の調査である。現道部を残し、街路予定部東半分を調査区として設定した。南北長22m、東西幅2.5mのトレンチである。残土置き場の関係から南北に反転して調査した。

調査区の基本層序は、攪乱・旧耕土を除去すると黒褐色シルト層、暗褐色シルト層、灰褐色細砂層となる。このうち黒褐色シルト層と暗褐色シルト層が遺物包含層であり、暗褐色シルト層上面と灰褐色細砂層上面で遺構を検出した。遺物包含層までの深さは、現地表下60～70cmである。

2. 検出遺構と出土遺物

(1) 第1遺構面

暗褐色シルト層上面で検出した遺構面でピット約40基、溝2条（SD01・02）、土坑1基を検出した。

溝

調査区内ではいずれも一部を検出したのみである。

SD01

調査区北側で検出した。調査区内では幅約1.5m、深さ40cmを測り、断面はV字形を呈する。

SD02

調査区中央から南端にかけて検出した溝である。調査区内では最大幅約5m、深さ30cmを測る。L字状に折れ曲がるようだが、調査区の制約から明確ではない。理上は上層に砂礫層が、下層にはシルト層の堆積が見られる。南端の屈曲部、やや溝幅の狭くなる部分の溝底から壺1個体分が出土した。

1は口径35cm、器高67cmを測る広口壺である。体部は半分以上が細片となっていた為、全体の3分の1が復元できたに過ぎないが、腹径は35cmを測る。頸部には断面三角形の突帯を4条貼り付ける。突帯下と胴部中央にそれぞれ直線文1単位と波状文1単位をセットとする浅い飾描文があり、その間に直線文1単位で区画する斜格子文を施す。頸部から開きながら直線的に上方にのびる口縁端部は上下にやや拡張し、端面の外側に斜格子文を刻むが、間隔に疎密があり、綾杉状になる等全体として粗い感がある。内面は磨耗がひどく調整は不明である。体部外側下半の残りも悪いが、部分的に横方向、また縦方向の細かいヘラ磨きの痕跡が認められる。2は口径18cm、器高31cmを測る甕である。口縁は「く」の字状に強く屈曲し、端面を持つように強くナデ上げる。外面には6条/cmのハケ調整を全面に施す。内面は頸部下にハケ調整が残り、体部中位にナデ上げの痕跡が見える。全体に器壁は薄く、シャープな作りである。

ピット

いずれも直径20～40cm、深さ10～25cmを測るが、調査区内では建物として纏まるものはなかった。

土坑

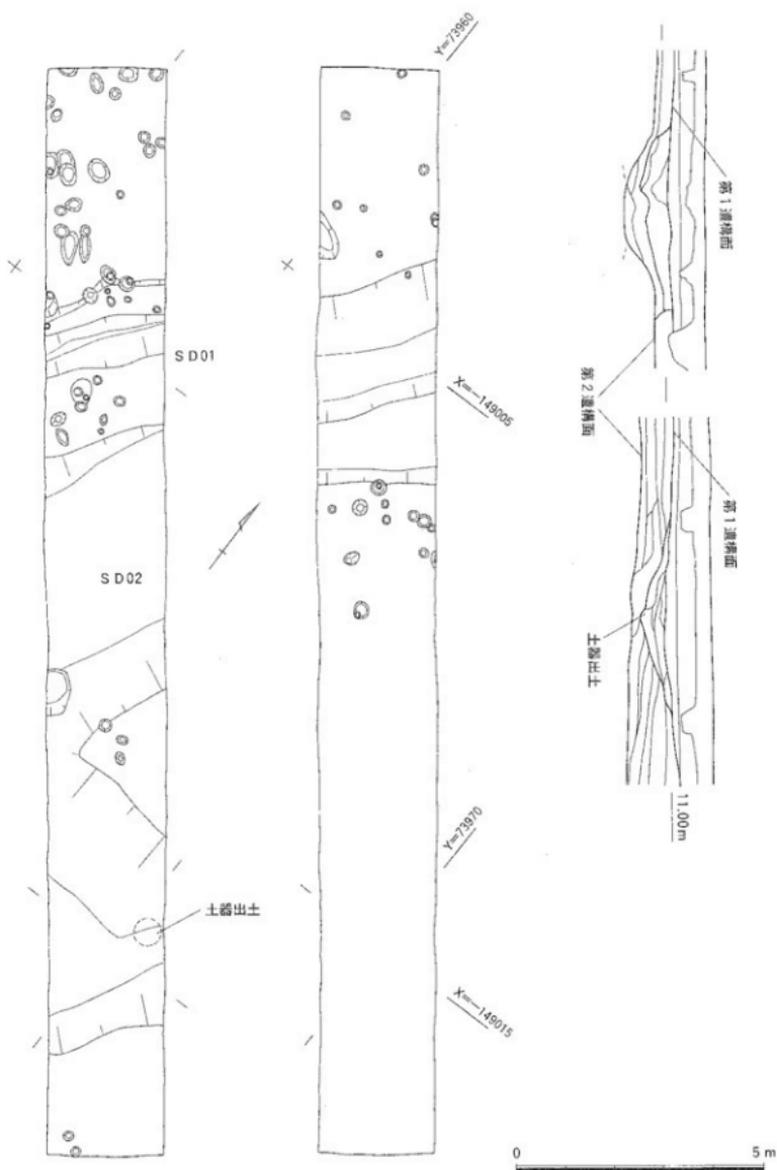
全体の規模は不明であるが、直径90cm以上、深さ40cmのものである。遺物は小片かつ少量の出土である。

(2) 第2遺構面

第1遺構面を形成する暗褐色シルト層に土器を含んでおり、この層を除去したところ灰褐色細砂層上面で第2遺構面を検出した。検出した遺構は、ピット20基、溝1条である。なお調査区南半部は礫層と粗砂層の堆積がみられ、安定した面は存在していない。

ピット

いずれも直径20～30cm、深さ25～30cmのもので、建物として纏まるものはなかった。出土遺物も少なく、時期は不明である。



第8図 第35-1次調査区 平・断面図

溝

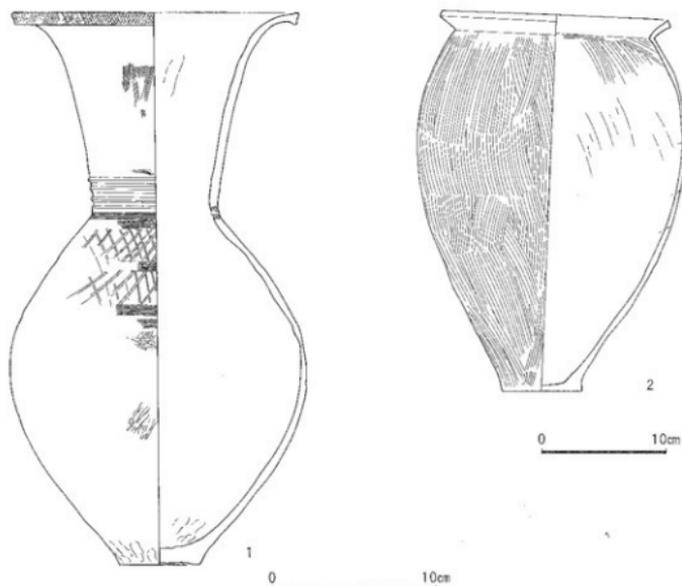
一部を検出したのみであるが、幅約4m、深さ60cmの規模である。第1遺構面で検出したSD01の下位に位置しており、第1遺構面のSD01はこの溝が埋没する過程で存在していたものと考えられる。小片の遺物が含まれる程度である。

3. 小 結

第1遺構面

SD02出土土器及び小片ではあるがその他の遺構から弥生時代第Ⅲ～Ⅳ様式の土器が出土しており、遺構が形成されたのは弥生時代中期中葉～後葉にかけての時期と考えられる。

調査区の南半部については下層に安定した土壌は存在せず、また第1遺構面でも遺物包含層である黒褐色シルト層の堆積が薄くなり、南端では認められなくなる。遺構も傾らであり、おそらく戎町遺跡の南端部にあたっているものと考えられる。第2遺構面以下については遺構面になり得る層や遺物は確認されなかった。



第9図 SD02 出土遺物実測図

第2遺構面

出土遺物がいずれも小片であるため明確ではないが、遺物包含層及び遺構埋土からは弥生時代第Ⅲ様式の土器が出土しており、遺構が形成された時期は弥生時代中期中葉頃と考えられる。わずかに遺構を検出したが北側の基盤層も不安定であり、流路により運ばれた土砂により徐々に生活面が形成される段階といえる。第1遺構面との時期差はあまりないものと考えられる。

第3節 第35-2次調査

1. 調査の概要

寺田町2丁目③番街路の調査である。第35-1次調査区と同様、現道が存在することから東半分を調査区として設定した。南北40m、東西幅2~3mのトレンチである。残土置き場の関係からまず北半部の調査を行い、その後反転して南半部の調査を実施した。

基本層序は箇所によっては若干層位が異なるが、概ね上層より現代盛土、2~4層の旧耕土層、黒褐色粘砂土（遺物包含層）、濃褐色粘砂土（遺物包含層）の順で、黒褐色粘砂土の下層上面が第1遺構面、濃褐色粘砂土の下層上面が第2遺構面となる。第2遺構面を形成する層から僅かに土器の小片が出土するものの、下層については遺構面になり得る層位は確認されなかった。遺構面までの深さは第1遺構面が現地地表下50~80cm、第2遺構面が現地地表下70~90cmである。

2. 検出遺構と出土遺物

(1) 第1遺構面

土坑、溝、ピット、落ち込み等の遺構が検出された。遺構は比較的小規模なものが多く、以下主な遺構について記す。

土坑

S K 02

調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、調査区内では径約1m、深さ約45cmを測る土坑である。土坑の周囲には深さ5cmほどの浅い落ち込み（S X 03）が廻る。出土遺物はいずれも少量である。

溝

S D 01・02

幅約1.4m、深さ約30cmを測る同規模の溝である。断面形はU字状でいずれも南北方向に流下する。

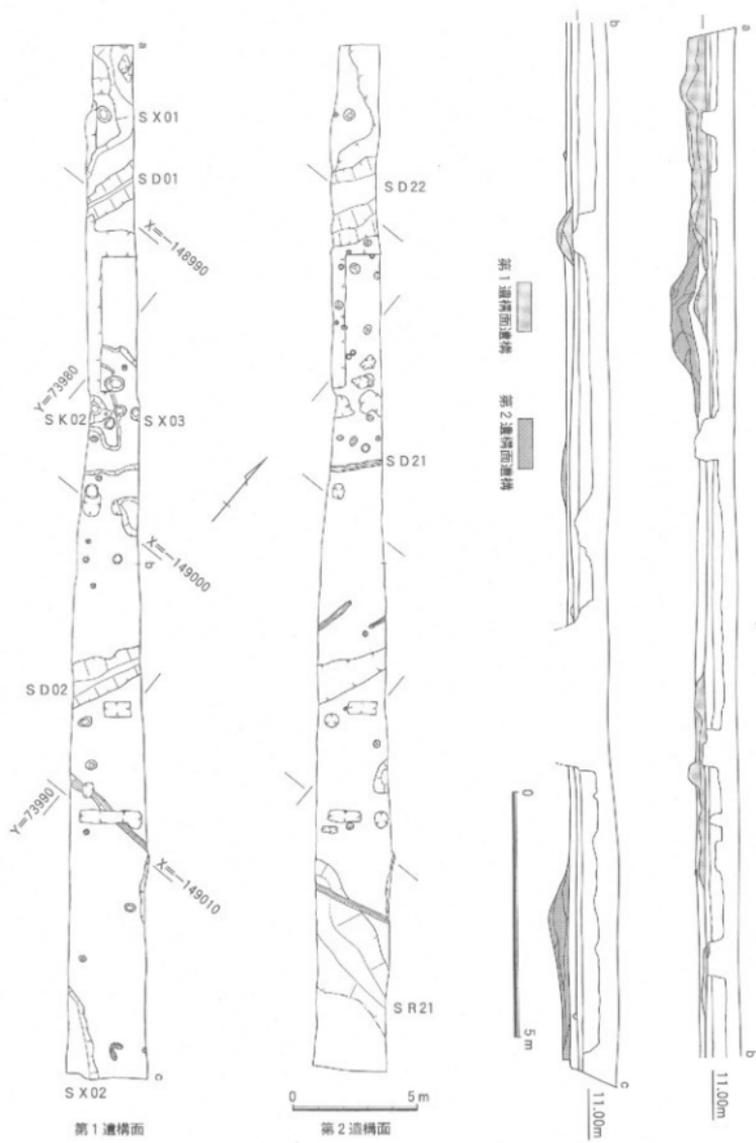
落ち込み

S X 01

調査区北端で検出されたL字状に屈曲する落ち込みである。全体の形状等は不明であるが、調査区内では南北長約2.4mが検出できた。遺構の底は平らで、検出面からの深さは約50cmである。



第10図 第35-2次調査区 S X 01 平・断面図



第11圖 第35-2次調査区 平・断面図

出土遺物

SD02、SX01・02・03等からは比較的出土しているが、完形近くは復元できた個体はない。その他の遺構からの出土遺物は極少量である。(3～11は写真のみ・写真図版42)

SX01出土遺物は4・5・6が甕の口縁片である。4は短く外反する口縁端に面を持つ。5・6はわずかに口縁を折り曲げる。頸部下に櫛描直線文を施し、櫛描は比較的鮮明である。やや古手のものと思われる。7は段状口縁をもつ無頸壺である。8・9は壺の体部片で、円形浮文、櫛描文・直線文・波状文の櫛描文が見られる。

SX01の直上包含層から出土した10は径3cmの土製円盤である。3は器高8.5cmを測るミニチュアの壺である。胎土は砂粒が多く、指押さえの痕跡とともにヘラ状工具による粗い器壁の調整痕が残る。

11はSD02出土の長頸壺頸部片である。端部外側に面をもつ。下位に2条の貼り付け突帯を付す。

SX01からの出土遺物はやや古手の遺物も含まれるものの、概ね弥生時代中期中葉(第Ⅲ様式新段階)に属するものと考えられ、SD02、SX02、SX03の遺物は弥生時代中期中葉～後半(第Ⅲ様式末～第Ⅳ様式前半)に属する可能性が高い。また時期比定の困難な遺構についても遺物包含層等の出土遺物から判断すると、概ね弥生時代中期中葉～後半に属するものと推測される。

(2) 第2遺構面

土坑、溝、ピット、落ち込み、流路等の遺構が検出された。SD22・SR21以外は小規模な遺構が多い。

溝

SD22

調査区の北半で検出した幅約3m、深さ約65cmを測る溝である。第1遺構面で検出したSD01と同位置の下位にあり、同じく南北方向の溝である。断面は逆台形に近い形状である。

落ち込み

SR21

調査区南端部の落ち込みである。調査区外に広がるため全容は不明であるが、埋土の状況等から流路状の遺構と考えられる。調査区内では幅約4m、深さ約40cmである。南の肩部は明瞭でない。

ピット

第1遺構面と同じく調査区の北半で多くを検出したが、調査区の制約もあり、建物等に纏まるものは確認できなかった。出土遺物も乏しく明確な時期は不明である。規模は概ね径20～30cm、深さは10～20cmで規模は小さい。

出土遺物

SD22、SR21で弥生時代中期中葉(第Ⅲ様式古段階)に属すると考えられる遺物が比較的多く出土しているが、それ以外の遺構からの出土遺物は少なく、時期比定は困難ではある。遺物包含層等の出土遺物から判断すると、第2遺構面は概ね弥生時代中期前半～中葉に属するものと推測される。出土遺物は土器の他に、サスカイト片が多く含まれる。

3. 小 結

当調査区での遺構分布の特色として、北半部に比較的遺構が多くみられるという点が挙げられる。このことは戎町遺跡の中核部が北方に位置することを意味するものと推測されるが、南半部においても遺物包含層からの出土遺物は多く、遺跡の拡がりやさらに南方あるいは東方に続くものと考えられる。

遺構は小規模なものが多いが、集落の一部として捉えられるものと考えられ、その成果は重要である。

第4節 第35-3次調査

1. 調査の概要

寺田町1丁目①番街路、1・2丁目間の現道拡幅部の調査である。南北6m、幅5.5mの調査区である。

調査区内は現代の攪乱及び耕作により大きく影響を受けており、攪乱を除去した現地地表下30cmの旧耕上層直下で遺構面を検出した。遺物包含層は残存せず、耕土層より弥生時代中期から中世の遺物が少量出土した。

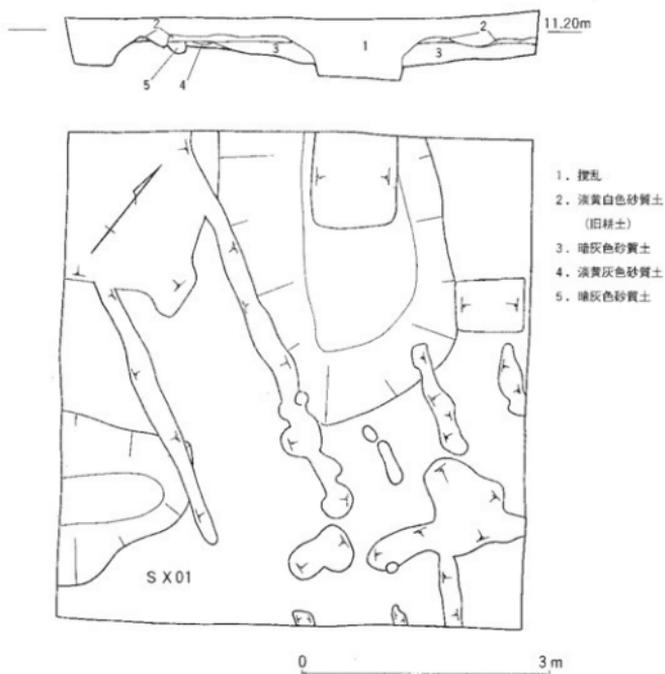
2. 検出遺構と出土遺物

調査区内では不定形の落ち込みを2基検出したに留まる。

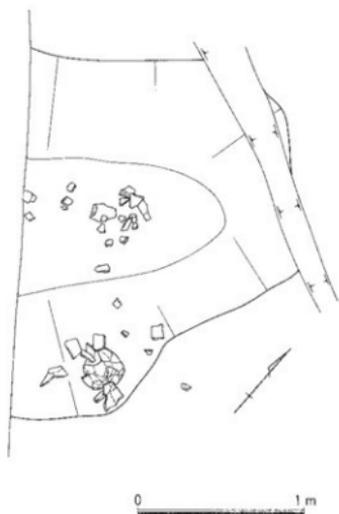
S X 01

調査区南西部分で検出した深さ10cmの浅い不定形な落ち込みである。調査区内での規模は東西幅約1.6m、南北幅約2.1mで自然地形とも考えられるが、埋土より壺の約半個体分が出土した。

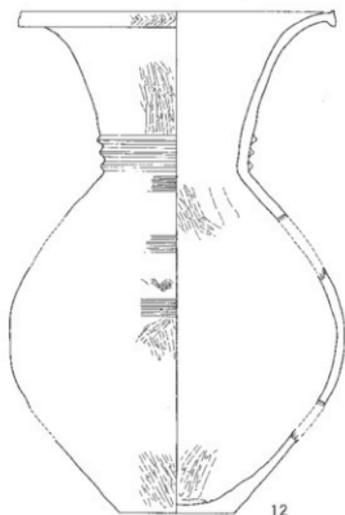
同様の浅い窪みは北壁際でも検出しており、南北幅約3.6m、東西幅約2.5mで北側に広がる。S X 01に直交するように位置し似通った形状を呈する。遺物は出土していない。



第12図 第35-3次調査区 平・断面図



第13図 SX01 平面図及び出土遺物実測図



12は口径26cm、器高41cmを測る壺である。磨耗がひどく調整痕はほとんど観察不能であるが、頸部に3条の断面三角形の突帯と、体部上半に11条1単位の挿描直線文を3単位施す。最下段の直線文の上に波状文が一部見られる。口縁端部を上下方に広げるが、上方へはわずかに狭み上げる程度である。端面外側には矢羽状の刺突文がある。体部下半に残る調整痕は内外面とも細かなヘラ磨き痕である。

3. 小 結

調査区の西端で検出したSX01以外に明確な遺構が検出されず、また削平が顕著で調査区にあった遺構の全体の様相は不明である。SX01出土遺物より弥生時代中期中葉の年代が与えられ、後述する南側の調査区第35-4次調査で検出した同時期の方形周溝墓との関連性が考えられる。

第5節 第35—4次調査

1. 調査の概要

第35—3次調査区の南、寺田町1丁目の④番街路南端に位置する。南北長10m、幅5mの調査区である。盛土層、擾乱を除去した後の田耕上層直下で遺構面を検出した。遺構面を2面検出し、上面は古墳時代後期、下面は弥生時代中期に相当する。

2. 検出遺構と出土遺物

(1) 第1遺構面

調査区南半で方形の竪穴住居の一部を検出した。調査区北半は後世の耕作により遺構面は削平され、遺構は検出されなかった。

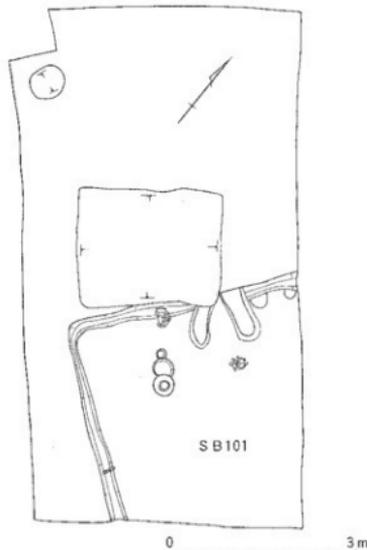
SB101

当調査区では全体の4分の1しか明らかでなかったが、後述する平成15年度に実施した第30—2次西調査区で続き部分を検出し、一辺約5mの方形の竪穴住居であることが判明した。但し、両調査区でも南半分は未検出である。かなり削平を受けており、検出面から柱穴を検出した床面までの深さは5cmしか遺存しないが、床面には貼り土と考えられる黒灰色砂質シルトの堆積があり、この層の厚さは5cmである。幅約10—20cm、深さ約10cmの周壁溝を巡らし、北辺にカマドを造り付ける。カマドの基底部の幅約1.1m、袖部の構築土は基盤層である淡黄灰色砂質土に近似する。袖一辺の幅は約40cmである。上柱穴は各調査で1基ずつ検出でき、東の柱穴は径45cm、深さ50cmを測る。東の柱穴の埋土は黒褐色粘質土である。東半、第50—2次調査区では柱穴検出面において、周壁溝から建物の中心に向けて放射状に炭化材が散乱する状況を検出した。面的な広がりには確認できなかったが、焼失住居と考えられる。

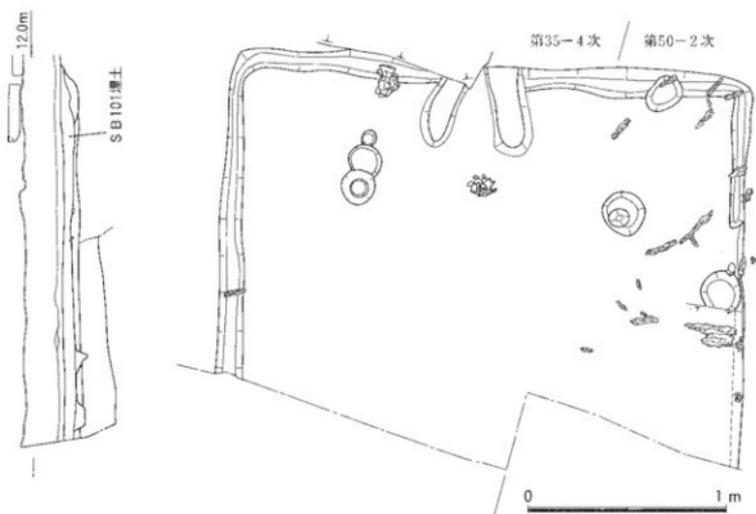
出土遺物で図化できたものはいずれも今回の調査区から出土したもので、カマド周辺の床面より出土した土師器甕2個体と、甕1個体である。またTK23期と考えられる須恵器杯身の細片も付近で出土した。

13は口径24cm、器高28.2cmを測る甕である。体部の中央に中夾の把手をはめ込む。口縁端部は丸く収める。底部は断面長方形の帯で2分割される。把手周辺の外面にハケの痕跡がわずかに残る程度で、全面に丁寧にナデ調整を施す。

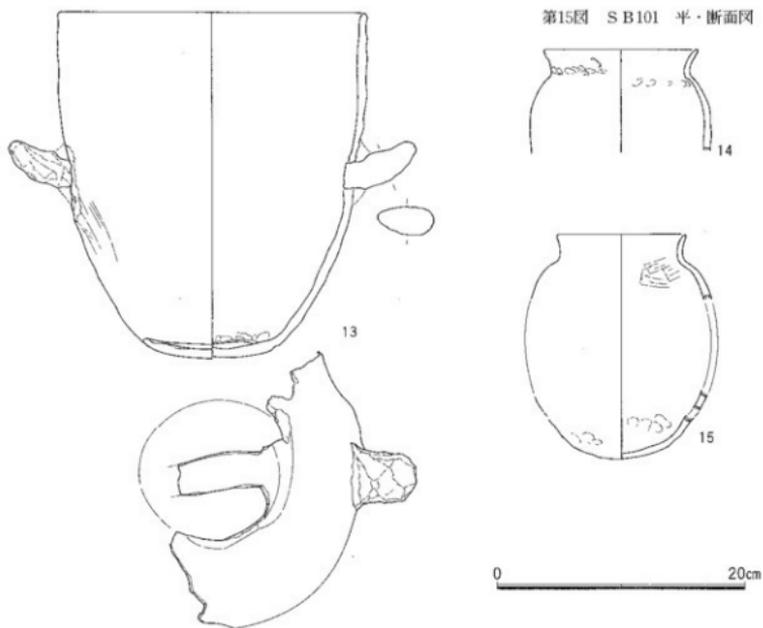
14・15は土師器の甕である。口径10—12cm、器高19.5cm程に復元される。球形の体部から上方に短く立ち上がる頸部をもつ。調整痕は磨耗のためほとんど観察不可能であるが、内面に板状の工具によるナデの痕跡が見える。その他、埋土中からは台石（写真のみ。写真図版43）と思われる石片が出土した。



第14図 第35—4次調査区 第1遺構面 平面図



第15图 SB101 半・断面图



第16图 SB101 出土遺物実測图

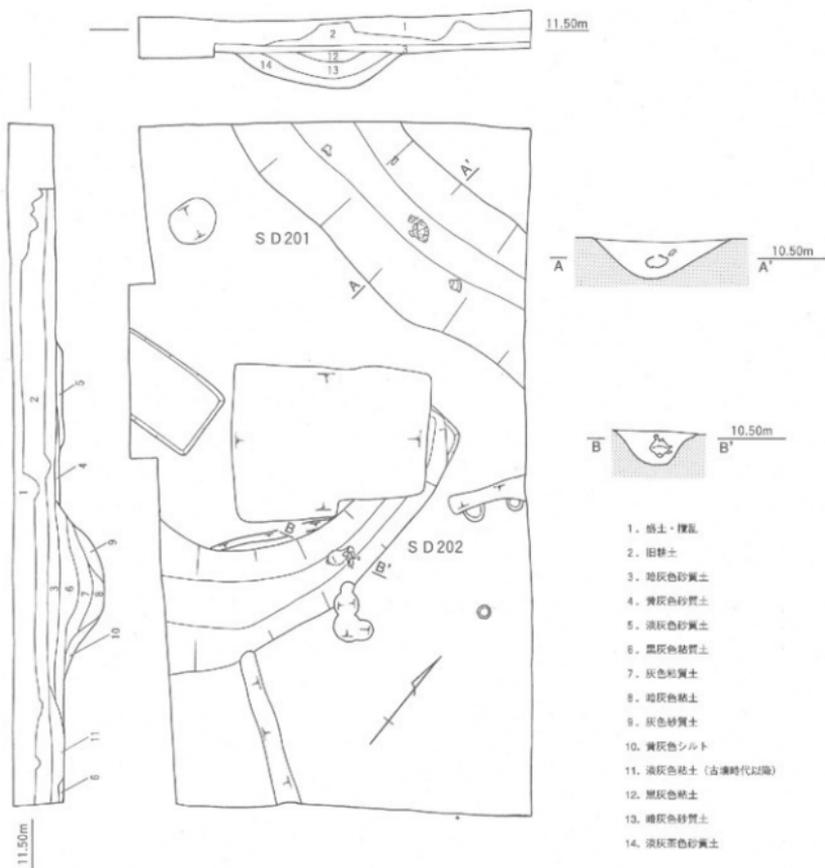
(2) 第2遺構面

溝を2条検出した。方形周溝墓を構成する溝である。

SD201

幅約1.6m、深さ約30cmの東西方向の溝である。埋土より壺1個体分が出土した。

16は口径12cm、器高36.5cmを測る長頸壺である。頸部はほとんど垂直に立ち上がり、上端に面をつくる。外面の調整は頸部にハケ痕跡、底部はヘラ磨きである。頸部内面には粗い指ナデ痕がある。

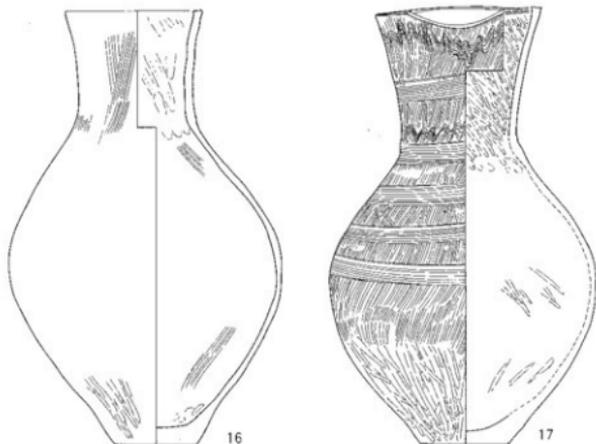


第17図 第35-4次調査区第2遺構面 平・断面図

S D 202

幅60cmから1.8m、深さ20~40cmの南北方向の溝であるが、南側がやや弧を描いて掘削されている。S D 201とは接続しておらず、陸橋状を呈する。S D 201と同様、完形の壺が1個体出土している。

17は口径13cm、器高36.5cmを測る。口縁端がやや外側に開く長頸壺である。口縁の一部を折り取る。口縁下の10条1単位の櫛描波状文は深い絞り部の形状に合わせて施文される。頸部は櫛描直線文、波状文を交互に施す。体部上半には10条1単位の直線文が3単位ある。外面下半と頸部の内面を細かいヘラミガキ調整、体部の上半は施文前に11条/cmの細かいハケによる調整を行う。



0 20cm

第18図 S D 201・202 出土遺物実測図

土坑

短辺90cm、長辺1.5m以上を測る平面長方形を呈する土坑である。S D 201と平行していることや形状から周溝墓の埋葬施設であると考えられる。深さは5cm程しか残存しておらず、棺の痕跡等も確認されなかった。遺物も出土していない。

土器集中部

S D 201と墓坑と考えられる土坑に挟まれた部分で土器片の堆積が見られた。平坦面上に堆積しており、周溝墓構築以前に投棄されたものと考えられるが、周溝墓との関連については不明である。時期はS D 201・202と同じく弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式新段階）に属するものと考えられる。

3. 小 結

調査区は比較的遺物包含層の残存状況が良好であり、古墳時代後期と弥生時代中期中葉の遺構面が確認できた。T K 23期の竪穴住居の存在は南に近接して広がる松野遺跡との関連や調査区南側への遺跡の拡がりを考える上で重要である。また弥生時代中期の墓域を確認したことが主な成果として挙げられる。

第6節 第35—5次調査

1. 調査の概要

寺田町1丁目③番街路南西端部の調査である。現地表下50cmで溝1条を検出した。

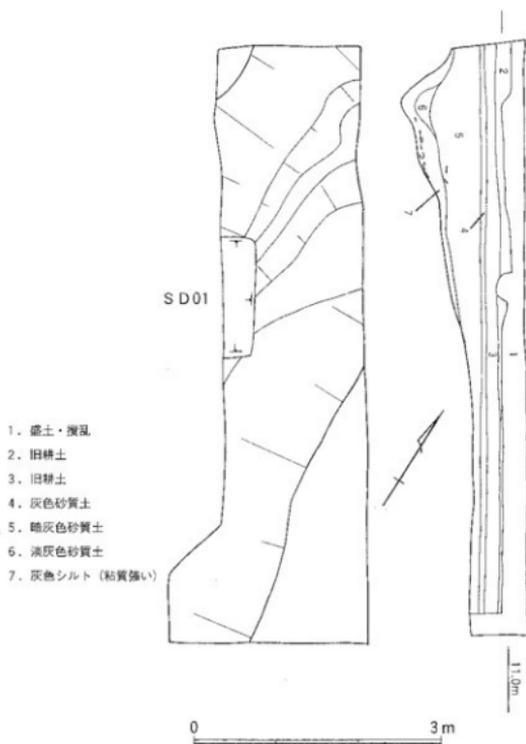
2. 検出遺構

SD01

調査区の制約により、全容は明らかではないが、幅約3m、深さ80cm程度の溝と考えられ、北東から南西方向に流下する。下層は粘性のある堆積層であるが、上層は均質な砂層の堆積が見られ、洪水等により一時に埋没したと考えられる。溝底付近では弥生時代中期中葉頃のまとまった遺物の堆積が見られた。

3. 小 結

他の調査区で検出される溝とは明らかに規模や状況の異なる溝を検出した。しかし調査区の制約から全容を知ることができず、遺構の性格については不明である。近接する墓域との関連性を含め、周辺での調査の進展を待たねばならないであろう。



第19図 第35—5次調査区 平・断面図

第7節 第35-6・7次調査

1. 調査の概要

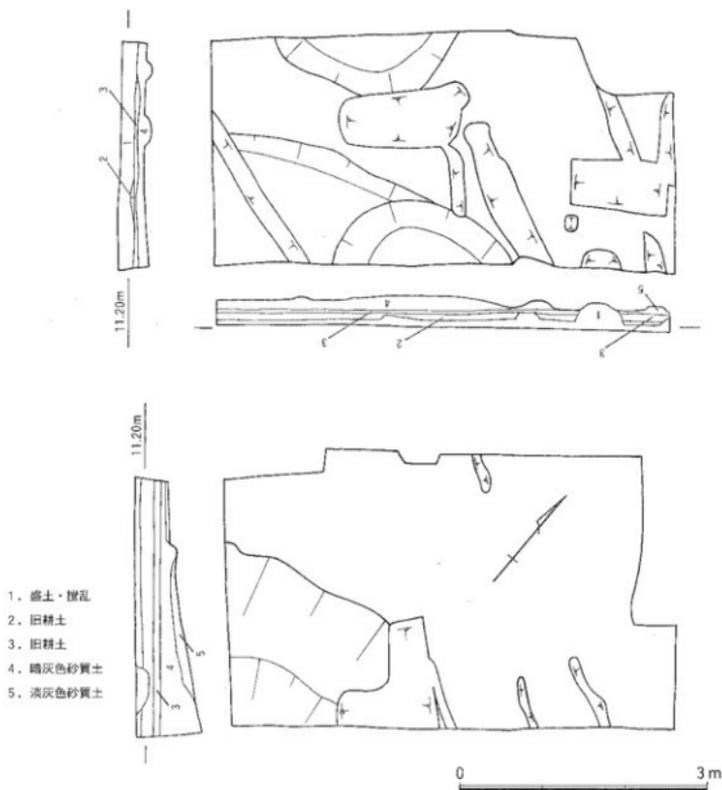
寺田町1丁目③番街路中央部の調査区である。現道を挟み北側を35-6次、南側を35-7次調査区とした。現地地下約20cmで遺物包含層が検出され、現地地下30cmで遺構面となる。

2. 検出遺構

両調査区とも不定形の落ち込みが検出されたが自然地形と考えられ、遺構は存在しなかった。遺物は耕土層から弥生土器片が若干出土したのみである。

3. 小 結

視乱及び現代の耕作が遺構面を形成する基盤層にまで影響を与えており、明瞭な遺構は確認できなかった。地形的に東側に向かって高くなっており、このため後世の耕作等による土地改変の影響を強く受け、遺構・遺物が残存しなかったものと考えられる。



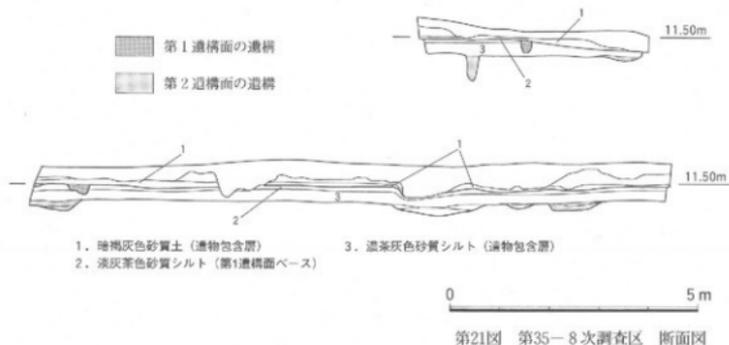
第20図 第35-6・7次調査区 平・断面図

第8節 第35-8次調査

1. 調査の概要

寺田町2丁目①番街路西端部の調査区である。両端には現道が存在する。第35-1・2次調査地の北側に位置する。当調査区でも周辺調査区と同様、2面の遺構面が確認された。調査は残土置き場の都合から1区(東半部)、2区(西半部)の2地区に区分して遂行した。

基本層序は上層より現代盛土、2層の旧耕土層、暗褐色砂質土(遺物包含層)、淡灰茶色砂質シルト(第1遺構面ベース層)、濃茶灰色砂質シルト(遺物包含層)の順で、淡灰茶色砂質シルト上面が第1遺構面、濃茶灰色砂質シルトの下層上面が第2遺構面となる。第2遺構面のベース層以下には遺構面になり得る層位、遺物を包含する層位は確認されなかった。遺構面までの深さは、第1遺構面が現地地表下20~50cm、第2遺構面が同50~80cmを測る。また、調査区の北側壁面のほぼ中央部に、層位が褶曲する部分を有するが、盛土以下、遺構面に至るまで同じ状況を呈するため、おそらく平成7年の兵庫県南部地震による地殻変動の影響と考えられる。



2. 検出遺構と出土遺物

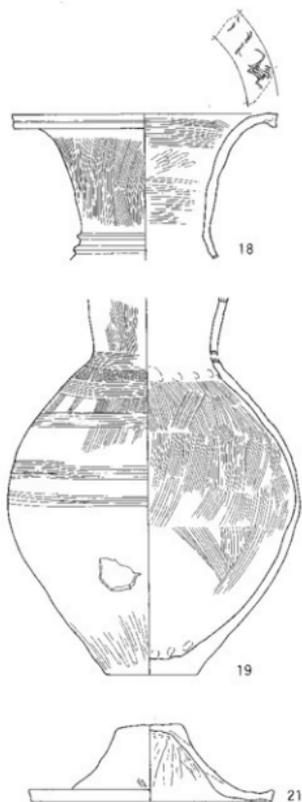
(1) 第1遺構面

竪穴住居、土坑、溝、ピット、落ち込み等の遺構が検出され、特に2区(西半部)に集中している。

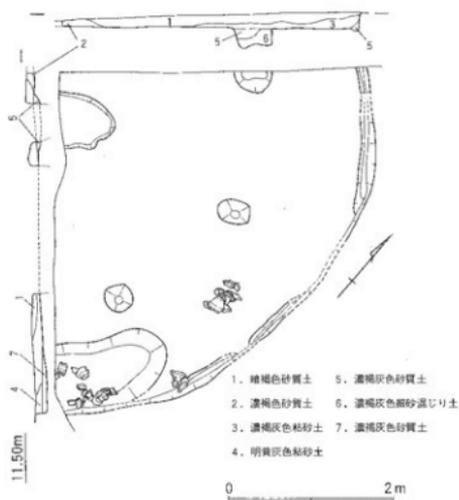


SB101

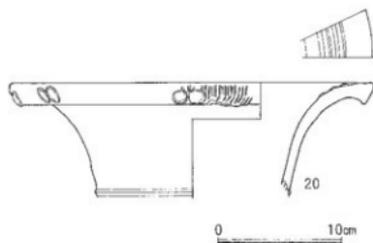
2区の北西端部で検出した竪穴住居で全体の4分の1程度しか確認できなかった。復元すれば径8m程度の円形の住居址になるものと思われる。検出面から床面までの深さは20cmである。幅20cm、深さ5cmの周壁溝が廻る。南の壁際に長さ1.4m以上、幅80cmの土坑があり、ここを中心に遺物が出土した。確認された住居址に伴う柱穴は3基である。



第24図 SB101 出土遺物実測図



第23図 SB101 平・断面図



18は口径21cmを測る壺の口縁である。口縁内面は横ハケ、上面に波状文を施す。19は壺で口縁部を失う。残存高32cm、胴部最大径24cmを測る。内外面ともに6条/cmのハケ調整の後、外面にはやや稚拙な楕圓直線文を5単位施す。胴部下半はヘラ磨き調整で、1箇所、焼成後に施された穿孔が見られる。20は口径30cmを測る広口壺口縁である。端部をやや下方に垂下させる。刺突文の上に2個1対の円形浮文を6対貼り付ける。頸部の突帯は低く扁平である。21は径20cm、高さ6cmの甕蓋である。

22～24は壺の口縁端部片である。22は口縁上面には2単位の櫛描波状文が見える。23は端面外側に矢羽状の刻目を施す。24は口縁を斜め下方に垂下させ、端部は凹線状に窪む。25は凹線状の端部をもつ甕口縁片、26は無頭蓋と思われる破片で、直下に波状文が巡る。27・28は壺の体部片で棒状浮文、竹管文、刺突文等の装飾が見られる。29は器台の脚部、30は径約3cmの十製円盤である。(22～30は写真のみ・写真図版44)

その他の遺構

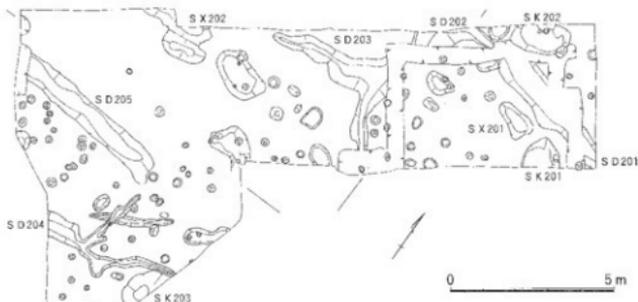
調査区の西半部では径80cm前後の小規模な土坑(S K 101)や不整形な落ち込み状遺構(S X 101～106等)、溝状遺構が検出されている。いずれも深さは10～20cm程の浅いものである。

第1遺構面の時期

遺物はS B 101、S X 106等の遺構内や遺構面を覆う遺物包含層より比較的多く出土しているが、接合するものに乏しい。その大半は土器類であるが、サヌカイトの剥片なども含まれる。遺構の時期は、S B 101は若下古い様相も混在するが、概ね弥生時代中期後半(第Ⅳ様式前半)に属するものと考えられる。その他、同時期のもつと推測されるものはS X 102・106、S P 121等で、S X 101、S D 103、S P 115等は、弥生時代中期中葉(第Ⅲ様式新段階)と考えられる。遺物包含層の状況も合わせ、第1遺構面は弥生時代中期中葉～弥生時代中期後半の範囲内に属するものと考えられる。

(2) 第2遺構面

溝(S D 201～205等)、土坑(S K 201～203等)、ピット、落ち込み等の遺構を検出した。



第25図 第2遺構面 平面図

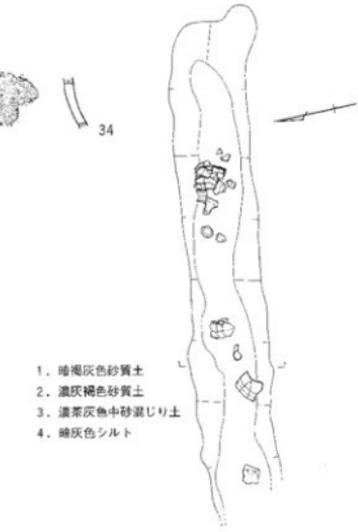
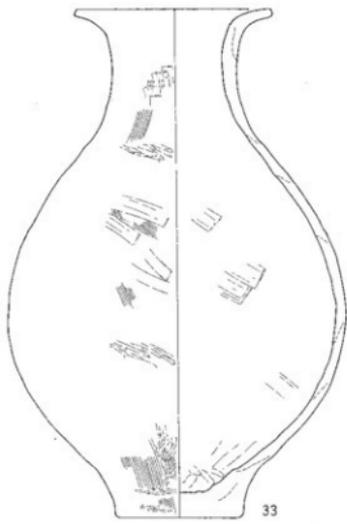
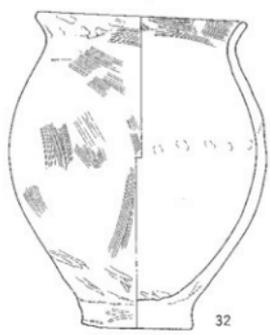
S D 201～204

幅約30cmから90cmとばらつきがあるが、いずれも深さは10～15cm程度と浅いものである。

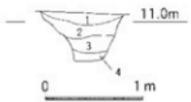
S D 205

幅は周囲の溝と大差ないが、深さ約50cmを測り、溝の断面の形状は逆台形状を呈する。溝の端部もほぼ直に立ち上がる。遺物が2箇所から縋まって出土しており、第Ⅱ様式後半～Ⅲ様式古段階の遺物を含む。

31は甕口縁片で短い反りの先に刻目を施す。32は口径17cm、器高26cmを測る厚子の甕で口縁部は短く外反し、内面は横ハケ調整である。33は口径16cm、器高41cmの壺で、球形の胴部から狭まりのびる長手の頸部をもつ。表面の磨耗がひどく調整痕は不明瞭であるが、胴部内外面に板状工具によるナゲ痕、8条/cmのハケ調整痕が所々に残る。34は(擬)流水文を施す壺の体部片である。35は口径、器高ともに30cmを測る大型の鉢である。緩やかに外反する口縁端部は丸く収める。底部は粗い調整の低い台状を呈する。36は口縁下端に刻目文のある広口壺片、37・38は甕の破片で38は焼成前に穿孔を施す。(36～38は写真のみ・写真図版45)



- 1. 暗褐色砂質土
- 2. 濃灰褐色砂質土
- 3. 濃茶灰色中砂混じり土
- 4. 暗灰色シルト



第26図 S D205 平・断面図

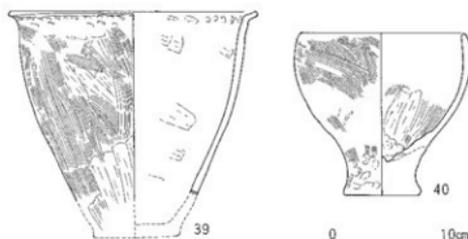


第27図 S D205 出土遺物実測図

S K 202

長径1.8m、短径1mの楕円形を呈する上坑である。深さは20cmで、埋土は灰褐色の砂である。

39は口径21cm、強く短く屈曲する口縁部をもつ甕である。9条/cmのハケによる調整を全体に施した後、胴部下半に一部、板状の工具で粗く器壁を削り取る部分がある。40は粗製の台をもつ鉢である。胴部は椀状を呈し、口縁端部はやや内傾する。体部外面上半、内面下半を中心に8条/cmのハケ調整を行う。口径14cm、器高13cmである。



第28図 S K 202 出土遺物実測図

S K 203

長径約1.6m、短径約1.2mを測り、平面楕円形を呈する土坑である。他の土坑が10～20cmの深さであるのに比べ、約45cmと深い。埋土は褐色系砂質土である。遺物は規模に比べその出土量は少なく、また細片である。

その他ピット、落ち込みなどについては、規模の大きいものは存在せず、出土遺物も少量である。

第2 遺構面の時期

時期の判明する遺物が出土した遺構はS K 201～203、S D 201～205、S P 203・204、S X 202等で、若干古い時期（第Ⅱ様式後半）のものが含まれるが、中心は弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式古段階）に属するものと推測される。遺物包含層からの出土遺物は多いが、遺構出土の遺物は第1遺構面に比べると少なく、S D 202・205から纏まって出土したにすぎない。出土遺物がほとんどなく、その時期比定が難しい遺構については、遺物包含層出土遺物の状況等から、弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式古段階）か、わずかに古い時期に該当するものも存在すると考えられる。遺物の大半は土器類であるが、サヌカイトや結晶片岩の剥片なども多くみられる。また第1遺構面ベース層からは扁平片刃石斧、S D 205からは磨製石斧、下層遺物包含層とS K 203からはサヌカイト製の石鏃なども出土した。

3. 小 結

今回の調査地は他の調査地に比べて検出遺構、出土遺物とも多く、集落域の中核部かあるいはその縁辺部にあたる箇所と判断できる。その中で特筆すべき点として、第2遺構面で検出した数条の溝が挙げられる。これらは平行あるいは直交するような形で存在し、S D 205からは投棄されたような状態で土器が纏まって出土している。また時間的にもほぼ同時期と考えられ、S X 202の不定形な溝状遺構も含め、方形周溝墓を構成する溝の残欠である可能性を示唆しておきたい。

第9節 第35-9次調査

1. 調査の概要

寺田町2丁目①番街路の調査である。街路の3分の2を占める。残し置場の都合上、5回に分割して調査を実施した。東から順に1区から5区と称する。基本層序は第35-8次調査区に似るものの、東側は包含層の堆積、遺物出土量、遺構検出量が希薄になる。調査区の中央付近でのみ遺構面を3面確認した。最上層は旧耕土層直下で、おそらく中世の生活面と考えられる。その下の暗灰色砂質土層面で部分的に溝(SD201)等の遺構を確認したが、調査区西側では削平がひどく、また東側は下がり地形となる。

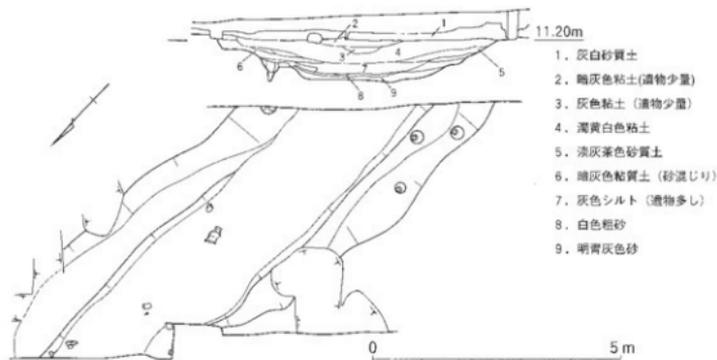
2. 検出遺構と出土遺物

(1) 第1遺構面

調査区東端で緩やかな落ち込みが確認されたが、時期を特定できる遺物の出土はなく、調査区中央部では溝・上坑等が少数検出された。西端の5区では後世の耕作による影響で遺構面が失われていた。特筆されるのは中央付近で検出したSD201である。

SD201

幅約3.9m、深さ約1mの溝である。断面形は逆台形で、約2mの平坦な溝底をもつ。肩部には護岸のためと思われる杭孔が不規則な配置で検出された。埋土は上層に灰色シルト層の堆積があり、薄い砂層を挟み、下層に黒色系のシルト層の堆積が認められる。上層からの出土遺物はほとんどなく、多くは底近くの黒色系のシルト層より出土している。壺1個体分の他、磨製石斧、サヌカイト製石鏝等を検出した。



第29図 第35-9次調査区 SD201 平・断面図

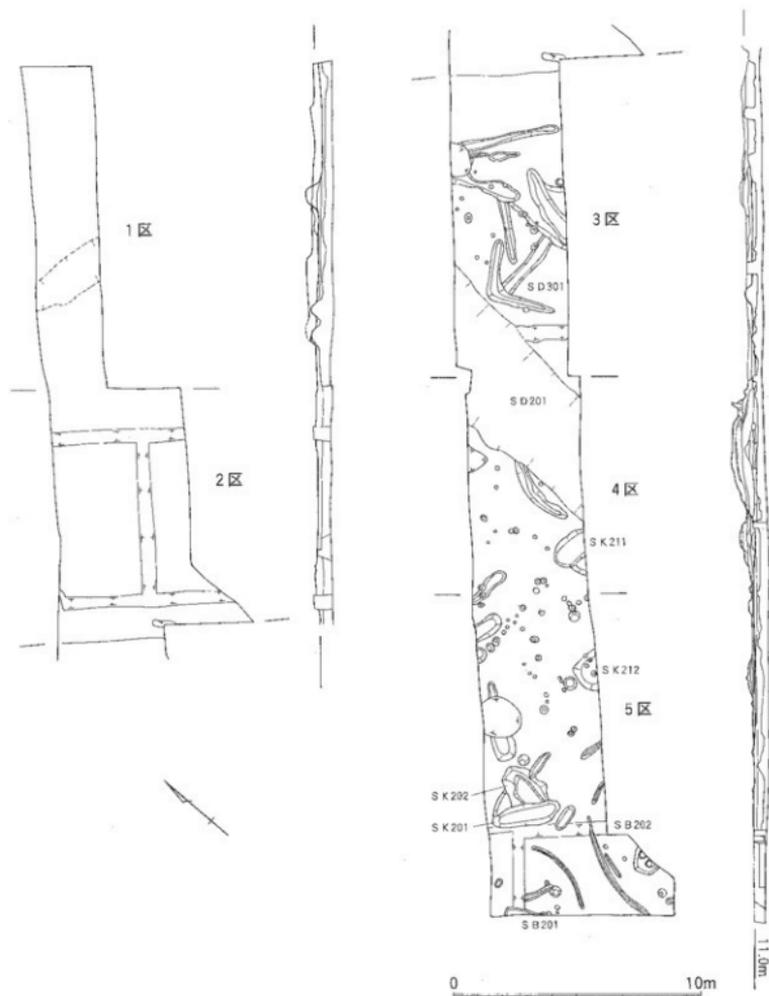
出土遺物

41・43は壺の破片である。41は口縁端面に3個1対の凹形浮文を貼り付ける。42は壺口縁片で「く」の字状に強く屈曲する端部をもつ。外面体部のハケ調整、口縁部のナデ調整が顕著である。44は台状土器で支脚の可能性ある。45は口径26cm、器高35cmの甕で、底部近くに1箇所、焼成後の穿孔が認められる。底部は低い台状を呈する。緩やかに内湾した体部から「く」の字状に開く口縁をもつ。内側には整形時の指押さえの痕跡が強く残る。46はミニチュアの壺で器高9cmである。体部上半はハケ調整、下半は指ナデの後が明瞭に残る。埋土上層の出土遺物は細片でほとんどが第Ⅳ様式に属するものであるが、砂層を挟んだ下層埋土に含まれる遺物には第Ⅱ様式～第Ⅲ様式古段階のものを含む。(41～44は写真のみ・写真図版46)

(2) 第2遺構面

東半部の1～2区はやや東下がりの地形となり、遺構は存在せず、遺物包含層も確認できない。

調査区中央～西半部にかけては従前建物の基礎や削平により遺構面の残りは悪いものの、遺構が集中しており、竪穴住居2棟、土坑5基、柱穴多数、溝（状遺構）を検出した。



第30図 第2遺構面 平・断面図

竪穴住居

S B 201

調査区外に広がるため全容は不明であるが、直径7 m程度の円形の竪穴住居である。周壁溝の痕跡と柱穴、溝を検出した。床面直上より弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式後半）の遺物が出土した。

S B 202

S B 201と同様、調査区外に広がるため全容は不明であるが、S B 201と同規模の円形の竪穴住居である。周壁溝の痕跡と柱穴、土坑を検出した。床面直上よりサヌカイト製の石錐、石鏃が出土した。

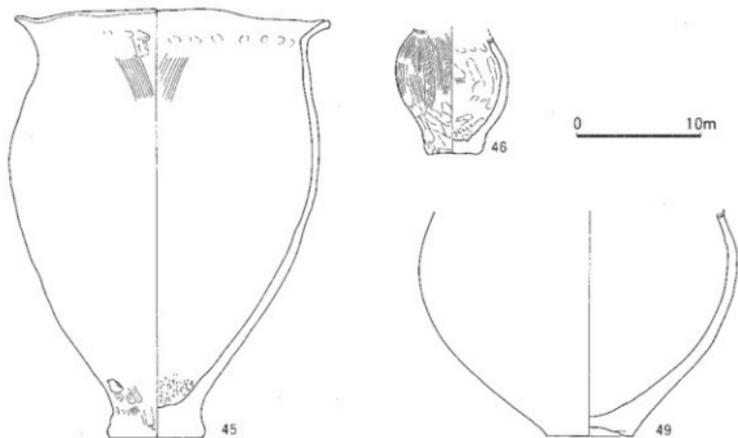
ピット

数10基を検出したが、建物として縛まるものは確認されなかった。S P 210では土器が破砕された状況で出土した。

S P 210

調査区中央で検出した。径30cmの円形の掘形に壺の胴部下半を据えるように埋める。その内部には上部の破片が細かく詰められた状況であった。

壺の胴部下半から底部である49は掘形一杯に埋まり込むよう埋まっていた。内部には細片となった土器片が充填されていた。これらを接合した破片である50は櫛描きによる擬流水文、直線文を施した破片で、胎上や焼成の状況から49と同一個体と考えられる。腹径25cm、器高30cmを越す壺に復元できるであろう。(50は写真のみ・写真図版46)



第31図 S D 201・S P 210 出土遺物実測図

溝

第2遺構面では溝を5条確認したが、規模の大きいものはなく出土遺物も乏しい。

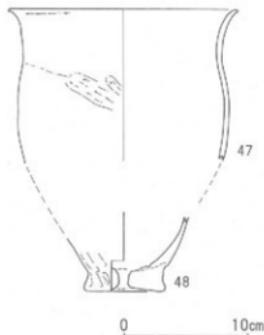
S D 301は「L」字状を呈する東西長約1.3m、南北長約1.5mの溝であるが、出土遺物もなく、その用途については不明である。また前述したS D 201の下層埋土より出土した遺物は第Ⅱ様式～第Ⅲ様式古段階と若干古相を呈することから、第2遺構面形成時に掘削、あるいは流下していた可能性が高い。

土坑

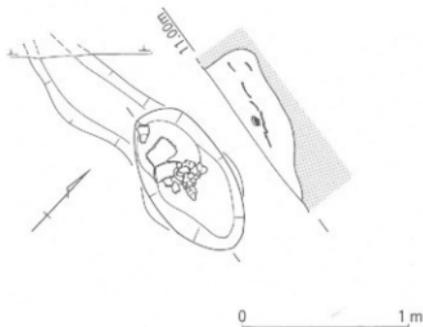
長辺1.5m前後、短辺50cm～1m前後の平面形が楕円形、あるいは長楕円形を呈する土坑を検出した。埋土より弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式後半）の土器が出土している。

S K 210

当初は長辺約1.8m、短辺約60cm、深さ40cmの土坑状のプランで検出したが、精査の結果、北側にのびる溝状の遺構になるか、もしくは別遺構と切り合う可能性がある。



第32図 S K 210 出土遺物実測図



第33図 S K 210 平・断面図

47・48は同一個体の甕で体部を一部欠損する。口径19cm、復元高約23cmを測る甕である。磨耗がひどく、表面の調整痕も剝離しており詳細は不明であるが、体部上半に板状工具で削る、あるいはナデ上げたような痕跡がかろうじて見える。底部に焼成前の穿孔がある。胴部の張り出しは弱く、口縁の反りも少ない。

その他、S X 201の埋土からも弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式後半）の土器が出土した。

3. 小 結

調査区西端部では後世の耕作による影響を強く受けているが遺構の分布状況が良好で、特に弥生時代中期中葉においては竪穴住居等の生活域を示す遺構が確認され、集落の主要部に近いことを示している。

遺構・遺物が少なく明確ではないが、検出した土坑、溝に含まれる遺物から、第1遺構面は弥生時代中期後葉（第Ⅳ様式前半）の遺構面と判断される。

また多くの遺構を確認した第2遺構面の時期であるが、S D 201下層からの出土遺物がやや古手となるが、竪穴住居にわずかに集中していた土器や主な溝（状遺構）、土坑の出土遺物より弥生時代中期中葉～後葉（第Ⅲ様式後半～Ⅳ様式前半）に属するものと判断される。

第10節 第35—10次調査

1. 調査の概要

寺田町2丁目、第35—8次調査区の北側に位置する擁壁築造部分の調査である。現地表下40cmで第1遺構面を、現地表下80cmで第2遺構面を検出した。

2. 検出遺構と出土遺物

(1) 第1遺構面

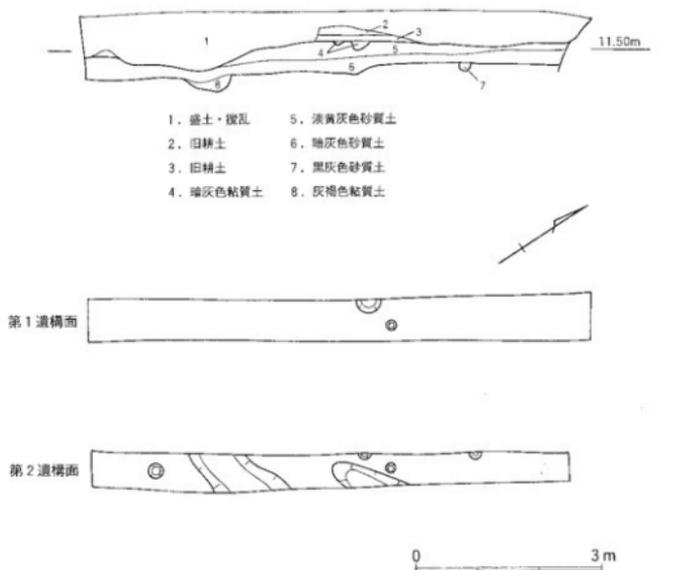
柱穴1基、上坑1基を検出したに留まる。遺物量は少ないが、弥生時代後期の遺構面かと考えられる。

(2) 第2遺構面

溝2条、柱穴4基を検出した。遺物が全く出土しておらず、明確ではないが、周辺の調査の結果から弥生時代中期の遺構面に相当するかと考えられる。

3. 小 結

東西7.5m、幅50cmの小規模な調査区であったため、検出遺構・遺物ともに少なく、詳細は不明である。近隣の調査区の成果より、集落域に伴う遺構と思われる。



第34図 第35—10次調査区 平・断面図

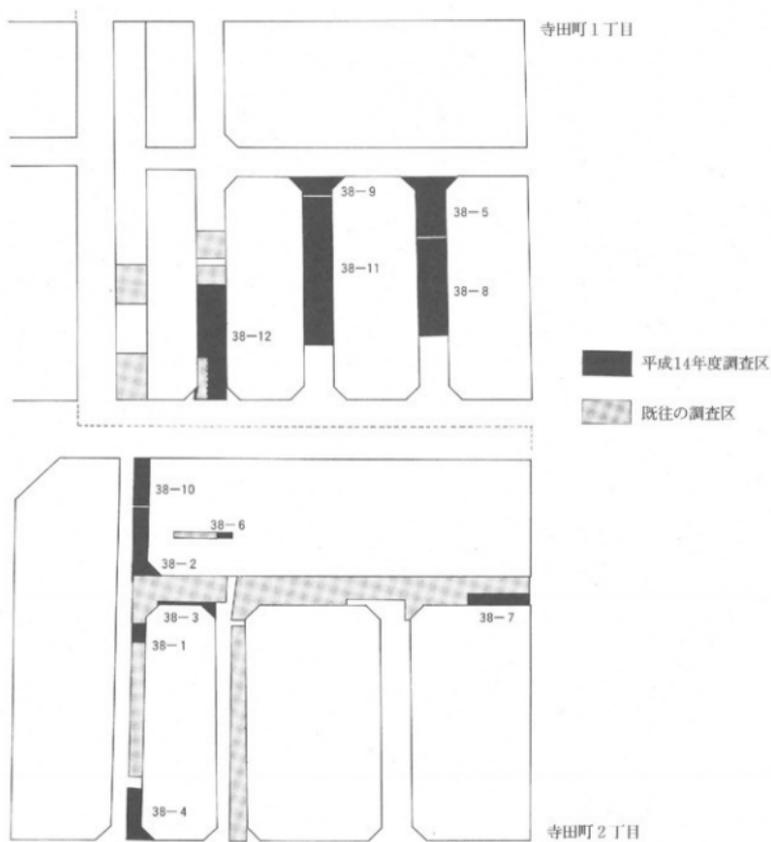
第3章 戎町遺跡 第38次調査の成果

第1節 第38次調査の概要

平成13年度の10回に及ぶ調査で戎町遺跡の南端の一角を占める寺田町1・2丁目の様相がはじめて明らかになった。

今年度も引き続き12箇所での調査を実施した。調査地点は第35図の通りである。

寺田町1丁目では南北街路の内、中央・東街路の北側部分の大半と、西街路の南半分について調査を実施した。寺田町2丁目では竪穴住居等の遺構が集中し、集落域の様相が判明しつつある第35-8・9次調査地に接する2丁目街区北西部での調査を実施した。



第35図 戎町遺跡第38次調査 調査地位位置図

第2節 第38—1次調査

1. 調査の概要

寺田町2丁目④番街路の北端、平成13年度調査の第35—1・8次調査地に接する調査区である。

調査区の基本層序は、擾乱・旧耕土を除去すると黒褐色シルト層（遺物包含層）、暗褐色シルト層（第1遺構面ベース層）、灰褐色細砂層（第2遺構面ベース層）となる。

第2遺構面のベース層以下については遺構面や遺物を包含する層位は確認されなかった。

2. 検出遺構と出土遺物

(1) 第1遺構面

遺構面までの深さは現地表下80cmである。暗褐色シルト層上面の遺構面でピット10数基、溝1条、円形の落ち込み1基を検出した。

調査区の南東隅で窪み状の遺構（S X 101）の一部を検出した。全体の規模は不明であるが、径1m以上、深さは調査区内ではわずかに6cmしかなかった。

また、溝の一部を検出しているが、幅約30cm、深さ5cmの浅い溝である。直径20~40cm、深さ5~10cmのピットから遺物の出土はない。

(2) 第2遺構面

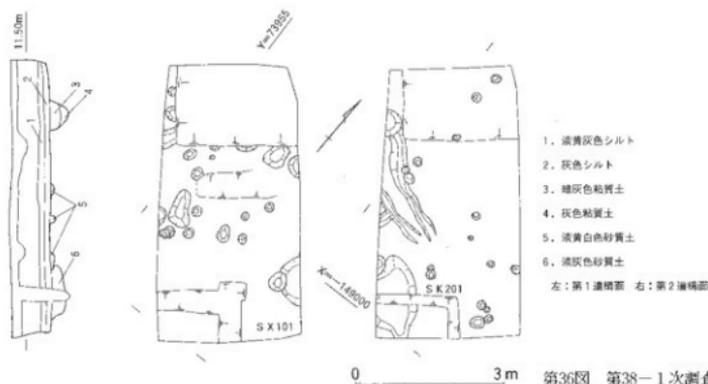
遺構面までの深さは現地表下約90cmである。第1遺構面のベースである暗褐色シルト層を除去し、灰褐色細砂層上面で遺構を検出した。検出した遺構は、ピット10数基、溝2条、土坑2基である。

調査区の南西隅で最大幅1.7m、深さ約40cmの土坑（S K 201）の一部を検出した。調査区外に拡がるため全体の規模については判らないが、土坑内から弥生時代第Ⅲ様式に属する上器片が出土している。

また溝の一部を検出しているが、幅20~40cm、深さ4~6cmの浅いもので、遺物の出土はない。直径20~30cm、深さ10~30cmのピットからはいずれも遺物の出土はなかった。

3. 小 結

第1遺構面では遺物包含層及び遺構の埋土より弥生時代第Ⅳ様式の土器が出土しており、第2遺構面では上に包含層より弥生時代第Ⅲ様式の土器が出土している。このことは前年度に実施した周辺調査区の状況を追認するものである。



第36図 第38—1次調査区 平・断面図

第3節 第38-2次調査

1. 調査の概要

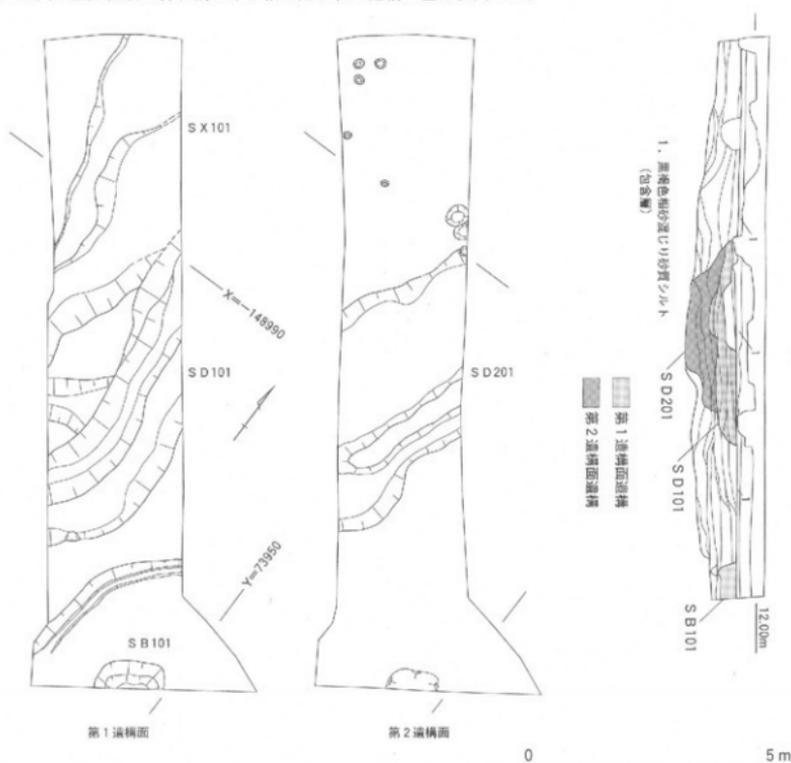
寺田町2丁目の④街路西端から北に伸びる街路南半部分の調査区である。第35-8次調査地の北側に位置する。生活道があるため、街路拡幅部幅約2.6m、南北約14mのトレンチを設定した。弥生時代の遺構面を2面検出した。

調査区内の基本層序は、攪乱・旧耕土を除去すると黒褐色砂質シルト層（遺物包含層）、暗黄褐色シルト層（第1遺構面基盤層）、明黒褐色砂質シルト層（遺物包含層）、明褐色細砂質シルト層（第2遺構面基盤層）となる。

2. 検出遺構と出土遺物

(1) 第1遺構面

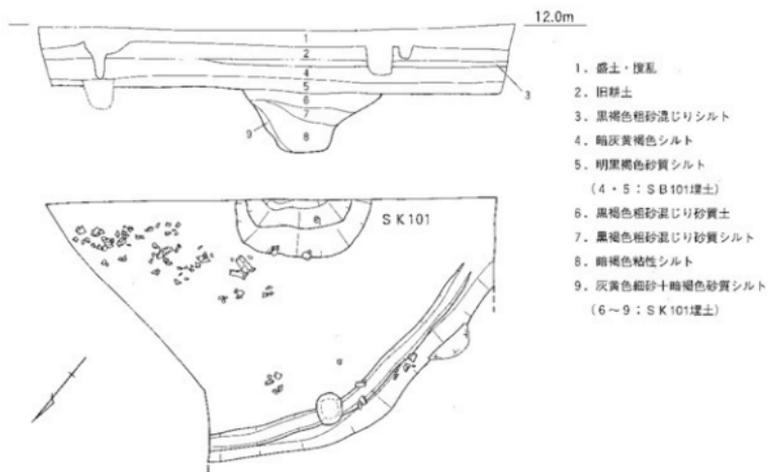
周辺の調査では第1遺構面を包含している黒褐色シルト層上面において中世の遺構面を確認しているが、今回の調査では遺構等の検出はなかった。第1遺構面までの深さは現地表下40cmである。暗灰黄褐色シルト層の上面で竪穴住居1棟、溝2条、落ち込み状の遺構1基を検出した。



第37図 第38-2次調査区 平・断面図

SB101

調査区南端で竪穴住居の一部を検出した。遺構検出面から床面までの深さは約30cmである。SB101内で土坑(SK101)1基を検出した。上坑は幅1.4m、深さ40cmを測り、少量の土器が出土した。住居址に伴う中央土坑の可能性ある。

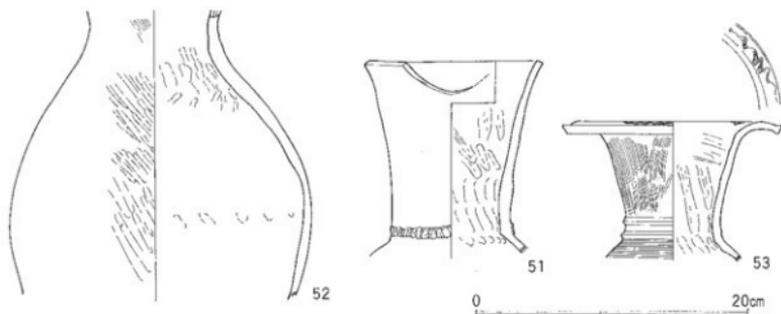


1. 盛土・覆土
2. 旧跡土
3. 黒褐色粘砂混じりシルト
4. 暗灰黄褐色シルト
5. 明黒褐色砂質シルト
(4・5: SB101埋土)
6. 黒褐色粘砂混じり砂質土
7. 黒褐色粘砂混じり砂質シルト
8. 暗褐色粘性シルト
9. 灰黄色粘砂+暗褐色砂質シルト
(6~9: SK101埋土)

0 2m

第38図 SB101 平・断面図

51は長頸壺の頸部である。残存高16cm、口径14.6cm、口縁の一部を抉り取る。頸部に指頭圧痕突帯を貼り付ける。頸部の内面は粗いナデ調整である。52は壺の体部である。全体の形状は不明であるが、やや胴長の体部からのびる頸部は長手になるようである。粗いハケ調整の後、部分的にミガキを施す。



第39図 SB101・SD101 出土遺物実測図

SD101

調査区の中央で南北方向の溝を検出した。幅1.8~2m、深さ40~50cmを測り、溝内からは弥生時代第Ⅲ~Ⅳ様式の土器が多く出土している。この溝は1条の溝として検出したが、土層を観察すると、元々あった溝が埋没し、その上に新たな溝が重なり合うように流れていることが判った。

図化できた53は口径18cm、残存高11cmの広口壺の頸部である。口縁端は頸部から屈曲気味に外反する。2条の断面三角形の貼り付け突帯の下位に櫛描直線文を施す。口縁部上面の文様は波状文である。外側はハケ調整、内面には粗いナデ上げ痕が残る。

SD102

東西方向の溝で、幅約1m、深さ約10cmを測る。溝内から弥生土器片が少量出土している。

SX101

調査区北半は深さ30~50cmで浅く落ち込む。遺構の北側が調査区外に出るため全体規模については不明であるが、この落ち込みからは細片ではあるが土器が多く出土している。

54は壺の口縁片で外面にヘラ描きによる矢羽状文の上に2個1対の円形浮文を付加する。55は壺体部片で彫りの深い櫛描直線文・波状文・斜格子文が見える。56~58は壺、あるいは鉢の口縁と思われる破片である。櫛描直線文・波状文・擬流水文が見られ、口縁端にはヘラ描きによる格子文等が施す。59~61は壺口縁片である。いずれも短く外反する口縁端部で、外面はハケ調整である。(54~61は写真のみ・写真図版47)

(2) 第2遺構面

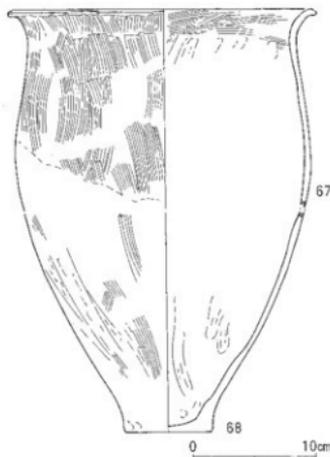
遺構面までの深さは現地地表下60cmである。第1遺構面のベースである暗灰黄褐色シルト層、明黒褐色砂質シルト層の堆積土を除去すると第2遺構面を形成する明褐色細砂質シルト層となる。

この遺構面では、溝1条とピット8基を検出した。

調査区中央で検出した東西方向の溝SD201は幅3~4m、検出面からの深さは40~50cmを測る。この溝からは第Ⅲ~Ⅳ様式の土器が多く出土しており、第Ⅱ様式の土器も比較的多く混じる。

62は壺の口縁片で短く外反する口縁下に櫛描直線文・波状文を施す。63も壺口縁片で口縁はわずかに折り曲げる程度である。櫛描による波状文を密に施す。64はやや強く外反し、外側に端面を持つ壺口縁片である。端部は強いナデ上げを施し、体部はハケ調整である。65は大型の壺の口縁片である。端部は水平気味に開き、丸く収める。66は壺の体部片で大型の土器と思われる。頸部下の部分にはヘラ描きによる沈線を施す。(62~66は写真のみ・写真図版48)

図化できた67・68は同一個体の甕であり、68の底部はSD201の上層に位置するSD101の埋土中から出土している。



第40図 SD201 出土遺物実測図

調査区の北半では、径20～40cm、深さ約20～30cmのピットを検出している。

3. 小 結

今回の調査では多くの遺構・遺物を検出した。

調査の過程では明褐色細砂質シルト層の遺構面においてSD201が埋没し、次にSX101が形成されるが、この遺構も本来は溝が複雑に切り合った遺構の可能性があり、最後にSD101がSX101を切って流れている状況とみられた。

隣地やその周辺での調査結果を比較検討しなければならないが、SD101と下層のSD201出土遺物の接合により、洪水等により緩やかに堆積した過程で土器が堆積し、その後生活面が形成され住居址がつくられるような安定した地盤になるように考えられる。

各遺構内から多量の遺物が出土しているが、第Ⅱ様式後半～Ⅳ様式前半までと時期幅は広く、周辺調査の結果と合わせ比較検討することにより、内容がさらに詳しく判るものと思われる。

第4節 第38-3次調査

1. 調査の概要

寺田町2丁目①番街路の西端、平成13年度に実施した第35-8次調査区東端の南側に接する場所で、幅約1.7m、長さ約12.4mの調査区である。この調査区でも周辺の調査地と同様に弥生時代の遺構面を2面検出した。

調査区内の基本層序は上層より盛土、旧耕上層、黒褐色シルト層（遺物包含層）、暗灰黄色砂質シルト層（第1遺構面基盤層）、黒灰色砂質シルト層（遺物包含層）、暗灰黄褐色砂質シルト層の順である。

2. 検出遺構と出土遺物

(1) 第1遺構面

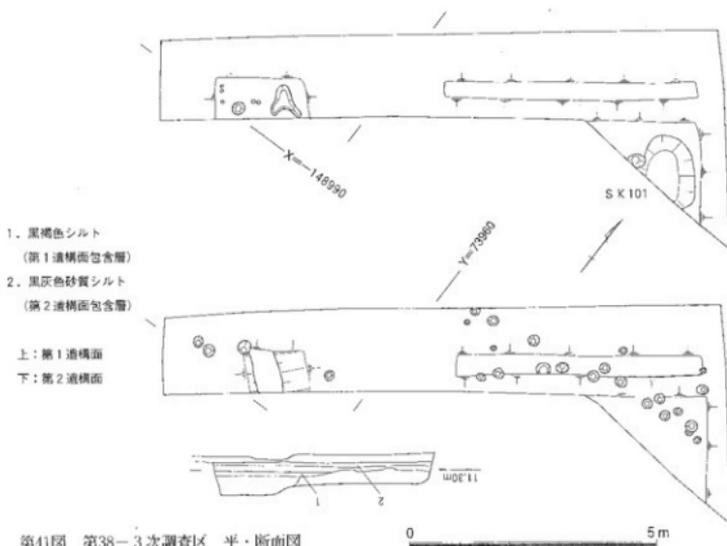
暗灰黄色砂質シルト層上面が第1遺構面で、遺構面までの深さは現地表下50cmである。調査区東端で、最大長約1.5m、最大幅約1m、深さ18cmの土坑を検出した。土坑内から少量の土器片が出土している。他の検出遺構は、径25cm程のピットのみである。

(2) 第2遺構面

暗灰黄褐色砂質シルト層上面が第2遺構面で、現地表下65cmに位置する。径20~30cm、深さ20cmのピットを多数検出した。これらのピットは、散在していて建物として纏まるものではない。ピット内からの遺物の出土はない。

3. 小 結

今回の調査地は、前年度の調査地南側にあたるが、調査区内の擾乱が著しく、また調査範囲が限定されていた。遺物包含層及び遺構の埋上からの遺物出土量が乏しく、遺構の時期決定の判断に欠けるが、前年度の調査と同様、弥生時代第Ⅲ様式~第Ⅳ様式の遺構面と考えられる。



第5節 第38-4次調査

1. 調査の概要

寺田町2丁目④番街路の南端に位置し、平成13年度に実施した第35-1次調査区の南側に接する。幅約2.8m、南北長約10mの調査区である。調査地の南半分以上が従前建物の基礎により掘乱を受け、遺構面は存在しなかった。

この調査区では弥生時代の遺構面を2面検出した。基本層序は、現代盛上・掘乱の下に、耕上、旧耕土層、暗褐色灰色砂質シルト層（遺物包含層）、明褐色灰色砂質シルト層（第1遺構面ベース層）、暗黄灰色砂質シルト層（第2遺構面ベース層）の順である。

2. 検出遺構と出土遺物

(1) 第1遺構面

明褐色灰色砂質シルト層上面が第1遺構面で、遺構面までの深さは現地表下約75cmである。土坑状の窪み（SK101）と落ち込み（SX101）を検出した。上坑は長さ1.8m、幅1.5m、深さ約15cmを測る浅い遺構で、遺構内からの遺物の出土はなかった。落ち込みは調査地の北端から北側に向かって緩やかに落ち込んでいる。この落ち込みの埋土からは、少量の弥生土器片が出土している。

(2) 第2遺構面

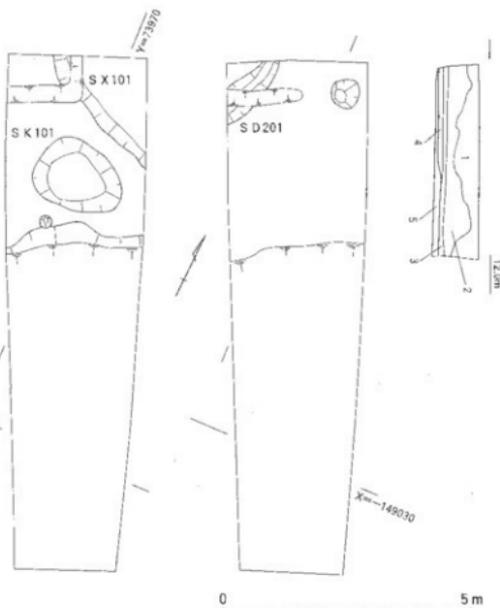
暗黄灰色砂質シルト層上面が第2遺構面で、遺構面までの深さは現地表下85cmである。調査区北側で溝（SD201）1条とピット1基を検出した。溝は幅60cm、深さ約10cmである。ピットは、径60cm、深さ約40cmを測る。これらの遺構から時期を特定できる遺物の出土はなかった。

3. 小 結

今回の調査地は、現段階での戎町遺跡の南端にあたり、遺物包含層は薄い堆積であり、出土遺物、遺構の存在が極めて希薄である。但し、遺構面が2面確認され、土層の堆積状況も前年度に調査を実施した北側の調査地と類似しているため、今回確認された基礎層はともに弥生時代中期頃の生活面と考えられる。

1. 盛土・掘乱
2. 旧耕土
3. 暗褐色灰色砂質シルト
4. 暗褐色灰色シルト
5. 明褐色灰色砂質シルト

左：第1遺構面
右：第2遺構面



第42図 第38-4次調査区 平・断面図

第6節 第38-5次調査

1. 調査の概要

寺田町1丁目①番街路の北から3分の1の範囲、幅約6m、長さ約11.5mの調査区である。隅切り部分を含むトレンチを設定した。今回の調査で確認した遺構面は1面のみである。

調査区内の基本層序は、上層より現代盛土・視乱の下に耕上、II耕土層があり、土壌化した黒褐色シルト層（遺物包含層）が僅かに堆積し、黒灰色シルト層の遺構面となる。

2. 検出遺構と出土遺物

現地表下約40cmの黒灰色シルト層上面で鋤溝4条と溝2条を検出した。

幅20~30cm、深さ5~10cm程の規模の溝を調査区の南西端で4条検出した。これらの溝は30~40cmの間隔で並んで検出され、底には鋤の痕跡が明瞭に認められることから、耕作に伴う鋤溝と考えられる。遺構面がかなり削平を受けており、溝の残りはよくなかったが、鋤溝は本来、もう少し東側に続いていたと思われる。

調査区の北側で検出した東西方向の溝（SD01）は、幅1.5m、深さ40cmを測る。溝の断面の形状はV字形を呈し、埋土からは弥生土器片が少量出土した。

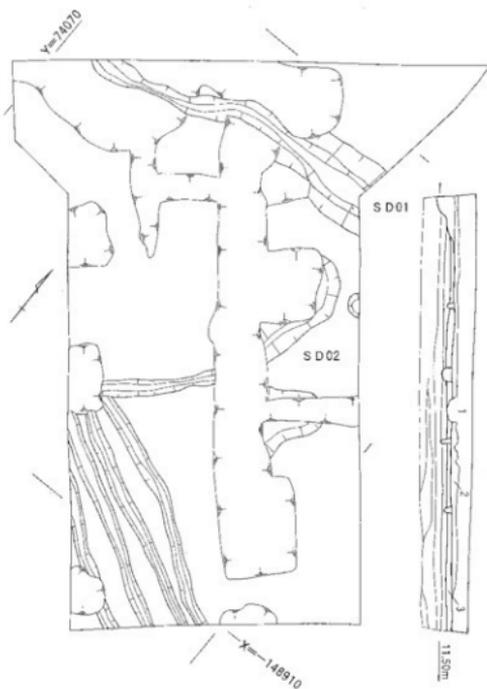
中央で検出した溝（SD02）は最大幅約70cmを測るが深さは約5cmと浅く、遺物の出土もなく時期については判然としない。

3. 小 結

調査区内では遺物包含層と遺構面が後世に削平を受け、いつの時期の遺構面であるか判断できなかった。周辺の調査において今回検出された鋤溝と同一方向・規模の溝が確認されているため、ある時期この周辺に高地が広がっていたと予想される。

また、同一面で弥生土器を含む溝を検出しており、本来は2面以上の遺構面が存在していた可能性が考えられる。

1. 盛土・視乱
2. 黒褐色シルト（遺物包含層）
3. 黒灰色シルト



第43図 第38-5次調査区 平・断面図

第7節 第38—6次調査

1. 調査の概要

調査地は平成13年度に実施した区画擁壁部分（第35—10次）の調査地の東に続く部分である。南隣地で個人住宅建設に伴う調査（第41次調査）が計画されたことから同時に調査を実施した。

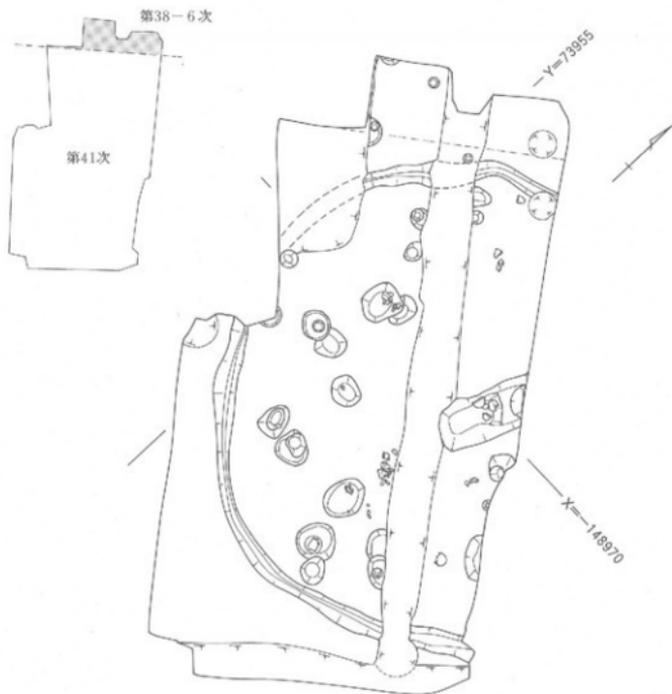
2. 検出遺構と出土遺物

第35—10次調査と同様、第1遺構面でピット3基、第2遺構面で土坑1基、ピット1基を検出した。出土遺物は第1遺構面で検出したピット内から弥生土器片が出土している以外は確認していない。

本調査区の第1遺構面に続く南隣の個人住宅建設地での調査区で円形竪穴住居を1棟検出しており、住居址出土の遺物は大半が未整理の状態であるが、弥生時代中期後半頃と考えられる。

3. 小 結

調査面積が限られていたため、本調査地ではピットが数基検出されたに過ぎないが、南側の個人住宅建設地では竪穴住居が検出され、平成13年度の周辺調査の成果も含め、この付近での生活域の中心が一带に存在することが判明しつつある。



第44図 第38—6次調査区及び第41次調査地 平面図

第8節 第38—7次調査

1. 調査の概要

寺田町2丁目①番街路の東端、平成13年度に実施した第35—9次調査区東端の南側に接する調査区で、幅3.7m、長さ14mの調査区である。この調査区では遺構面を2面検出した。

調査区内の基本層序は、現代盛土・攪乱の下に、旧耕土層である淡灰黄色砂質土層・灰黄色砂質シルト層（第1遺構面ベース層）、黒褐色シルト層（遺物包含層）、暗茶褐色砂質シルト（第2遺構面ベース層）の順である。

2. 検出遺構と出土遺物

(1) 第1遺構面

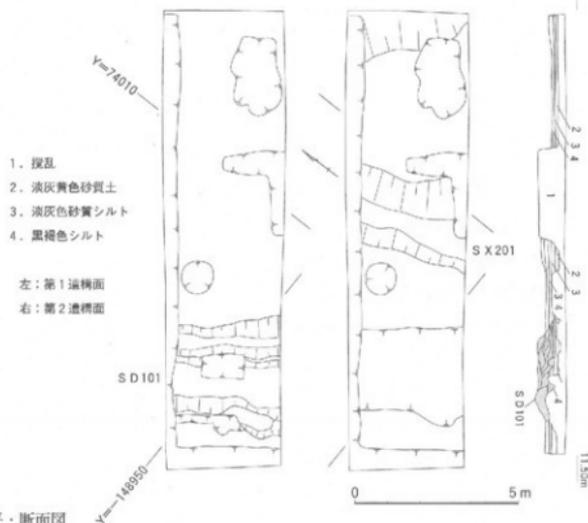
灰黄色砂質シルト層上面が第1遺構面となる。遺構面までの深さは現地表下30cmである。調査区の西側で、南北方向の溝（SD101）1条を検出した。最大幅約3.6m、深さ約55cmを測る溝で、溝内から中世頃の須恵器・土師器が出土した。また溝の底には偶蹄目類の足跡が残っていた。

(2) 第2遺構面

暗茶褐色砂質シルト層上面が第2遺構面で、遺構面までの深さは現地表下40cmである。東側に緩やかに落ちていく地形と調査区中央で浅い溝状の落ち込み（SX201）を検出した。自然地形の可能性が高い。

3. 小 結

今回の調査では遺構面を2面確認した。前年度の調査では弥生時代の遺構面を2面確認しているが、今回の調査で中世頃の溝を検出したことにより、本来、周辺には中世の遺構面を含む3面以上の生活面が存在していたと考えられる。この調査地は遺跡の中心部から離れていて、遺物包含層からの遺物の出土量が少なく、遺構の存在が極めて希薄であることが判った。



第45図 第38—7次調査区 平・断面図

第9節 第38—8次調査

1. 調査の概要

寺田町1丁目①番街路中央部分の調査である。幅6m、南北約20mのトレンチである。後世の削平により遺物包含層はほとんどなく、現地表下30cmで遺構面が検出された。

2. 検出遺構と出土遺物

調査区内の北半で鋤溝を11条と南半で断面U字形の大きな溝1条を検出した。

鋤溝

鋤溝はN-57°-Wの方向で、幅25-40cm、深さ15cm、溝の間隔は約50cmで均等に並んだ状態で検出した。これらの鋤溝は調査区のほぼ中央付近で南北方向に端を揃えて終了している。鋤溝の底では耕作時に農耕具の先が突き刺さった痕跡が顕著に検出された。耕具の先は丸く、15-20cmの間隔で耕作痕が見られる。なお極少量の遺物が出土しているが、時期を特定するには困難である。

溝

鋤溝が途切れたすぐ東隣で検出した。幅1.0-1.4m、断面は緩やかに立ち上がるU字状を呈しており、底には大きく窪んだ箇所があり、一定の深さではない。検出面からの深さは30-50cmである。

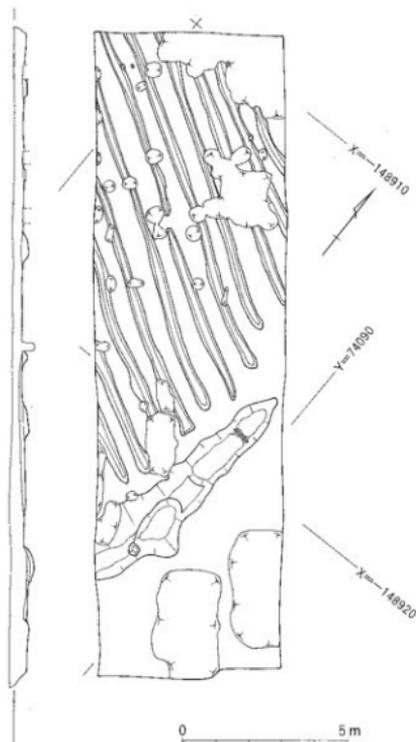
この溝と、ほぼ重なるように攪乱が存在したために、溝の埋土に関しては観察不能であったが、底に埋設していた埋土は鋤溝を埋めていたものと同様のものであった。

時期については鋤溝と同時期のものとも考えられるが、特定するには困難である。

3. 小 結

包含層が削平されて存在しなかったため、出土遺物が少なく時期の特定ができないが、岳地における耕作単位が明確にわかる資料が得られた。

また南北方向の大きな溝に関しては、本調査区の西側に位置する第38-11次調査区において方形周溝墓が検出されていることから、周溝墓の溝となる可能性がある。



第46図 第38—8次調査区 平・断面図

第10節 第38-9次調査

1. 調査の概要

寺田町1丁目①番街路北端に位置する調査区である。現地表下約60cm、盛土、現耕土層を除去した直下の黄白色粘上層が遺構面である。

2. 検出遺構

溝1条と浅い窪み状の落ち込み1基を検出した。

SD01

溝は、調査区の南西角の位置で検出したが一部を確認したのみで、北側に続くものと思われる。幅15cm、深さ5cm程の小規模なもので遺構の性格は不明である。土器片が数点出土したが、小片であり、遺構の時期は不明である。

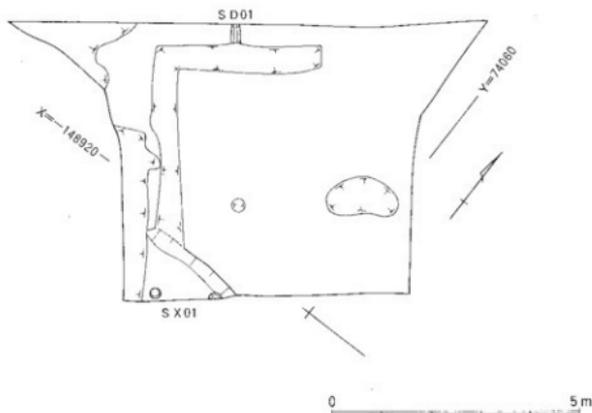
SX01

調査区南角部で検出した落ち込みである。検出範囲は極一部のみで大半は調査区外に広がるようである。調査区内では南北幅約1.6m、東西最大幅1.1mで深さは約20cmである。遺物は全く出土しておらず、遺構の時期、性格は不明である。

3. 小 結

今回の調査地については遺構面の残存状態も悪く、明確な遺構も1基しか確認されなかった。これは削平等によって遺構が消滅した場合と、当初より遺構が希薄であった場合の2つの可能性が考えられる。今後の検討課題といえるであろう。

隣接する街路部分や個人住宅建設地でも数多く発掘調査を実施しているが、どの調査区でも今回の結果と同様に遺構面の残存状態がよくない場合や、出土遺物が少なく遺構の正確な時期が不明なものが多い。周辺の調査結果と合わせて考える限りでは、今回検出された遺構面の時期も概ね弥生時代か古墳時代の可能性が高いと考えられる。



第17図 第38-9次調査区 平面図

第11節 第38—10次調査

1. 調査の概要

寺田町2丁目⑤番街路部の調査である。東隣地で個人住宅建設に伴う調査（第43次）が生じたため今回の調査区と同時に実施した。また南側は区画整理に伴う第38—2次調査地に接する。

調査の結果、中世の遺構面1面と弥生時代の遺構面2面の計3面の遺構面を検出した。

2. 検出遺構と出土遺物

(1) 第1遺構面

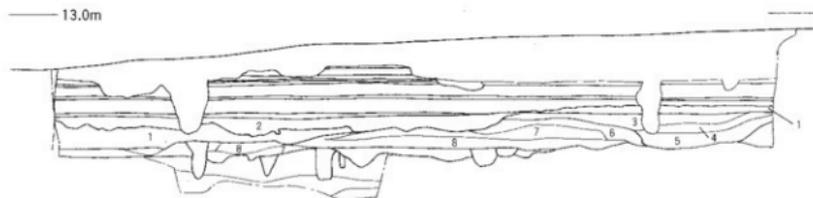
洪水層に覆われる中世の遺構面である。現地表下90cmの黒褐色砂混じりシルト層が基盤層である。土坑1基、牛の蹄跡を検出した。また個人住宅部分では幅約1m、深さ約10cmの溝を1条検出している。

S X 01

径4m以上を測る円形プランの広く浅い落ち込みである。底面は凹凸が日立ち、埋土は灰色砂質シルトで径70mm以内のブロック状になったベース上を15%含む。この落ち込みは掘り返された後すぐに埋め戻されたものと考えられる。

牛蹄跡

遺構面上で蹄跡を多く検出した。集中する部分とそうでない部分があり、S X 01東側に比較的広い範囲で存在する。蹄跡の凹みには洪水層が入る。



1. 黒褐色砂混じりシルト
2. 灰色砂質シルトに径70mmの第1層ブロック15%含む (下面は不整合で掘り返しの痕跡が歴然)
3. 黒褐色シルト
4. 黒褐色粗砂混じりシルト
5. 黒褐色シルト質極細砂
6. 黒褐色粗砂質シルト (洪水砂)
7. 暗灰黄色砂質シルト (洪水砂)
8. 暗灰黄色極大粗砂質 (洪水砂) (第1層より上層はいずれも旧耕土層)

第48図 第38—10次調査区 断面図

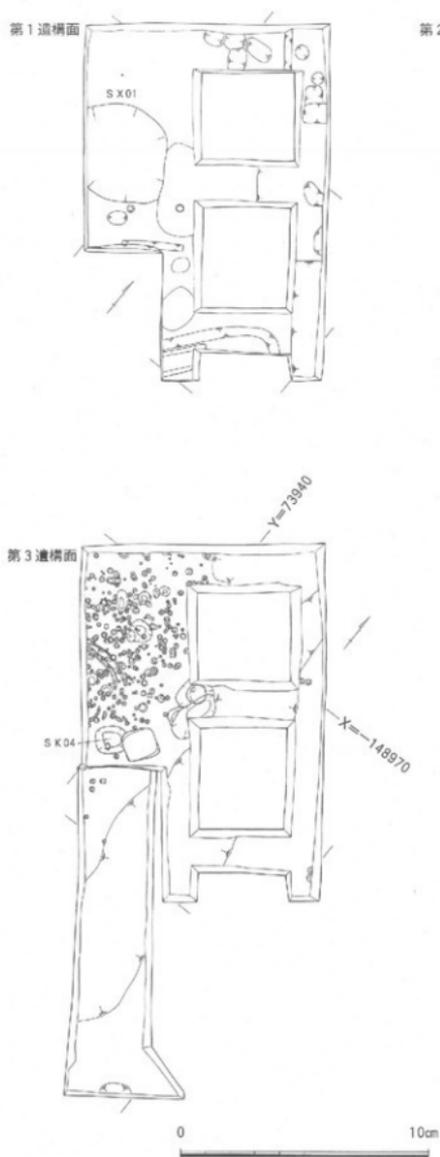


(2) 第2遺構面

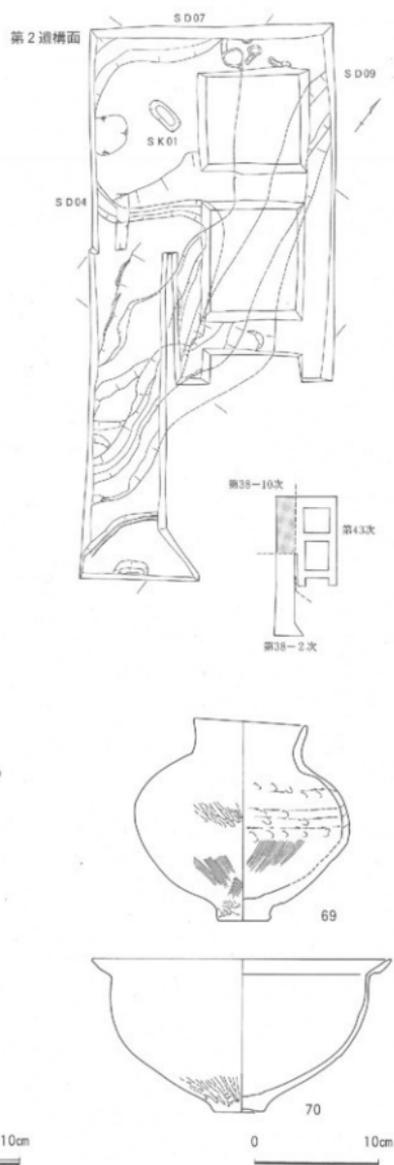
第1遺構面の基盤層下面で検出した遺構面である。第43次調査地から南流する幅の広い溝S D 09の埋没後に掘削される溝S D 07・04、土坑S K 01等が確認された。

S D 09

幅約6m、深さ1.1mを測る溝である。右岸寄りには浅く、埋土も黒く土壌化しており、土器が集中して出土する部分（S X 03）がある。一方、左岸寄りには底が深くなり、埋土も土壌化した上と砂を主体とする互層となっている。全体に土器の出土量が多い。



第49図 第1～3遺構面 平面図



第50図 SD02 出土遺物実測図

SD07

調査区北西隅で検出したSD09の埋没後に掘削される溝である。調査区の北西端に位置し、全体の規模は不明であるが、調査区内では幅80cm～1.5m、深さ約1.1mを測る。復元可能な遺物は少ない。

SD04

幅50cm、深さ約15cmの東西方向の溝である。SD07から弧を描くように続く。南側は同規模の南北方向の溝SD02に繋がるようで、SD02・04・07のこれらの溝は5～7mの単位で直角に曲がり、方形周溝墓状に見える。第38～2次調査地で検出したSD102がこれにつながる可能性もあるだろう。この場合長さ1m、幅60cm、深さ約15cmを測る土坑SK01が埋葬施設になるかもしれない。連の溝出土器で図化できたのはSD04から南に続くSD02出土の2点である。

69は口径9cm、器高17cmを測る台付の短頸壺である。胴部下半に9条/cmのハケ調整が見られ、最大径を測る部分にミガキ痕が見える。内面上半は粘土の接合痕が残り、指押さえの跡が明瞭である。頸部は外湾し、端部は丸く収める。70は口径24cm、器高12cmの鉢である。磨耗がひどく、底部にタタキ様の跡とミガキが確認できたのみである。非常に器壁が薄く、口縁端部のみ外側に肉厚化しながら広がる。屈曲は強い。

(3) 第3遺構面

現地表F1.1mの黄灰色粗砂層上面で検出した遺構面である。第43次調査と併せ土坑7基、柱穴多数を検出した。

SK04

約1.5m×1mの隅円方形のプランを呈する土坑である。壁面がオーバーハングしており、その形状から貯蔵穴と判断される。遺構確認面からの深さは約40cmで、中央部がさらに一段10cm程下がる。埋土は炭層を主体とするが木質は認められず、藁のようなものの炭化物と思われる。断面が袋状を呈する土坑は、この他にSK06が挙げられる。

柱穴群

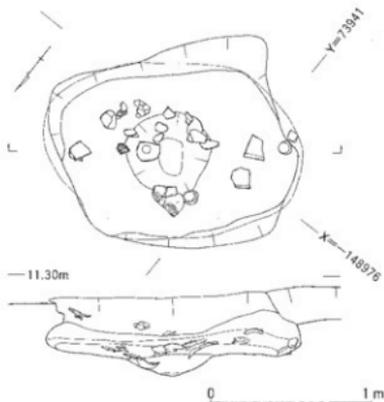
周辺の調査区と合わせ確認すると、第38～10次調査区周辺で特に柱穴が集中することが認められる。他に弧状の細い溝も検出され、平地式住居のようなものが数棟同じ位置に建てられている可能性も考えられよう。

3. 小 結

この調査地周辺の発掘調査では竪穴住居をはじめ、多量の遺構・遺物が確認されている。今回の調査地でも多量の遺物が確認され、第3遺構面ではこの周辺が弥生時代の「戎町」ムラの居住域の中でも遺構密度の濃密な部分の一つになることを確認することができた。

また第2遺構面では方形周溝墓の可能性のある遺構が確認され、時代を遡え、当地が墓域として利用されるようになった可能性がある。ただ、南の街路部分での調査(第35～8次調査)では同型の溝は確認されていない。SD09埋没後の凹みが墓域の区画となっていた可能性がある。

第2遺構面・第3遺構面ともに弥生時代中期の遺物が多く出土しているが、第2遺構面のものについてはさらに新しい時期のものがあるようだ。



第51図 SK04 平・立面図

第12節 第38—11次調査

1. 調査の概要

寺田町1丁目②番街路、第38—9次調査地の南側に接する調査区である。当初90㎡の調査区を設定したが、調査区の南端で周溝墓を検出し、さらに南側に広がることが判明したため、南側に調査区を拡張して調査を実施した。

重機によって表土及び耕土層を除去した後、人力による調査を実施した。遺構検出面は表土下約40cmで、北側部分は後世の耕作や建物の基礎工事の影響を受け、文化財の存在は確認できなかったが、調査区中央部から南側部分で周溝墓1基、溝状遺構、掘立柱建物、土坑、柱穴を検出した。

2. 検出遺構と出土遺物

周溝墓

調査区のほぼ中央で検出した方形周溝墓である。主体部と北側と東側の周溝が検出された。西側と北側の周溝は調査区の制約により不明であるが、周溝は全周せずに陸橋部を持つタイプの方形周溝墓と考えられる。また陸橋部で土坑を1基検出した。

主体部

旧耕土直下で長さ1.7m、西端幅90cm、東端幅70cm、深さ15cmの浅い土坑を検出した。配置等から墓坑と考えられるが棺の痕跡等は確認できなかった。遺物の出土もない。

周溝1（北側）

幅2.4m、深さ30cmを測る。検出方向はほぼ東西方向である。壺の底部が出土している。

周溝2（東側）

幅2.4m、深さ50cmを測る。検出方向はほぼ南北方向である。溝底は平坦である。溝底から約15cm浮いた状態で土器がままとって出土した。北側周溝と接続しているがコーナー部分の深さは約15cmと、他の部分に比べて浅い。壺の底部と下層の土器集中部から壺が出土している。

SK01

北側周溝の西端部分に接した陸橋部で検出した長径80cm、短径70cm、深さ約20cmの土坑である。肩部から高杯と大型の鉢口縁が出土した。高杯の杯部と脚部は遊離しているが、鉢部は伏せられた状態であり、本来は倒立状態で置かれたと考えられる。埋土下層からはその他に遺物の出土はなかった。周溝墓に伴う遺構と考えられる。

SD01

周溝1の約1m北側で、幅80cm、深さ20cmの溝が検出された。遺物は出土しなかった。

SB01

1間×2間の掘立柱建物を1棟検出した。建物の主軸はほぼ東西方向である。柱間は1.8m～2mである。小片ではあるがビットから遺物が出土しており、弥生時代中期の建物と考えられる。

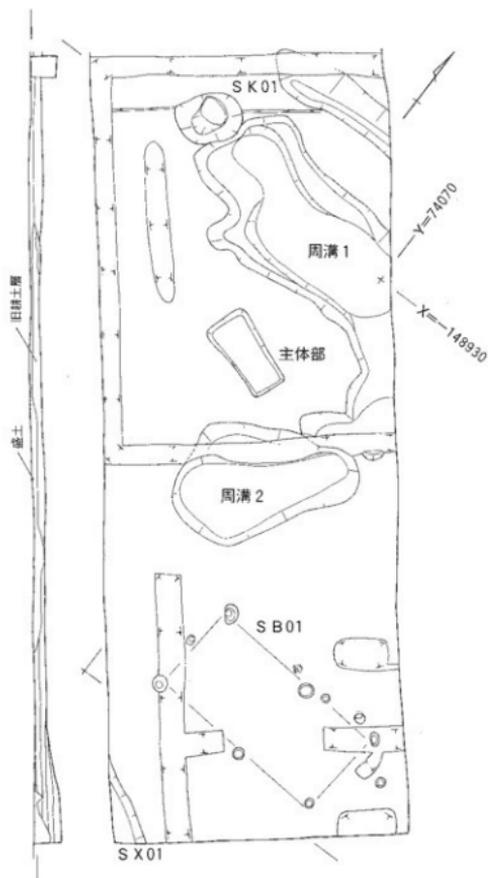
SX01

調査区南端で検出した落ち込みであるが、遺構の大半が調査区外にのびるため詳細は不明である。

出土遺物

周溝1出土の71、周溝2出土の72はともに壺の底部である。71は底径8cm、72は6cmである。外面調整はヘラ磨き、内面は7条/cmのハケ調整を施す。

SK01出土の73は径37cmに復元される大型の鉢口縁部である。端部を内外方に拡張し、上面に円形浮文を



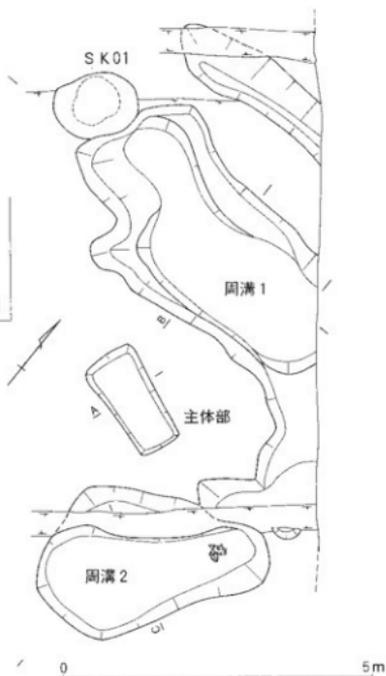
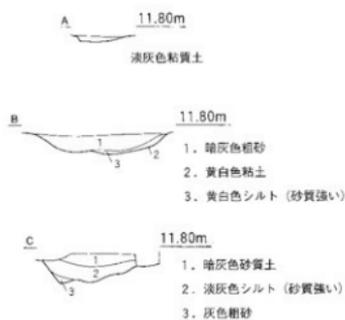
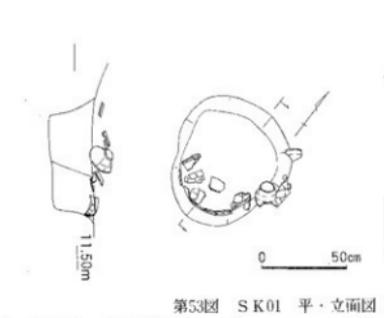
第52図 第38-11次調査区 平・断面図

0 5m

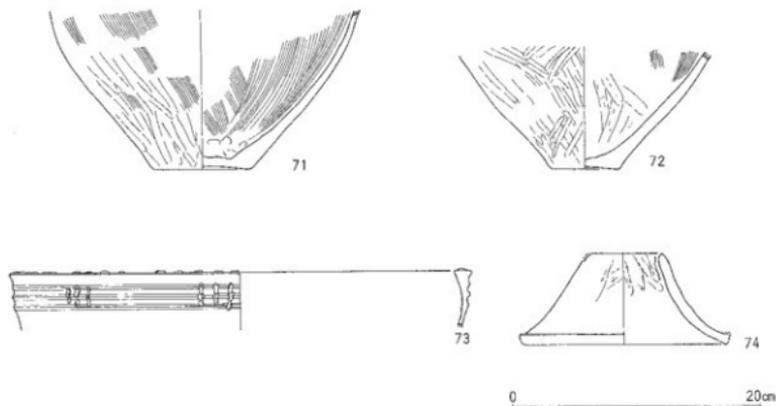
貼り付ける。口縁下に3条の凹線文を巡らせ3条1対の棒状浮文を付加する。74は底径16.8cm、器高7.4cmを測る脚部である。調査時には倒立状態で置かれた高杯と思われたが、杯部は細片の上に脆く、復元不可能であった。上端の径は6cmで端部は丸く収める。内面にわずかにしぼり痕が残る為、円盤充填による成形と考えられる。

3. 小 結

今回の方形周溝墓の検出により調査地周辺に弥生時代中期の墓域が広がる可能性が高まった。調査区外に拡がり、また後世の削平により溝、墓坑とも遺存状況は必ずしも良いものではなかったが、周溝墓の規模を推定できる資料を得ることができた。今後、周辺での調査が進めば墓域の復元が可能になるであろう。



第54図 方形周溝築 平面図



第55図 周溝1・2及びSK01 出土遺物実測図

第13節 第38—12次調査

1. 調査の概要

寺田町1丁目③番街路南半部の調査である。平成13年度に実施した第35—5次調査地の北側に接する部分の調査である。第35—5次調査については先年度に調査完了としていたが、先の調査で検出した溝状遺構が今回の調査区に続くことが明らかになり、遺構の性格を確認する目的と埋め戻し土の崩落を防止する安全上の理由から先年度調査区の埋め戻し土を除去し、合わせて検討を行った。

遺構検出面は現地地表下40cmである。調査区のほぼ全域で遺構面直上まで耕作土が堆積しており、遺物包含層は存在せず、遺構面にも大きな影響を与えている。耕土層より弥生時代中期から中世に至る遺物が出土し、異なる時期の遺構面の存在が想定されたが、検出した遺構面は1面である。溝状の耕作痕10条、土坑、周溝墓に伴う溝2条、柱穴を検出した。

2. 検出遺構と出土遺物

耕作痕

周辺の調査区でも確認される耕作痕である。調査区の北半部分を中心に検出した。幅30～40cm、深さ10～20cmの溝が約50～70cmの間隔で磁北から西に約70度振った方向に直線的に掘削されている。埋土は黒色粘質土で、弥生時代中期の遺物が少量出土した。時期は弥生時代中期の可能性はあるが確定できない。S D01と接する2条についても耕作痕の残存状況が悪く、新旧は不明である。

S K01

長さ3.4m、幅2m、深さ20cmの不定形の上坑である。耕作痕に切り込まれている。埋土から弥生土器が少量出土した。用途は不明である。

溝状遺構

溝状の遺構を2条(S D01・02)検出した。2条ともに掘削方向は磁北に平行し、溝底から弥生時代中期中葉の遺物が出土している。調査区の制約により全体の形状は不明であるが、遺物の出土状況等、方形周溝墓を構成する溝である可能性が高い。

S D01

第35—5次調査区で検出した溝状遺構の北端部分が確認できた。幅約3.4m、深さ約80cmの溝で底は平坦である。溝底北端部分の両コーナーは直角に掘削されている。溝肩部分の立ち上がりは約45度で、底部付近ではほぼ垂直に立ち上がっている。先の調査では埋土上層より細片ではあるが多くの遺物を検出している。今回の調査では上層からの出土遺物は少なく、溝底より大型の壺を1点検出した。但し、器壁が薄く細片となったため復元は不可能であった。

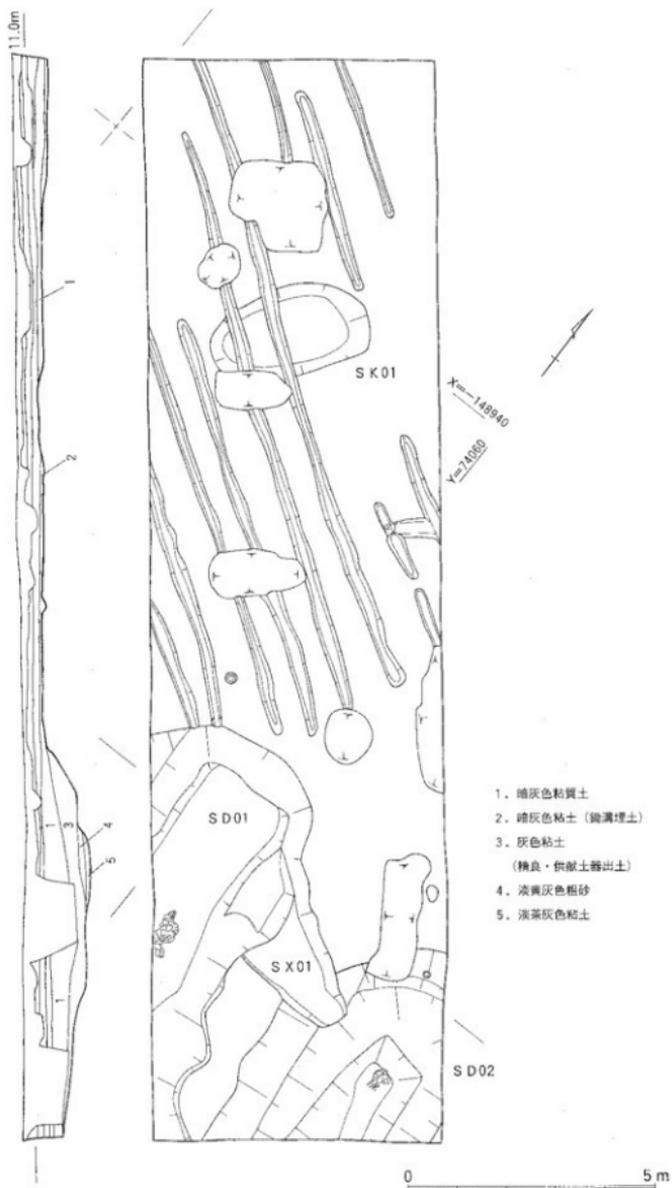
S D02

調査区の制約により全体の形状は不明であるが、幅4m以上、深さ50cm程度の溝である。溝肩部分の立ち上がりはS D01と異なり、緩やかである。溝底より弥生時代中期中葉の完形の長頸壺を1点検出した。

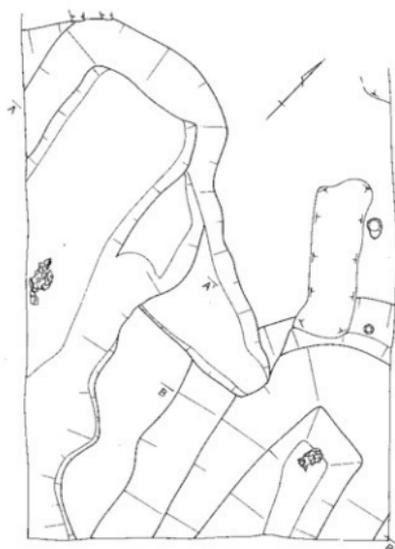
76は口径13cm、器高38.6cmを測る。頸部から体部上半にかけては磨耗がひどいため細部の調整痕は明らかでないが体部外面下半は細かいヘラ磨きを施す。頸部には板状工具の痕跡とともに「十」のようなヘラ記号様の線刻が見える。75は遺構精査時に面上に広がっていた遺物である。口径15cm、器高17cmを測る甕で、外側は細かいハケ調整で仕上げる。口縁端部はわずかに外側に開く程度である。

S X01

S D01とS D02の間で、両遺構に接する落ち込みが検出された。深さは15cm程度で、直径1cm以下の砂礫



第56图 第38-12次調査区 平・断面图

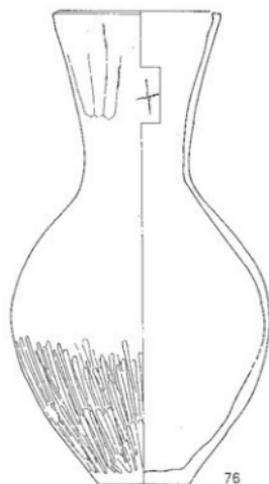
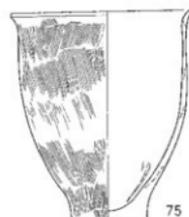


1. 黒灰色粘土 (粘土) 2. 灰色砂質土 3. 淡灰色シルト 4. 淡黄灰色粘質土
5. 深灰色砂質土 6. 淡灰色砂質シルト 7. 淡黄灰色粘土



0 3m

第57図 SD01・02 平・断面図



0 10cm

第58図 出土遺物実測図

が堆積している。遺物は出土しなかった。SD01・02との時期差は不明である。

3. 小 結

周溝墓及び周溝と考えられる遺構が検出されたことで、今回の調査区周辺に弥生時代中期の墓域が広がる可能性が高まった。より高位に当たる北側部分は遺構が希薄となるが、遺構検出面が後世の削平による影響を強く受けた結果であって、本来は北側部分においても遺構は存在したと考えられる。

調査区北半で検出した耕作痕の時期については、時期の判明している遺構との明瞭な切り合い関係がなく出土遺物も少なく特定できないが、埋土である黒灰色粘土がSD01やSD02の埋土と共通することや、少量ながら弥生時代中期の遺物が出土すること等から当該時期の遺構である可能性がある。一帯で広範な分布を示す遺構であり、調査区間の遺構の併行関係や土地利用を考える上で重要であり、今後の調査による時期の特定を期待したい。

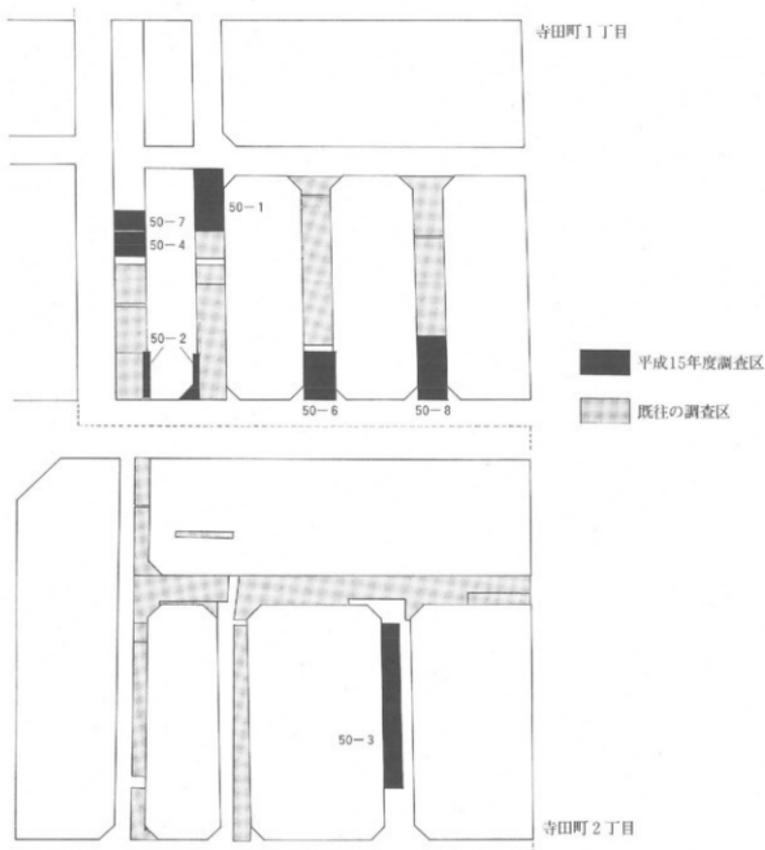
第4章 戎町遺跡 第50次調査の成果

第1節 第50次調査の概要

平成13・14年度と継続して実施している調査により寺田町1・2丁目付近における戎町遺跡の様相が徐々に明らかになりつつある。寺田町2丁目では北西部を中心に住居址をはじめとする生活域に伴う遺構の検出が顕著となっており、寺田町1丁目では方形周溝墓を主体とする墓域の広がりが確認されている。

今年度も引き続き街路部分8箇所での調査を実施した。調査地点は第59図の通りである。

寺田町1丁目では南北街路の残り部分と西端の拡幅部の7箇所を、寺田町2丁目では東の街路部1箇所の調査を実施した。

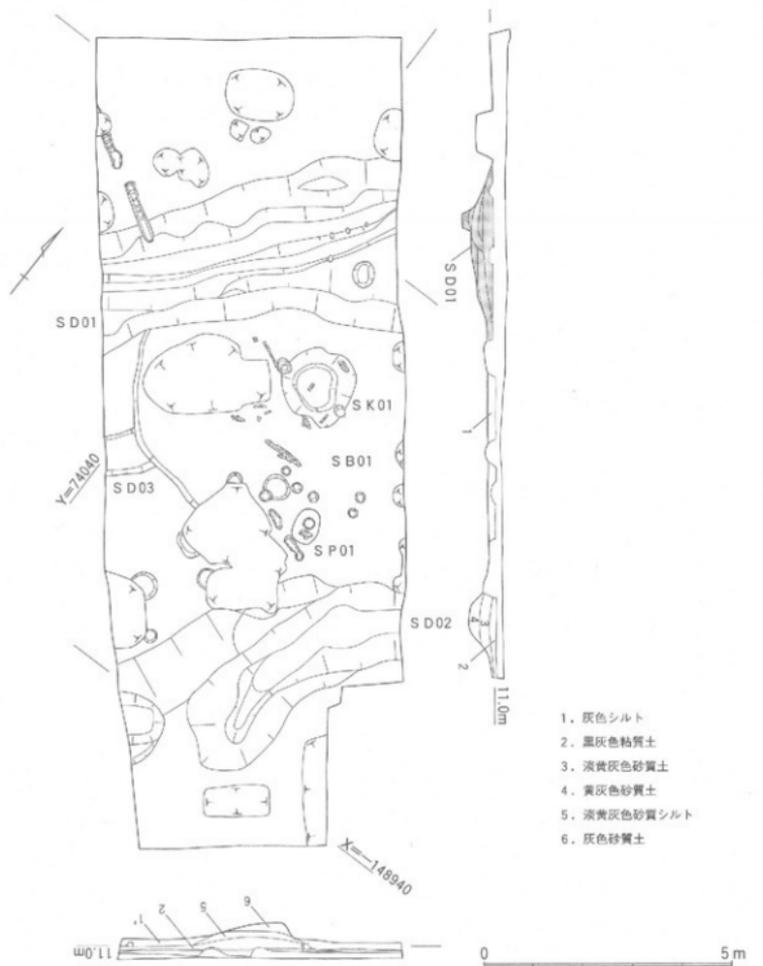


第59図 戎町遺跡第50次調査 調査地位位置図

第2節 第50-1次調査

1. 調査の概要

寺田町1丁目③番街路の北端部の調査である。平成13年度調査の第35-6次調査区に接する。遺構検出面は表上下約30-40cmである。調査区中央部に視乱が見られる以外に建物の基礎等による影響は少ないが、後世の耕作により遺物包含層は失われている。遺構面は、標高の高い調査区北端部を除き良好に遺存している。検出遺構は耕作痕と溝状遺構2条、竪穴住居1棟である。



- 1. 灰色シルト
- 2. 黒灰色粘質土
- 3. 淡黄灰色砂質土
- 4. 黄灰色砂質土
- 5. 淡黄灰色砂質シルト
- 6. 灰色砂質土

第60図 第50-1次調査区 平・断面図

2. 検出遺構と出土遺物

耕作痕

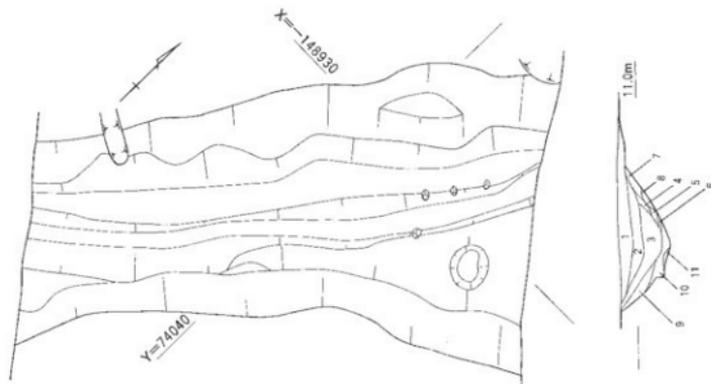
調査区北端部に耕作痕を検出した。周辺調査区で検出している耕作痕の方向と一致する。出土した遺物は細片であり、時期を特定できない。

溝状遺構

溝（状遺構）を3条検出した。周溝墓に伴う溝と考えられるものが存在するが、今回の調査では主体部が確認されなかったため、確定することはできない。

SD01

幅2～3.5m、深さ約30cmの溝である。中段付近で、護岸のために打ち込まれたと考えられる杭穴を検出した。溝の断面形状は、緩やかな傾斜をもっているが、底部に幅40cm、深さ20cmの、断面逆台形の掘り込みがある。このような断面形状は、当遺跡の周溝墓の周溝に見られるが、護岸用の杭を伴う例は無い。規模が大きいことも考え合わせると、単独の周溝墓に伴うものではなく、墓域を区画する等の用途を考える必要がある。埋土より、弥生時代中期中葉の遺物が出土している。



1. 灰色砂質粘土 2. 暗灰色砂質粘土 3. 濃灰色砂質シルト 4. 灰白色砂質土 5. 黄灰色細砂
6. 灰色細砂 7. 濃黄白色砂質土 8. 淡灰色粗砂 9. 灰色細砂 10. 灰白色粗砂 11. 黄白色粘土

0 3m

第61図 SD01 平・断面図

SD02

幅1.4m、深さ約60cmの溝状遺構で、わずかに弧を描いて掘削されている。溝底の形状は方形を意識した形状を呈しており、本調査区周辺で検出している周溝墓の周溝の形状に類似する為、周溝墓に伴う溝である可能性が高い。埋土より、弥生時代中期中葉の遺物が出土している。

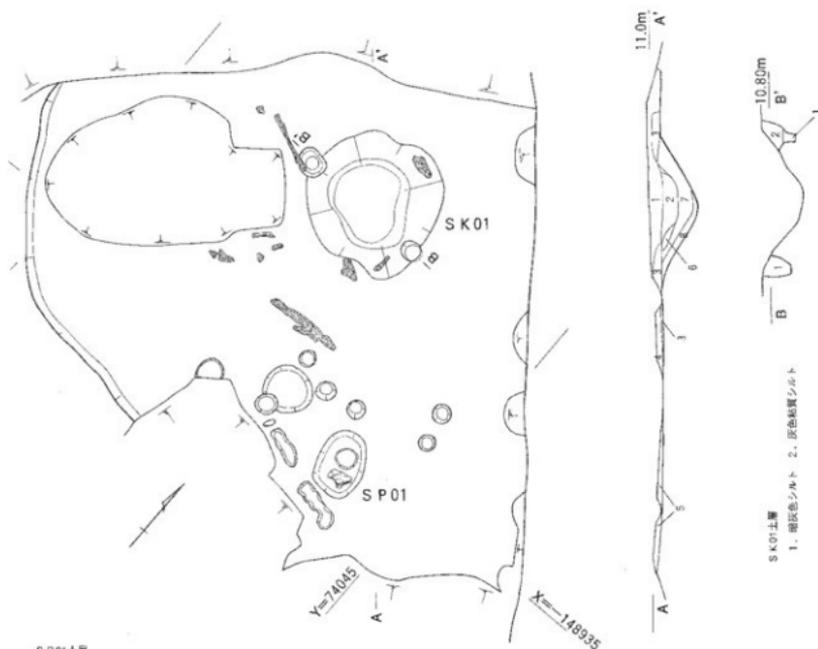
SD03

幅80cm、深さ10cm程度の溝状遺構である。遺物は出土しなかったが、SB01に切り込まれていることから、弥生時代中期前半以前の遺構である。遺構の性格は不明である。

竪穴住居

S B01

調査区中央で竪穴住居1棟を検出した。後世の擾乱や後出の遺構により遺存状況は悪い。北側はS D01に、南側はS D02に切り込まれており、全容は明らかでないが、直径7.5mほどに復元できる円形の竪穴住居と考えられる。周壁の立ち上がりはわずかに10cmほどしか残っておらず、厨壁溝は検出されなかった。住居址の埋上からは弥生時代中期前葉の土器片が出土したが、個体として纏まるものはない。床面直上から多くのサヌカイト片と炭化材が検出されていることが特記される。竪穴住居に伴う遺構は中央土坑、柱穴である。中央土坑は、直径約1.6m、深さ40cmを測る。炭片が多く検出され、灰として使用されたと考えられるが、被熱痕は明瞭ではない。埋土からサヌカイト片が少量出土した。柱穴は中央土坑の東西の両端部で、直径約20cm、深さ約10cmの浅いピットが検出された。用途は不明であるが、中央土坑に関連する遺構と考えられる。炭化材や被熱痕はない。その他、敷基の柱穴を検出したが、確実に建物の上屋に伴う柱穴と考えられるものはS P101のみである。埋土より弥生時代中期前半の甕蓋の破片が出土したが遺存状態は非常に悪く、器蓋は脆く復元は不可能であった。



S B01土層

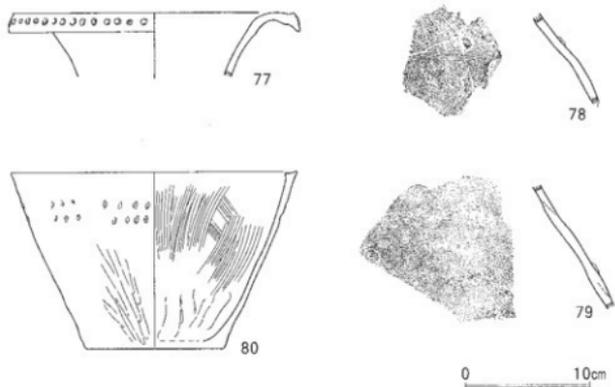
1. 灰青色砂質土 2. 濁黄灰色砂質土 3. 暗灰色砂質土 4. 灰色砂質土 5. 淡灰色砂質土
6. 暗灰色砂質土 7. 黒灰色砂質土 8. 濁黄灰色砂質土

0 3m

第62図 S B01 平・断面図

出土遺物

図化可能な遺物は少ない。SD01から出上した77は壺口縁片である。復元径23cm、肥大化し垂下した端面の外面には凹形浮文を付加する。78・79は壺体部片である。櫛描直線文・斜格子文・凹形浮文が見られる。80は径23cm、高さ14.5cmに復元できる鉢である。直口の口縁下、体部上半に刺突文を2列巡らす。体部外側下半はミガキ調整、内面上半には7条/cmのハケ調整を施し、下半から底部内側は指ナデの痕跡が残る。



第63図 SD01 出土遺物実測図

3. 小 結

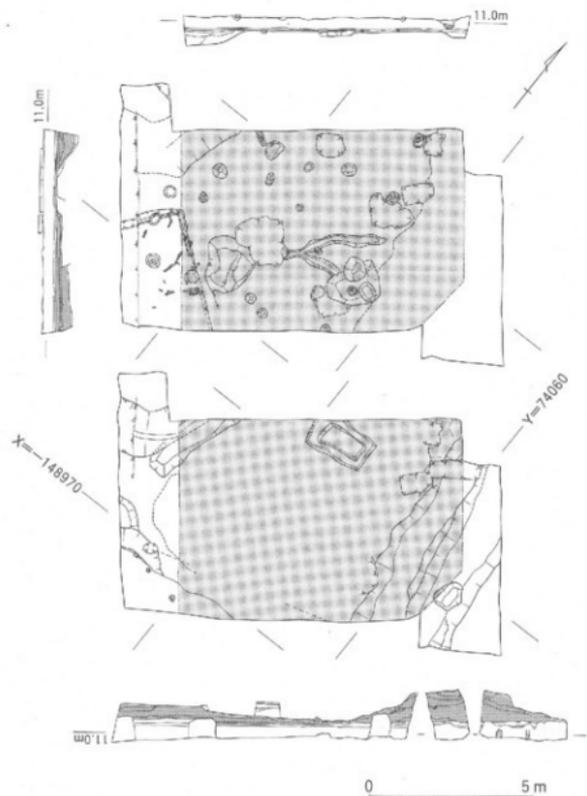
今回の調査では、明確に周溝墓と断定できる遺構は確認できなかったが、近接地点の調査によって、SD01・SD02の性格が明らかになるものと考えられる。

これまでの調査結果から、寺田町1・2丁目近辺の居住域の形成は、弥生時代中期中葉以降と考えられていたが、弥生時代中期前半の竪穴住居の存在が確認されたことで、さらに古い段階から居住域が形成されていたことが予測される。中期前半に属すると考えられる遺構は、住居址と住居址に切り込まれるさらに古い段階の溝（状遺構）以外に検出されていないため、集落の構成等は不明であるが、弥生時代中期中葉以降に墓域として土地利用がなされる前の段階に居住域が存在したことは、当地区の土地利用の変遷を考える上で好資料といえる。

第3節 第50—2次調査

1. 調査の概要

平成13年度の第35—4・5次調査及び平成14年度の第38—12次調査の時点で既存建物のために十分掘削が行えなかった範囲について、建物の除却後に行われた個人住宅建設に伴う調査（第49次調査）と並行して、先の調査区と接続するよう調査区を設定した。第35—4次調査では方形周溝墓に伴う溝を、第38—12次調査においても大規模な溝から供献された土器が出土した。周溝墓に伴う溝と考えられる遺構を検出しており、その続き部分の検出に努めた。第49次調査区を挟み、東地区と西地区からなる。旧耕土層の下に薄い暗褐色シルト層の包含層があり、土壌化した褐色シルト層下の黄色シルト層が遺構面である。古墳時代後期、弥生時代中期の遺構を同一面で検出した。



※平面図のトーン部分は第49次調査区
断面図のトーン部分は遺構埋土

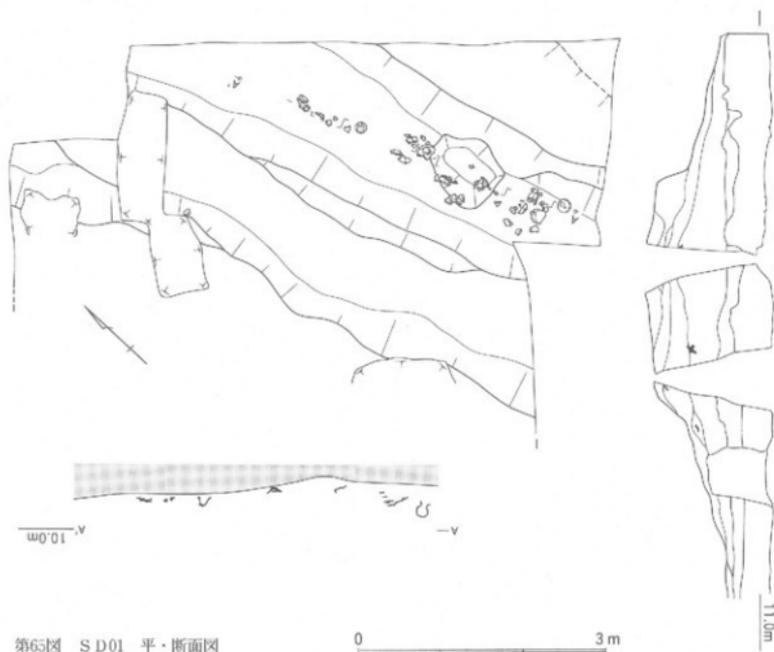
第64図 第50—2次調査区及び第49次調査地 平・断面図

2. 検出遺構と出土遺物

(1) 東地区

S D 01

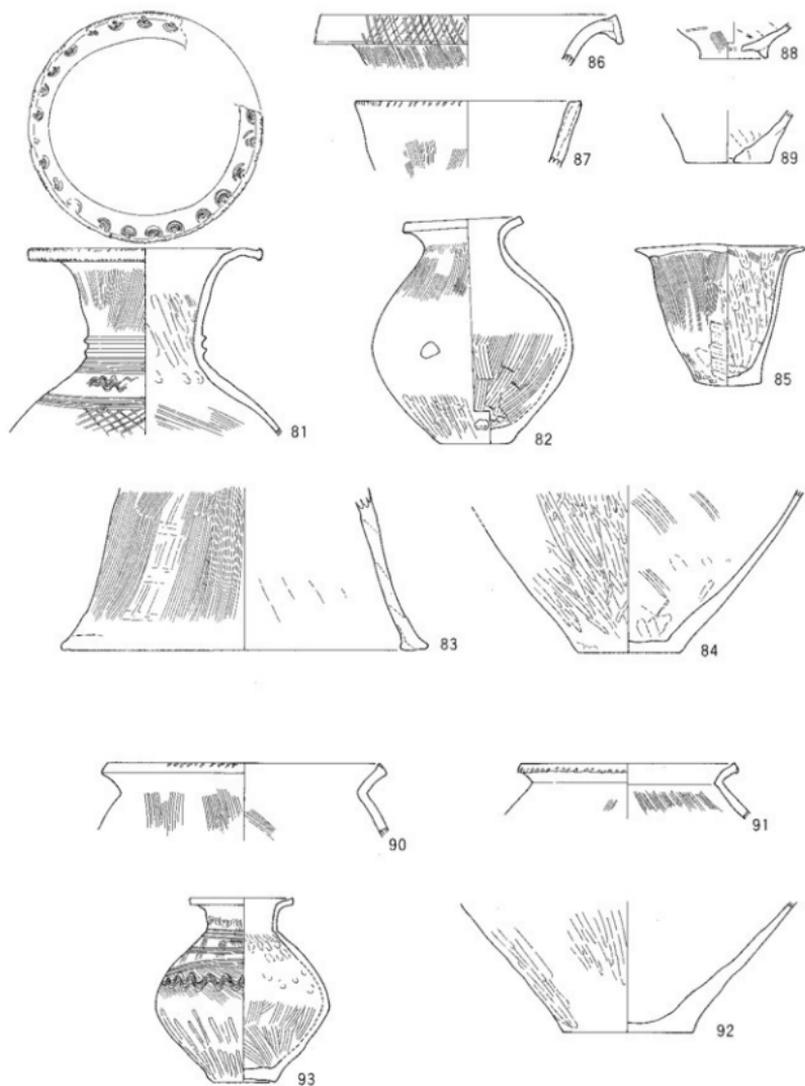
第38—12次調査で検出していたS D 01の続きを確認した。先の調査では中層より上では細片の土器が多く出土したものの溝底からは壺が1個体出土したのみであったが、本調査区では南に下がるにつれ遺物の出土量が多くなり、埋土の中層や下層からも完形に近い状態で遺物が出土している。溝は最大幅約5m、深さ90cmの大規模なものでさらに南へと続く。先の調査区で検出した部分を合わせると南北の長さは10mを超える規模を有し、周辺で確認される周溝墓を構成する溝とはやや様相を異にする。



第65図 S D 01 平・断面図

0 3m

81は壺口縁である。外反しながらのびる口縁端の側面に刻目、上面に扇形文を施す。頸部に突帯を2条付し、以下帯描直線文・波状文・斜格子文を施す。82は小型の壺で胴部中央と底部近くの2箇所に外側からの穿孔がある。口径10cm、器高は18.4cmである。外側上半は細かいハケ調整、下半はミガキ調整を施し、内面は粗いハケ調整である。83は大型の器台と思われる破片で底径は30cm、体部外面には11条/cmの細かいハケ調整を施す。84は底径8.6cmの壺の底部である。85は口径14cm、強く水平に屈曲する口縁をもつ鉢である。体部上半は10条/cmの細かいハケ調整が施されるが、下半については板状工具による粗い削り痕や指ナデ痕が顕著に残る。



0 20cm

第66图 S D01 · S X02 出土遗物实测图

86は斜め下方に拡張した口縁外側にヘラ描きによる斜格子を刻んだ壺の口縁である。87は直口の鉢である。端面上部に刻目を施す。88は低い脚をもち、穿孔の見られる底部片で鉢と思われる。89も甕の底部片で焼成前の外側からの穿孔が見られる。

大半は弥生時代中期第Ⅲ様式に属する遺物であるが、埋土中には第Ⅱ様式の土器も若干含まれる。

(2) 西地区

第35次—4次調査で検出していた古墳時代後期の竪穴住居の東壁が確認された。先の調査結果と合わせると住居址は北辺の長さ約5mで方形プランを呈すると思われるが南半分については不明である。先の調査では明確でなかったが、本調査区では周溝から住居址の中心に向け炭化材が散乱しており、焼失住居であることが判る。反対に遺物の出土はほとんどなく、小片の土師器が出土したに留まる。

S X 01

調査区の北端で検出した幅1.5m、深さ約50cmの緩やかに弧を描く溝である。第35—4次調査で検出したS D 201に続く溝であるが、断面観察及び南側に一部残る溝の痕跡から本来あった南北方向の幅80cmの溝状遺構を切り込んでいることが判明した。対応する東地区のS D 01とかなり規模が異なるが、溝状遺構が周溝を構成するものであれば、切り合い関係を示すものとして注目される。

S X 02

住居址の下層は南下がりの緩やかな地形を呈する。完形の小型壺や別個体の大型の壺の底部片、甕の体部片が出土しており、遺物の出土状況やS D 01と直交する方向性から周溝壁に伴う溝の層部になることも推測される。調査区外に拡がるため明確でないが、南側への周溝壁が拡がりを示唆するものとして重要である。調査区内では深さ50cmを測る。

90・91は甕口縁片で、90は口縁上端部に、91は口縁端部下端に刻目を付す。内外面ともに細かいハケ調整を施す。92は大型の壺底部である。93は口径8.4cm、器高15cmの甕で、胴張りが強く水平に屈曲する口縁部をもつ。やや稚拙な描画直線文3単位と波状文1単位を施す。ハケ調整、ミガキ調整とも丁寧な土器である。

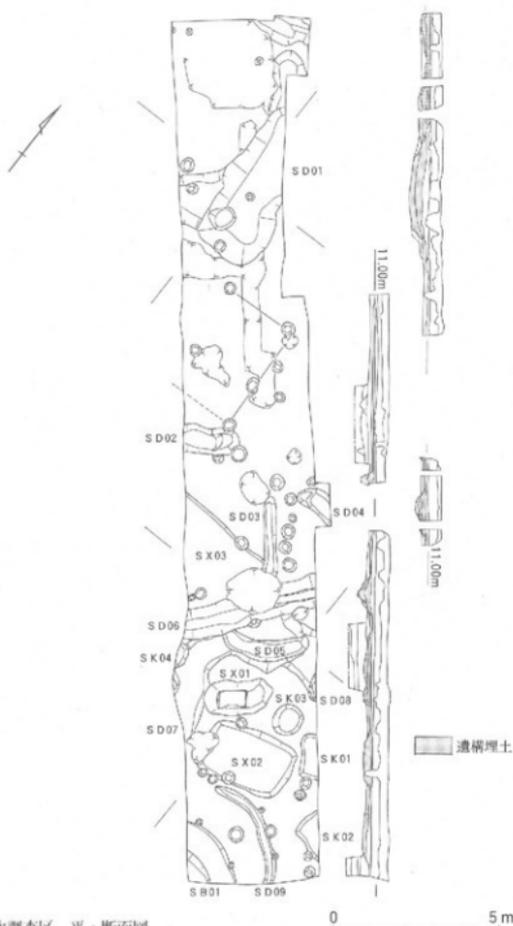
3. 小 結

周辺調査の検出段階では不明であった遺構の続きが確認でき、寺田町1丁目を中心に展開する方形周溝壁の構造を把握する上で貴重なデータが得られた。中でもS D 01は幅5mを有する大規模な溝状遺構で、その北端部(第38—12次調査)は直角に立ち上がり、溝を周回させずに掘り切る構造は注目される。遺物の出土量も多く、その性格については現状では明らかでないが、南側への落ち込みの状況とともに、さらに周溝壁が拡がることを示唆するものである。

第4節 第50-3次調査

1. 調査の概要

寺田町2丁目㊸番街路の調査である。一部建物が残るため北と南の一部を残し、また生活道路があるためこれを残し南北長28m、幅2mの調査区を設定した。現道部は埋設管が多く、遺物・遺構の残りが悪いことが断面観察より判明している。調査区内の堆積は、旧耕土層の下に南側を中心に黒色シルト層の堆積があり弥生時代の包含層となる。直下の褐灰色砂質土上面が遺構面を形成する。溝、上坑、住居址状遺構、柱穴を検出した。



第67図 第50-3次調査区 平・断面図

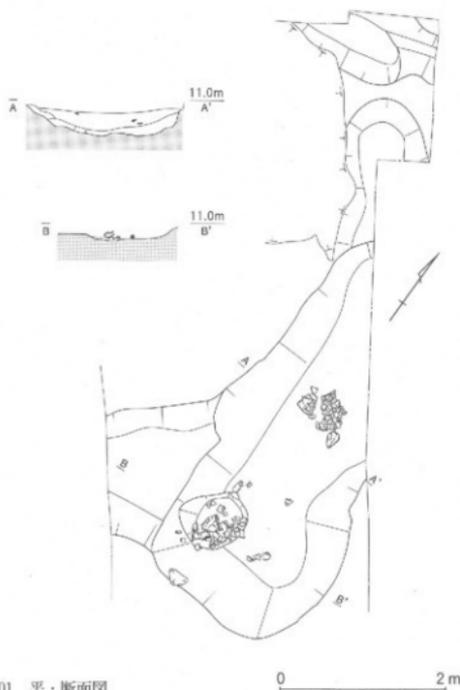
2. 検出遺構と出土遺物

溝

周溝墓を構成する溝をはじめ、9本の溝が確認された。

S D 01

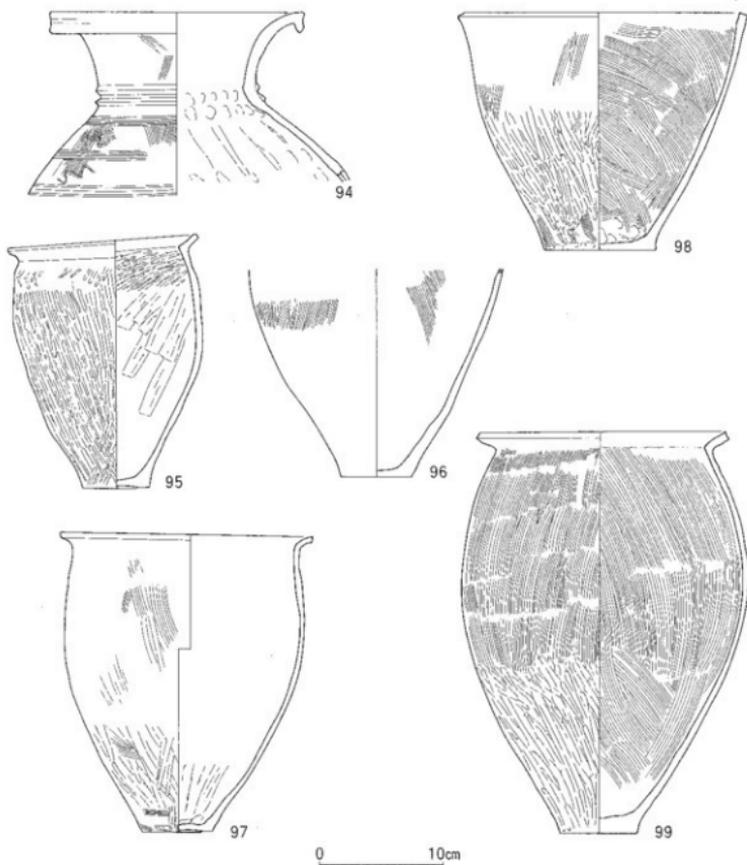
調査区の北端で検出した。南北長約7m、両端でそれぞれ西側に屈曲する。深さは40cmで、黑色シルトの溜まりの下に非常に精良な黄色粘土の堆積が認められる。当初、この粘土層の上面で溝底と考えていたが、ブロック状に剥がれることから、下層を確認した結果、灰褐色砂質土から土器がまとまって出土した。甕は破碎された状態で、それぞれ拳大の礫が、土器の上や傍らから出土しており、意識的に土器が割られ、その上を粘土で覆った可能性がある。



第68図 S D 01 平・断面図

94は口径20.6cmを測る壺である。口縁端部は上下に拡張し、側面は凹線状に窪む。頸部に2条の貼り付け突帯、残存部分では櫛描直線文3単位と波状文2単位を交互に施している。95は口径16cm、器高20cmを測る甕である。体部外面はヘラ磨き、内面、強く外側に屈曲する頸部下はヘラ磨き、体部下半はヘラ削り調整である。96・97は比較的細い胴部からわずかに内傾気味にのびる口縁をもつ甕である。磨耗がひどく、調整は不明瞭である。98は口径23.6cm、器高19.2cmの直口の鉢である。外面はハケ調整の後、ミガキを施し、内面は7条/cmのハケ調整を全面に施す。99は口径21cm、器高33cmの甕である。「く」の字状に屈曲する端部はやや

肥大化する。体部上半は内外面とも9条/cmのハケ調整で、粘土接合痕の残る下半～底部にかけての外面はヘラ磨きである。

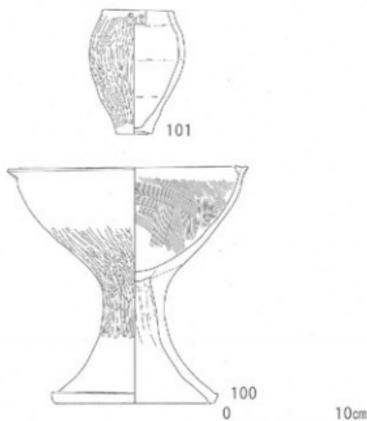


第69図 SD01 出土遺物実測図

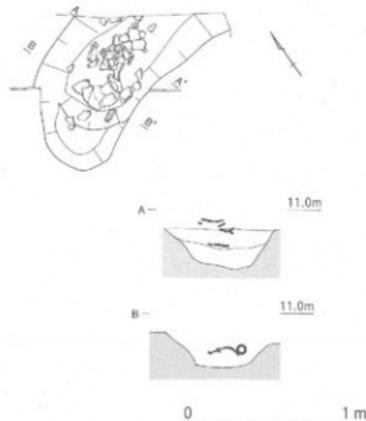
SD04

調査区中央東端際で検出した幅60cm、深さ20cmの溝で、緩やかに弧を描き南東にのびるようである。調査区内で確認された別の溝、SD02・05がこれに対応する可能性があり、それらの中央にSX03の浅い窪みが位置する。SX03からは炭の痕跡や骨片を若干検出しており、一応書き留めておく。SD04出土遺物で図化できたのは小型の無頸壺、高杯のみである。100は鉢形の杯部をもつ高杯である。口径20cm、器高19.2cmを測る。杯部の上端はわずかに外反し、内側に断面三角形の突帯を付し面をつくる。脚部内面に紋り痕があり、杯部内面には11条/cmの細かいハケ調整、円盤を充填した後、外面には杯部と脚部の接合部を中心に細かい

ミガキ調整が施される。101は口径6cm、器高10cmの小型の無頸壺で頸部に蓋用の2個の穿孔をもつ。外面には細かいミガキ調整を施す。



第70図 S D04 出土遺物実測図



第71図 S D04 平・断面図

S D06

東西方向に直線的にのびる溝である。幅1m、深さ約40cm、断面の形状は緩やかな傾斜の後、溝底近くは深さ5cm程が直に落ちる。出土遺物が小片のため時期は明らかでないが、土層観察の結果、周辺の周溝墓を構成する可能性がある溝よりは後出する溝である。

S D07

調査区の南で検出した幅約1.2m、深さは15cmが残る程度の溝である。遺物は出土していないが、その形状から周溝墓に伴う溝の可能性がある。溝の内側で長さ約2m、幅約1mの土坑S X01、長さ2.7m、幅1.7mの土坑S X02を検出したが、土坑の上層からは細片の土器が多く出土しており、主体部の痕跡としたならばその状況に疑問がある。

S D09

調査区の南端で検出した幅約30cm、深さわずか5cmの溝である。南側は床面が平らに円形状に落ち込み、竅穴住居状となっており、それを取り囲む状況から周壁溝の可能性はある。落ち込み、溝からの出土遺物は少なく、時期は不明である。

また、調査区の中央では1間以上×2間以上の掘立柱建物と思われる柱列を検出した。西側の調査区外に拡がるであろう。柱間は約2mで、柱穴の径は約40cm、深さ15cmである。遺物は小片で、建物の時期は不明であるが、周溝墓に伴う可能性のある溝S D02よりも新しい遺構であることが切り合い関係から判る。

3. 小 結

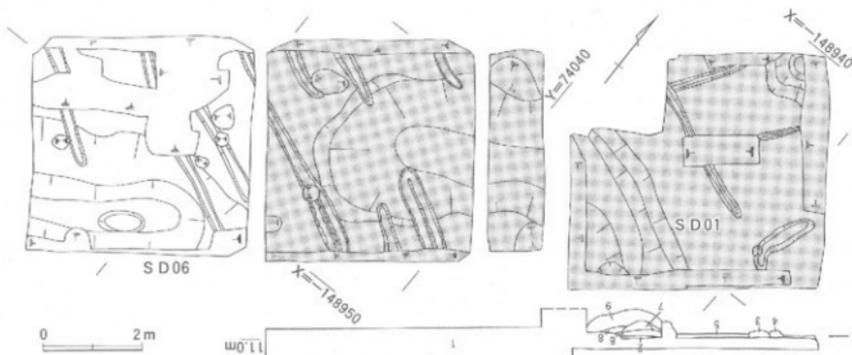
本調査地の北側に位置し、平成13年度に実施した東西街路部の調査(第35-9次調査)では、東に向かい遺物・遺構が希薄になる状況が見られたが、今回の調査により南側への遺跡の拡がりを確認された。周溝墓を形成する溝S D01では甕が破砕された状況が確認される等、周溝墓の溝内における土器の取り扱い一祭祀面にかかわる当時の様子が良好に残されていることが明らかになった。

第5節 第50—4次調査

1. 調査の概要

寺田町1丁目④番街路拡幅部の調査である。隣接して個人住宅建設に伴う調査(第51次調査)が計画されたため、同時に調査を実施した。街路拡幅部の調査区は幅約4.5m、長さ約4.5mの範囲で、検出した遺構は溝1条、鋤溝5条である。溝は個人住宅部分で検出した溝に伴う同一の周溝墓を構成する溝と考えられる。

調査区は北から南、東から西に傾斜した地形に位置する。従前の建物基礎による攪乱を免れた部分の基本層序は上層より淡黄橙色砂混じり砂質土(床土)、淡灰色砂混じり砂質土(耕土)、淡灰黄色砂質土(遺構面)、黄灰色極細砂シルトとなっている。遺構面は標高11m付近である。



1. 盛土・攪乱 2. 黄橙色粗砂質土 3. 淡灰色粘質土 4. 暗灰色石混じり砂質土 5. 褐灰色粘質土(トーン部分は第51次調査地)
第72図 第50—4次調査区 平・断面図



挿図写真3 第51次調査地全景(北東から)



挿図写真4 第50—4次調査地全景(東から)

2. 検出遺構と出土遺物

SD01

周溝墓のコーナーにあたると思われる溝で、一部攪乱により削平を受けている。L字状に屈曲し、幅

2.8m、深さ30cmを測る。断面は緩やかなU字状を呈する。埋土は上層から暗灰褐色石混じり砂質土、暗灰色石混じり砂質土、淡灰黄色石混じり砂質土となっている。遺物の多くは第2層目の暗灰色石混じり砂質土層から弥生土器が出土しているが、細片のため罔化可能なものはなかった。

SD06

周溝墓の北辺にあたると思われる溝である。溝の北側は緩やかに立ち上がり、南側は調査区外へ広がる。底面は一部凹みが確認できるものの、概ね平坦である。埋土は上層から暗灰褐色石混じり砂質土、暗灰色石混じり砂質土、淡灰黄色石混じり砂質土となっている。遺構面からの深さは50cmを測る。

遺物は第2層目の暗灰色石混じり砂質土からの出土が多いが、壺102・103が出土しているのは、第3層目である。

壺は口縁部102と体部103が出土している。102は口径31.4cmを測る広口壺である。大きく外反する口縁部は口縁端部を下方に拡張し、ナデ調整によって面をもつ。また端面下端には3個/cmの刻目を施し、口縁部内面には2条の突帯がめぐる。外面は粗いタテハケを全面に施す。頸部には断面三角形の突帯を5条施し、頸部から体部にかけては櫛目の浅い櫛描直線文・波状文を各1単位確認できる。

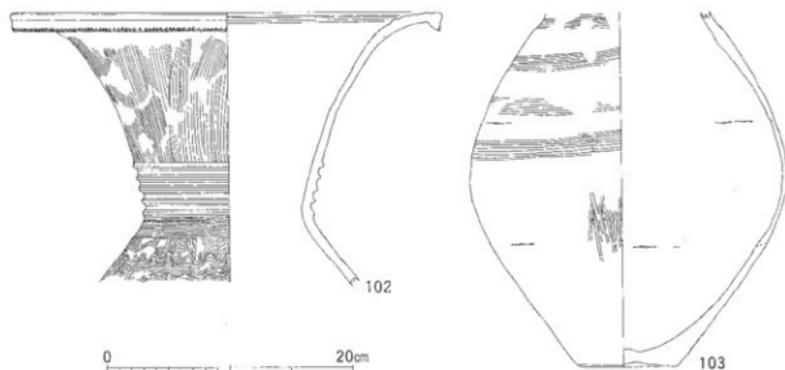
103は全体に摩滅しているが、櫛目の浅い櫛描直線文を1単位施している。外面は縦方向のヘラミガキが確認できる。ともに弥生時代中期第Ⅲ様式に属すると考えられる。

鋤溝

東西、南北の2方向に鋤溝状の溝を数条検出した。これらの溝の多くは底面に鋤の痕跡が明瞭に認められる。埋土はいずれも暗灰色極細砂シルトで、SD01・06を切っている。遺物はほとんど出土していないため時期は不明である。

3. 小 結

緩やかな傾斜地に位置する今回の調査地では、調査範囲の制約もあって周溝墓の規模は判明しなかった。周溝墓に伴う溝は地形に合わせて掘削が行われ、高低差をそのまま残す状況が見受けられた。マウンド部が残らないため、どの程度の成形作業が行われたかは不明であるが、傾斜地に位置するこの調査区からも周溝が確認できたことは、周溝墓の広がる範囲を考える上で重要と考えられよう。



第73図 SD06 出土遺物実測図

第6節 第50—5次調査

1. 調査の概要

寺田町1丁目④番街路拡幅部の調査で、第35—4次調査地の北側に接する調査地である。南から続く周溝墓に伴う溝と土坑、柱穴を検出した。また北側では周辺の調査地で見られる耕作痕を5条確認した。

2. 検出遺構と出土遺物

溝

周溝墓を構成する溝が2本検出された。

S D 01

南北方向の溝で北側は東にやや弧を描く。幅は最大で約3mを測り、深さは50cm前後ある。周辺の溝埋土上層に見られる土壌化した黒色シルト層の堆積は浅く、緩やかに溜まったシルト質の砂層で占められる。

遺物はほとんど出土していないが、S D 01からわずかに壺の底部が出土している。

104—106は壺の体部片である。欄描直線文・波状文を施す。106の波状文は襷帯施文によるものか。107・108は壺の底部である。それぞれ底径約8cm、6cmである。磨耗がひどく調整痕は不明である。また溝の肩部からは白石に使用したと考えられる石が出土した。(104—108は写真のみ・写真図版53)

出土遺物からこの溝は弥生時代中期の溝と思われる。

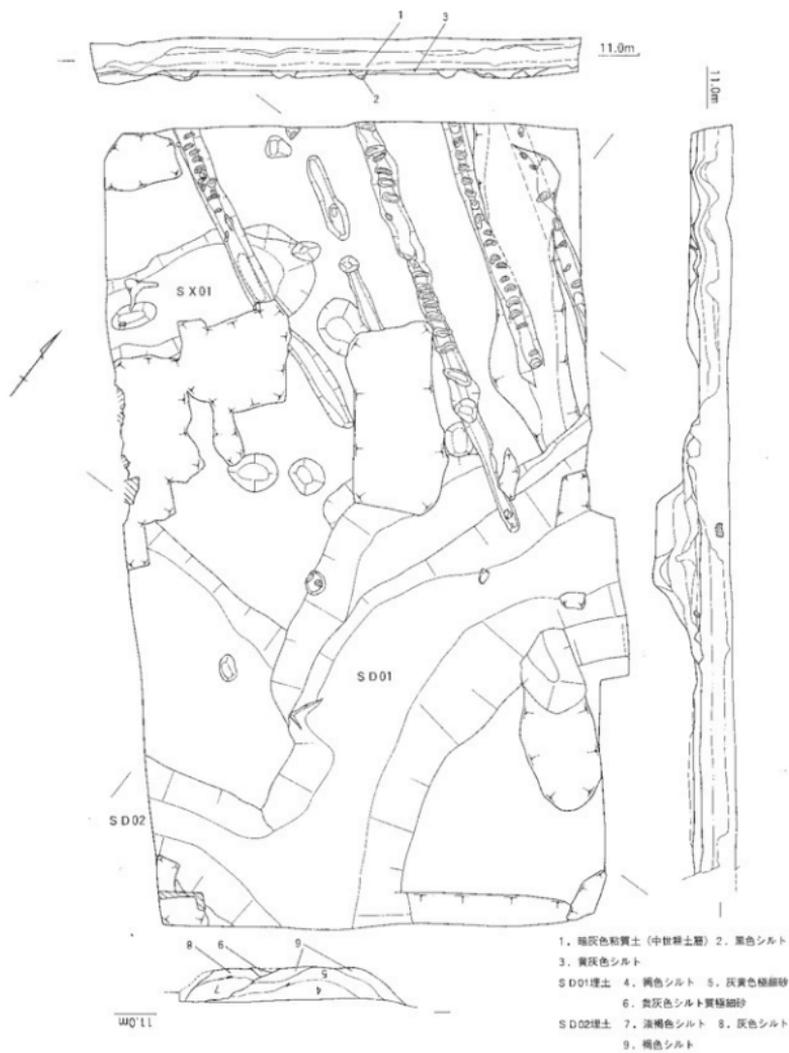
S D 02

幅は1.8m、深さは30cmである。S D 01の南端から西へ派生する溝である。埋土は基本的に黒色シルト及び灰色シルト層からなり、溝底のレベルはS D 01とほぼ同じであるが、これはS D 02の北層が一段低くなっており、その分の高低差によるものである。北側の一段下がりの部分の性格については不明である。S D 02の埋土を切るようにS D 01の砂質層が堆積している。

その他、柱穴を数基検出したが建物を復元するには至らなかった。また調査区北西で土坑を検出したが、西側にのびるため詳細は不明である。検出長約2.5m、幅1.3mで皿状に浅く落ち込む。主体部の可能性もあるが、判然としない。またこれらの遺構を切る形で耕作痕を検出した。本調査区では溝の時期は明確ではないが、一連の周溝墓に伴う溝とすれば、周辺調査区で検出される耕作痕と同規模・同方向をもつ並行して掘削された溝は弥生時代中期以降のものと考えられる。

3. 小 結

周溝墓の続きが検出でき、それぞれ溝を共有しながら拡張する様子が想像される。S D 01の埋土は砂質層であるが、同様の溝は他の調査区でもわずかに確認されており、出土遺物が少なく、遺物から周溝墓の存続時期を区別するのが難しい状況であった場合には、埋土の違いから周溝墓群の共存、埋没過程を検討することが可能となることを示唆するものとして重要であろう。



0 3m

第74図 第50-5次調査区 平・断面図

第7節 第50—6次調査

1. 調査の概要

寺田町1丁目②番街路南端に位置する幅約7m、南北長10mの調査区である。北側に位置する調査地（第38—11次調査）や周辺の個人住宅建設に伴う調査では周溝墓に伴う溝（状遺構）を確認しており、溝の集中する地区である。盛土、旧耕土層、黒色シルト層（弥生時代遺物包含層）を除去した灰黄色砂質シルト層面で周溝墓を構成する溝、上坑、柱穴、落ち込みを検出した。

2. 検出遺構と出土遺物

溝

周溝墓を構成する溝4本と、同様に周溝墓を構成する溝状の遺構—形状は長方形の土坑—を2基検出した。

S D 01

調査区北端で検出した溝で、北から西へと折れ曲がる部分を検出した。角部のため溝の幅は明確でないが、遺存する範囲から幅は2m近いものと考えられる。上層埋土の黒色シルト層を除去した暗灰褐色土面で壺・甕の胴部を中心とする第Ⅱ様式後半～第Ⅲ様式古段階のものと考えられる破片を検出した。

S D 02

幅1.2m、調査区の東端で検出した東にのびる溝である。西端は浅く、東側に向かい深くなる。遺物は出土していない。

S D 03

調査区の西壁際で検出した溝でここでの溝幅は2mである。全体の規模は不明である。溝底の形状は箱状になっており、北への立ち上がりに沿う形で溝底から弥生時代中期中葉の壺が1個出土している。溝底に置かれたものか、あるいは埋没過程で上部より滑り落ちたものかは明らかでない。

S X 01

調査区南半の中央で検出した長方形の土坑状の遺構である。長さ4.8m、幅約3m、深さ50cmを測る。底部は箱状となっており、底部からやや浮いた状態で南から穿孔のある壺、破碎された甕、倒れた広口壺の3個の上器が出土している。溝の埋土は西側のマウンド部から東に向かい、流れ落ちたように堆積する。土器はそれらの層に含まれ、本来マウンド上にあった可能性が高い。弥生時代中期の周溝墓を構成する溝の一部である。

S X 02

S X 01の東に接する形で検出した。長さは4.8m、幅はS X 01より狭い約1.6mで、深さ約60cmを測る。溝底には長頸壺と甕の2個が東西に並び、据えられたままの状態が残っていたものと考えられる。弥生時代中期の周溝墓を構成する遺構である。S X 01がやや新しい要素を含むようであるが、明確な切り合い関係がなく、詳細は検討を要する。

土坑

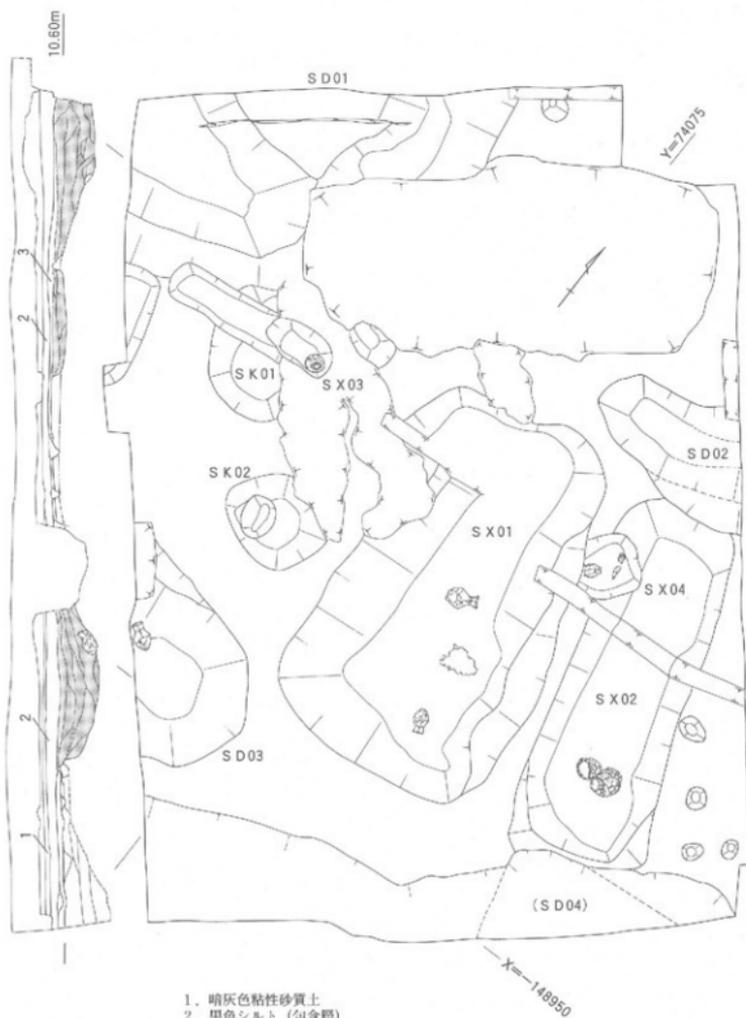
調査区内で土坑を5基検出した。S X 03を除く上坑はいずれも径1m前後を測る浅い皿状のものである。

S X 03

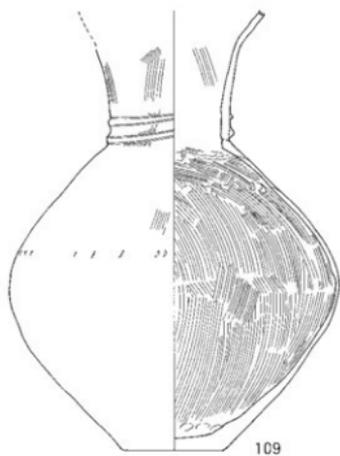
S D 01の南肩に沿って長さ2.2m、幅50cm、深さ20cmの溝状の遺構を検出した。東端は長さ80cmで一段深い土坑状となっており、この部分のみ溝を切り込む別の遺構の可能性はある。壺が1個体出土している。

出土遺物

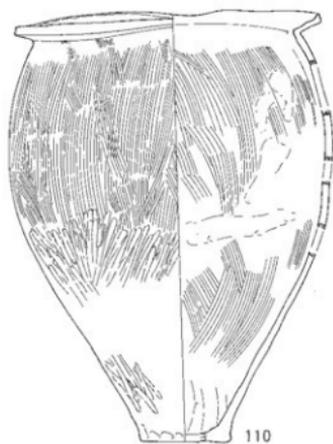
周溝墓に伴う遺構で、供献土器と考えられる上器が出土した。



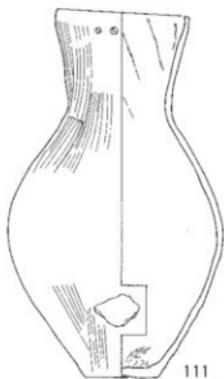
第75図 第50-6次調査区 平・断面図



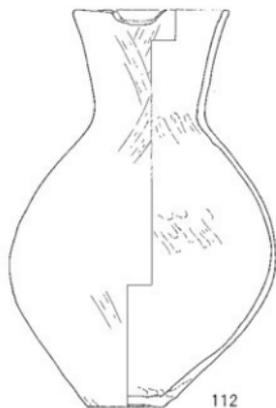
109



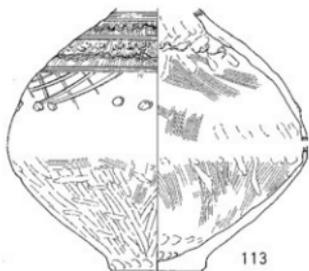
110



111



112



113

0 20cm

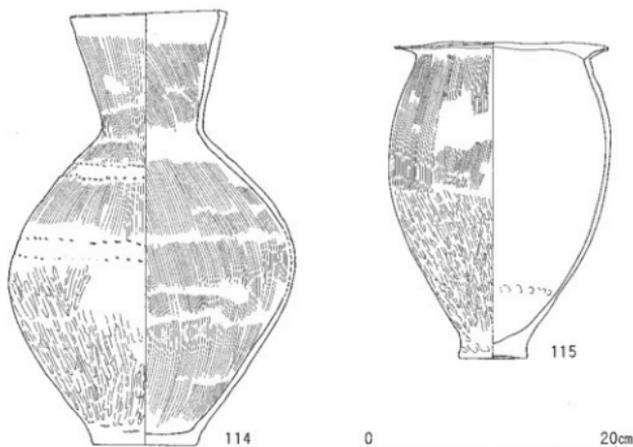
第76图 SX01·SD03·SX03 出土遗物实测图

S X 01出土の109は強く張った胴部からまっすぐ立ち上がり、外反する頸部をもつ壺で、口縁部を失う。胴部最大径27cm、残存高36cmを測る。頸部に断面台形の突帯2条を巡らせ、胴部には刺突文がわずかに確認できる。内面は6条/cmのハケ調整を施し、頸部下に指押さえ痕と不定方向のハケ調整が見られる。胎土は乳白色で他と異なる。110は口径25cm、器高35cmを測る大型の甕である。鋭く屈曲する口縁端は上方に摘み上げる。内面及び外面上半は5～6条/cmのハケ調整、外面下半はヘラミガキ調整である。111は口径11cm、器高30cmの長頸壺である。粗いハケ調整が部分的に見られるが、内面ともに刺刺がひどく不明である。口縁下に蓋用の2個の穿孔、胴部下半には焼成後に外側から施された径3.5cm程の穿孔がある。

S D 03出土の112は口径13cm、器高32cmを測り、口縁の一部を抉り取る。非常に器壁を薄く成形している。歪みの大きな土器で、残りが悪く、調整痕は不明である。

S X 03出土の113は算盤形の強い胴張りの体部をもつ上器で、頸部を失う。無頸壺のようであるが、残存する頸部付近は径7cmとやや狭い。外側の調整は非常に丁寧で上半は8条/cmのハケ調整の後、欄描直線文を3単位施し、間に波状文、扇形文を施す。直線文の下に斜格子文を施し、2個1対の円形浮文を付加する。下半は丁寧なヘラミガキである。内面は基本的に細かいハケ調整を施すが、頸部下に余刺粘上を貼り付けた痕があり、中央には施文時についたと思われる指頭圧痕が見られる。

S X 02出土の114は口径12cm、器高35.5cmを測る長頸壺である。口縁端部を内側上方に摘み出し上端に面をつくる。内外面とも10条/cmのハケ調整を丁寧に施し、外面下半はヘラミガキ調整である。頸部屈曲部下と胴部にハケ目をなで消した後、列点文を2段に纏らす。115は口径18cm、器高26cmを測る甕で、ほぼ水平に強く開く口縁をもつ。内面の調整は不明だが、外面は上半ハケ調整、下半は細かいヘラミガキを施す。



第77図 S X 02 出土遺物実測図

3. 小 結

今回の調査では周溝墓に伴う溝が検出され、計3基の周溝墓が接する部分に相当することが確認された。本調査区周辺では周溝墓の検出割合が増えており、当地域における周溝墓の形態、占地状況等を把握する上で貴重なデータの蓄積ができたと考える。

第8節 第50-7・8次調査

調査の概要

(1) 第50-7次調査

寺田町1丁目④番街路拡幅部分での調査である。従前建物の基礎により遺構面が失われていることが予測されていた。

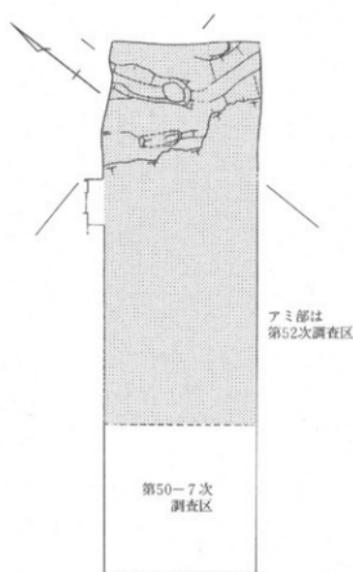
個人住宅建設に伴う調査(第52次調査)に先立ち、街路部分について掘削を行い、土層観察を行ったが、既に建物基礎のため遺構面は失われており、付近の調査で確認されている遺構面下に堆積する黄色シルト層は遺存するものの、周溝墓に伴う溝等の深い遺構も確認されなかった。

(2) 第50-8次調査

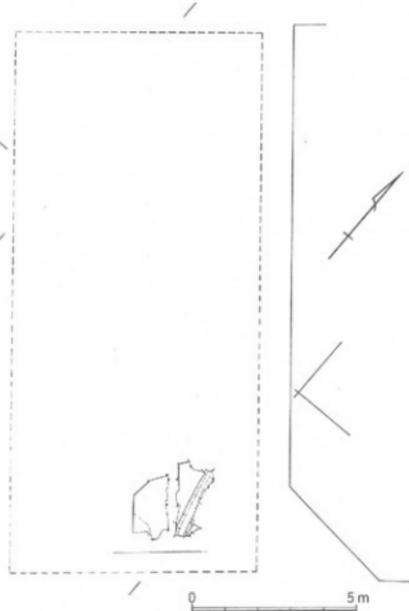
寺田町1丁目④番街路南端での調査である。街路予定地には従前建物の基礎が残り、除去作業中に遺構・遺物の残存状況を確認した。

建物の基礎は規模が大きく、当初より遺構面が失われていることが予測されていたが、南端の基礎の間にわずかに遺構面が残る部分を確認したため、都市計画総局、ならびに解体業者の方々の協力を得て遺存する部分のみ精査を行った。

調査の結果、幅30cm、深さ20cmの溝を1条検出した。調査区内での検出長は2mである。遺物は弥生土器と思われる小片の土器が出土したのみであった。



第78図 第50-7次調査区 平・断面図



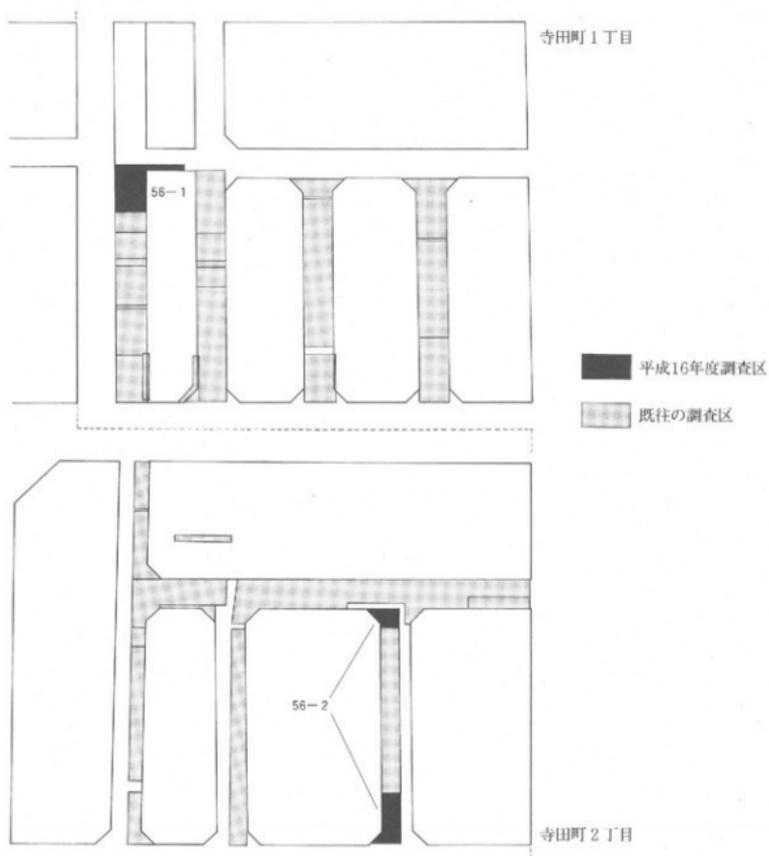
第79図 第50-8次調査区 平・断面図

第5章 戎町遺跡 第56次調査の成果

第1節 第56次調査の概要

平成13年度からの3年にわたる調査で寺田町1・2丁目の街路部分の調査は進み、今年度は僅かに残っていた2箇所の地点での調査を実施した。これにより寺田町1・2丁目における街路予定地での発掘調査対象地の調査は完了する。

調査地点は寺田町1丁目の東西街路と西側の街路拡幅部の交差する部分、寺田町2丁目では東に位置する南北街路で、平成15年度に一部調査を完了していた第50-3次調査区に接する南北両端の部分である。



第80図 戎町遺跡第56次調査 調査地位位置図

第2節 第56-1次調査

1. 調査の概要

寺田町1丁目の東西街路と④番街路拡幅部の交差する部分で調査を実施した。

従前建物の基礎や埋設管による攪乱が多く、ほとんどの部分で遺構面が失われていた。

2. 検出遺構

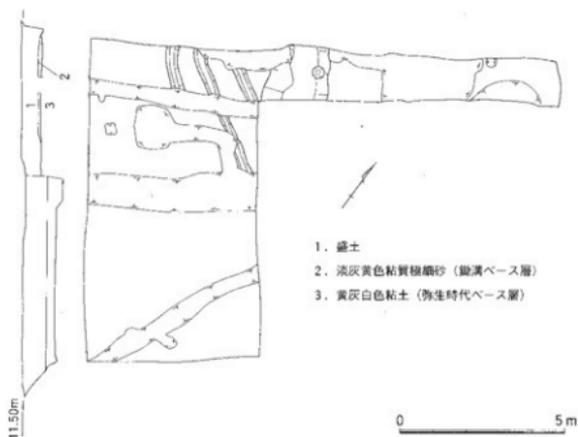
耕作痕3条、溝状の落ち込み1基、柱穴を検出した。

耕作痕は周辺調査で確認される溝と同様のものである。淡灰黄色粘質極細砂面より掘り込まれる状況が確認され、第50-5次調査等でも確認されたように弥生時代中期よりも後出する溝であることが判る。深さは5cmも残っておらず、時期の判明する遺物の出土もない。

調査区の中央で検出したS X 01は深さ約25cmの落ち込みで上層に黒褐色粘土の堆積があり、弥生土器片がわずかに出土している。幅は2mを測り、溝状になるものと思われるが、調査区外に拡がるため明らかでない。この地点から北側は地形的に上り傾斜となっており、耕作痕（鋤溝）やこれらの遺構も削平の度合いがひどく、遺存状況は悪いものと判断される。

3. 小 結

今回の調査区は従前建物の基礎や埋設管により遺構面の残りは悪かったが、耕作痕が浅くしか残っていないものの北側にのびることが確認された。



第81図 第56-1次調査区 平面図

第3節 第56-2次調査

1. 調査の概要

寺田町2丁目の東に位置する②番街路の南北約56mのうち中央部分約28mについては平成15年度に調査を終えており(第50-3次調査)、今回の調査では残りの北側(I区)と南側(II区)の調査を実施した。

調査区内の基本層序は上層より、盛土・攪乱、黄橙色粗砂質土、淡灰色粘質土、暗灰色石混じり砂質土(遺物包含層)、褐灰色粘質土(遺構面)、淡灰茶色シルトとなっている。I区の遺物包含層は調査区内全体に約15cmの厚さで存在し、遺構面は調査区の北西で砂質の強い傾向にあった。II区はI区より南に位置しており、現在はほぼ平坦な地表面であるが、遺物包含層までの深さはI区と比較して深い。遺構面の標高はI区で11.2m、II区は10.5~10.7mであり、比高差は50~70cmを測る。また、遺物包含層はI区とほぼ同じ厚さで堆積するが、遺物はI区よりかなり多く含まれていた。

2. 検出遺構と出土遺物

(1) I区の調査

第50-3次調査区の北側に位置し、溝1条、土坑・落ち込み2基、ピット1基を検出した。

S D 01

第50-3次調査の遺構検出状況から、方形周溝墓の北辺の溝と考えられる。やや不整形な形状を呈し、幅2.2~3.0m、深さ40cmを測る。埋土は上層より黒色粘土、黄灰色粘土、灰色石混じり粘質土、灰褐色細砂質土の順に堆積し、遺物は底面に近い灰色石混じり砂質土層から少量出土している。但し、周溝墓によくみられる完形品は含まれていない。

S P 01

直径20cm、深さ20cmを測る。黒色石混じり砂質土の埋土からは、広口壺の口縁部116が1点出土している。調整は摩滅のため内外ともに不明である。口径は21.0cmを測る。

(2) II区の調査

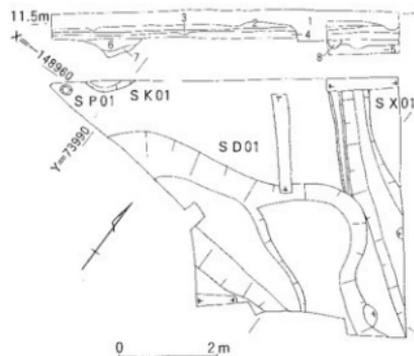
第50-3次調査区の南側に位置し、竪穴住居1棟のほか溝、土坑・落ち込み、ピットを検出した。

S B 01

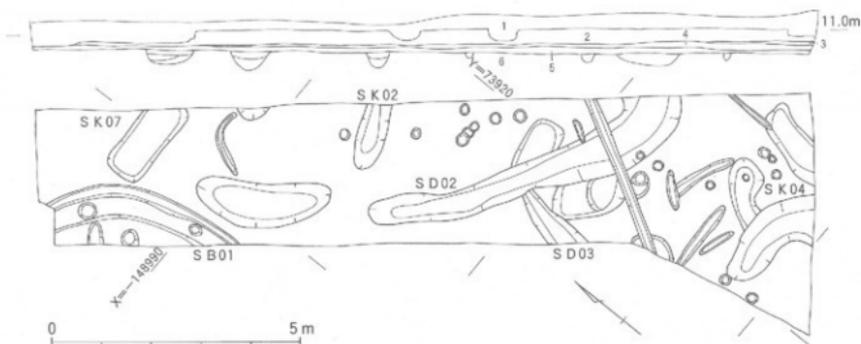
推定直径5.4mを測る円形の竪穴住居で、遺構の大半は調査区外へと拡がっている。周壁溝とベッド状遺構をもち、柱穴は4基確認している。検出面より床面までの深さは30cmで、ベッド状遺構との高低差は10cmである。ベッド状遺構は盛上ではない。また、4基ある柱穴のうち西壁に接する2基については、住居の埋土を切り込んでいることから、S B 01に伴わないものと考えられる。遺物は弥生土器が出土しているが、細片であるため時期など詳細については不明である。

S D 02

調査区中央で検出した南北方向の溝は、東壁付近で東へ屈出している。幅60cm~1m、深さ30cmを測り、断面はU字形を呈する。埋土は灰褐色粘質土で、弥生時代中期の甕などが出土している。



第82図 第56-2次調査 I区 平・断面図



第83図 第56-2次調査 II区 平・断面図

1. 露土・段土 2. 淡灰色砂質土 (旧耕土) 3. 黄灰色極細砂 4. 暗灰色極細砂質シルト
5. 淡灰色砂質土 (遺構面) 6. 黒褐色砂質土 7. 暗灰色砂質土 8. 暗褐色粗砂質土

122は口径16.2cm、器高24.0cmを測る甕である。「く」字状に外反する口縁をもち、底部は焼成前に穿孔されている。全体に摩滅しているが、底部外面にはヘラミガキが確認できる。

123は口径12.2cmを測る小型の甕である。口縁端部はナデによって面をもつ。124は口径25.2cm、125は口径19.8cm、126は口径23.4cmを測る。いずれも摩滅しているため調整が鮮明ではないが、125は外面にヘラミガキ、124・126は外面にハケ調整が確認できる。127は高坏の脚部、128は甕の底部である。外面はヘラミガキを密に施している。

SD03

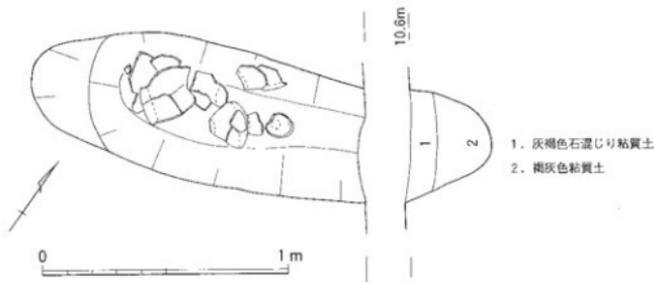
SD02と切り合う溝である。幅60cm、深さ10cmを測り、埋土は暗灰色砂質土である。壺が出土している。117は頸部から胴部にかけて残存している。9条/帯の襷描直線文を施すが、調整は摩滅のため不明である。



挿図写真5
II区全景 (北西から)

SK02

東側は調査区外へと拡がる。幅60cm、深さ30cmを測り、断面はU字形を呈する。弥生時代中期の壺、甕、鉢がほぼ完形の状態で出土している。埋土は灰褐色石混じり粘質土、褐灰色粘質土で、遺物は下層の埋土より出土している。遺物の上部は特に摩滅が著しい。



第84図 SK02 半・断面図

口縁部が欠損している壺118は全体に摩滅が著しいが、口縁部外面と胴部から底部にかけての内面にハケ調整を確認できる。

甕119は口径24.6cm、器高28.5cmを測る。「く」の字状に外反する口縁部で、口縁端部は上方に摘み上げている。体部外面に右下がりのタタキの痕跡が確認できる。外面は板状工具による粗いハケ調整を施した後、底部には幅の太い縦方向のヘラミガキを施す。内面は外面と同様の工具によるハケ調整の後、ナデ調整を施す。

鉢120は口径10.6cm、器高8.1cmを測る。口縁部はやや内湾し、口縁端部を丸く収める。内外面ともに粗いハケ調整を施す。

SK04

Ⅱ区の南で検出した。幅50cm、深さ10cmを測り、埋土は灰茶色砂混じり粘質土である。直口壺の口縁121が出土している。口縁端部は刻目を施し、口縁部はハケ調整の後、8条ノ帯の幅描直線文を施す。

SK07

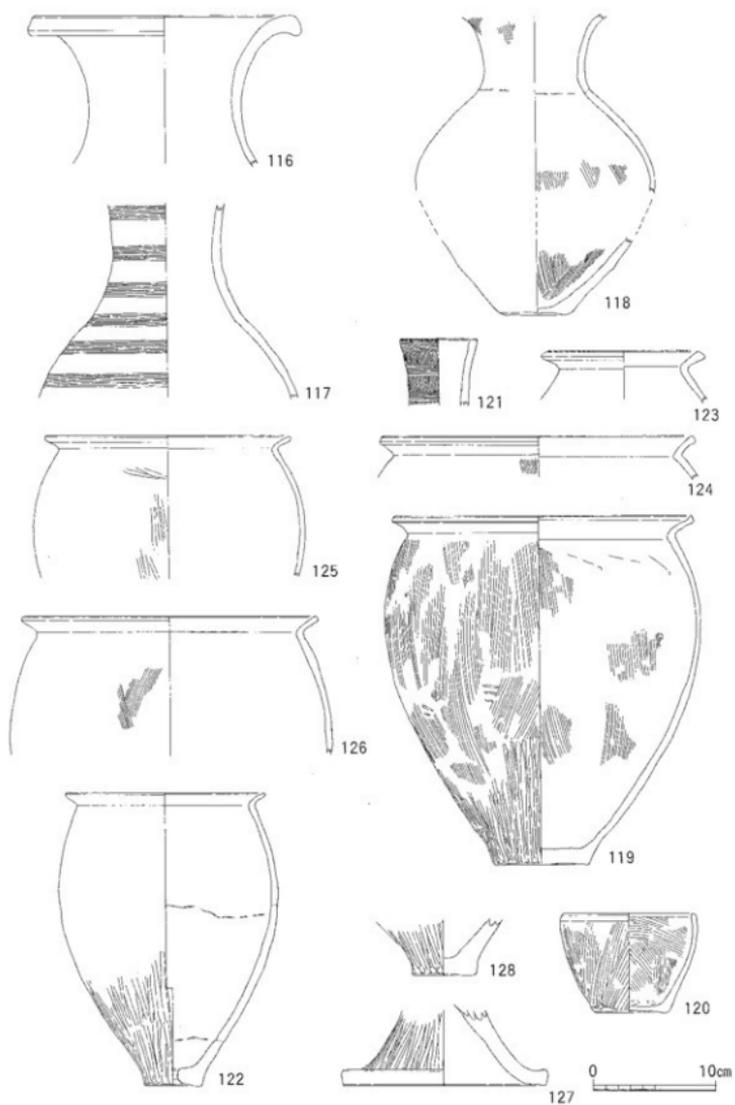
方形を呈するこの上坑は長辺1.9m、短辺80cm、深さ30cmを測る。底面は平坦で、遺物はほとんど出土していない。形状から周溝墓の主体部である可能性が考えられるが、小口など木棺等の痕跡は皆無である。

ピット

調査区内において掘立柱建物は確認できなかったが、ピットを19基検出している。直径はいずれも20cm程度、深さは10～50cmを測る。

3. 小 結

Ⅰ区においては周溝と考えられる溝(SD01)が確認できたが、Ⅱ区については溝の方向や深さ、埋土等から考えて、周溝と断定できる溝は確認されなかった。竪穴住居(SB01)は時期の確定ができていないものの、これまで多くの方形周溝墓が確認されている場所で竪穴住居や柱穴が検出されたことは、集落域と墓域の在り様を考える上で、注意が必要であろう。



116: SP01 117: SD03 118~120: SK02 121: SK04 122~128: SD02
 第85图 第56-2次調査 出土遺物実測図

(写真図版56)

番号	器種	型式	調査次数	出土遺構	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	比重	材質	備考
S1	石鏡	平基式	35-9次	S B 202	25.1	10.7	3.5	1.3	—	サヌカイト	
S2	石鏡	凹基式	38-1次	S R 101	(26.2)	17.2	5.2	1.6	—	サヌカイト	
S3	石鏡	凹基式	38-2次	S B 101	22.6	15.6	3.6	1.0	—	サヌカイト	
S4	石鏡	平基式	38-2次	S B 101	(20.8)	15.0	2.0	0.9	—	サヌカイト	
S5	石鏡	平基式	38-2次	S D 102	30.8	15.8	4.3	2.2	—	サヌカイト	
S6	石鏡	凸基1式	38-2次	S D 102	35.2	21.2	3.0	1.8	—	サヌカイト	
S7	石鏡	平基式	38-2次	S D 102	32.5	15.1	3.7	3.2	—	サヌカイト	
S8	石鏡	凹基式	38-2次	S D 201	29.0	16.1	6.4	3.8	—	サヌカイト	
S9	石鏡	平基式	38-2次	S D 201	(41.3)	22.4	6.3	2.8	—	サヌカイト	
S10	石鏡	—	38-2次	包含層 (SD101北)	(26.3)	9.4	4.4	1.1	—	サヌカイト	
S11	石鏡	—	38-2次	SD101下層	(67.3)	30.7	7.7	20.9	—	サヌカイト	幅・厚さは別添
S12	石鏡	凹基式	38-4次	包含層	18.8	20.5	3.8	1.2	—	サヌカイト	再加工跡欠損?
S13	石鏡	凹基式	38-11次	包含層	20.5	14.9	2.3	0.9	—	サヌカイト	
S14	石鏡	凹基式	38-12次	包含層	16.4	15.8	2.7	3.3	—	サヌカイト	
S15	石鏡	平基式	38-12次	包含層	(24.0)	21.2	6.0	0.6	—	サヌカイト	
S16	石鏡	平基式	50-3次	S X 01	(36.0)	17.4	5.1	2.7	—	サヌカイト	
S17	石鏡	凸基1式	56-2次	包含層	33.2	15.6	4.7	2.6	—	サヌカイト	
S18	石鏡	凸基1式	50-6次	S X 03	18.4	11.1	3.3	0.7	—	サヌカイト	
S19	石鏡	平基式	50-1次	S B 01	17.9	14.1	2.6	0.7	—	サヌカイト	
S20	石鏡	凹基式	50-1次	S D 02	(22.2)	15.2	3.2	1.1	—	サヌカイト	
S21	石鏡	—	50-1次	S B 01	31.2	11.8	4.7	1.6	—	サヌカイト	
S22	石鏡	—	50-1次	S B 01	44.3	16.8	9.6	4.9	—	サヌカイト	
S23	石包丁	—	50-1次	S B 01	(37.9)	14.8	6.6	3.9	—	サヌカイト	厚さは別添

* 長さ・幅の()数字は数値の原本値
重量は小数点以下第2位を四捨五入した数値

(写真図版57)

S24	扁平片石斧	—	35-8次	S B 101	(45.6)	27.3	8.0	23.4	2.83	洞岩	
S25	磨石	—	50-6次	S D 01	59.1	47.9	37.6	137.5	2.54	閃緑岩	
S26	磨石	—	35-1次	層1遺構面ベース土	—	—	34.5	401.5	2.93	—	表層
S27	台石	—	50-1次	S B 01	148.7	139.5	36.8	1447.0	2.53	砂岩	
S28	台石	—	38-7次	S D 101	144.3	98.0	36.2	752.2	2.92	—	接合面あり
S29	砥石	—	38-11次	遺構面ベース土	192.4	90.9	81.8	1464.0	2.40	砂岩	

* 比重については小数点以下第3位を四捨五入した数値

第3表 戎町遺跡出土石器一覧



「方形周溝墓への埋葬」

「古代の須磨・宍町遺跡速報展」リーフレットより

すまいるプラザ大黒にて開催

平成16年3月19日～4月7日

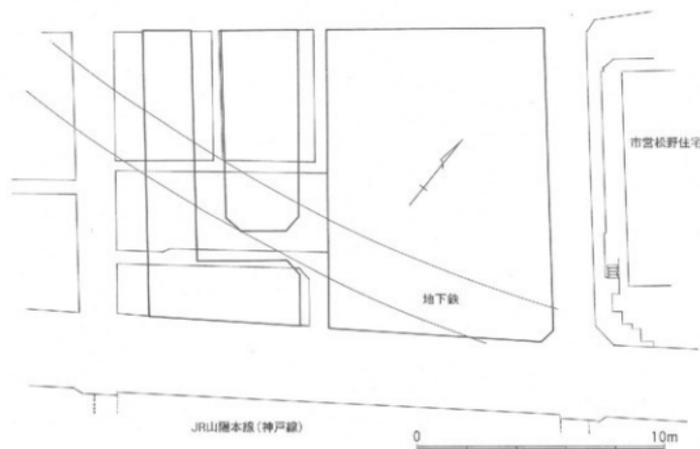
主催：神戸市教育委員会・須磨区役所

第6章 松野遺跡第32・33・38次調査の成果

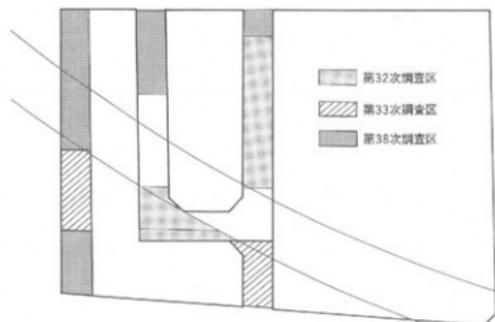
第1節 はじめに

鷹取東第二地区復興区画整理事業地の南東隅、常磐町1丁目街区は松野遺跡の範囲に含まれ、今回の調査対象となった。現在、長田区と須磨区に跨り位置する松野遺跡は、妙法寺川と菊藻川に挟まれた標高6～8mの扇状地末端に立地する。昭和56年に古墳時代後期の居館と考えられる掘立柱建物と柵列を確認した市営松野住宅の西側に隣接する街区である。

今回の調査では、平成13年度～15年度にかけて3次に渡る調査を実施した。戎町遺跡での区画整理事業の調査と同様、年度内の調査に大きな次数を充て、年度内に行われた複数回の調査に枝番号を付けて調査番号とした。平成13年度に2回、平成14年度に2回、平成15年度に4回、都合8度の調査を実施して区画街路部の調査を完了している。以下、調査の概要について年度（次数）ごとに記すこととする。



第86図 区画整理前・後対照図



第87図 松野遺跡 調査区配置図

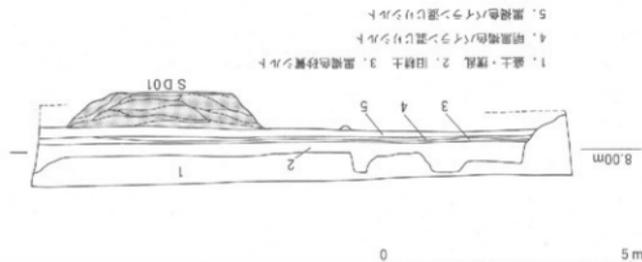
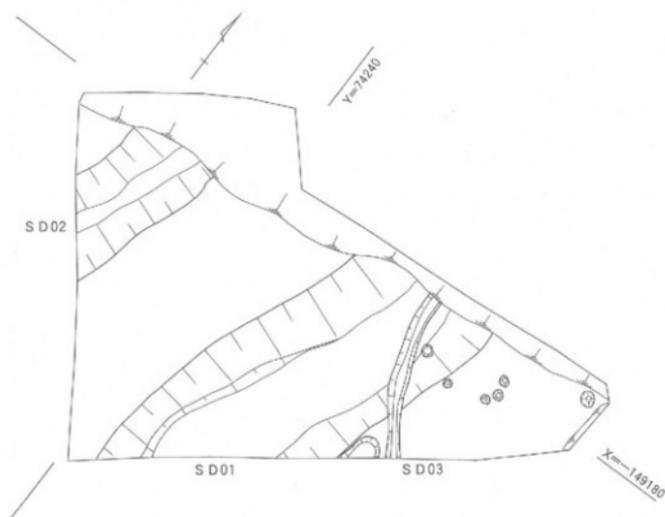
第2節 第32次調査の成果

(1) 第32-1次調査

常磐町1丁目街区の中央に位置する調査地である。調査区内の基本層序は上層より盛土、旧耕土、古墳時代後期の遺物包含層である灰褐色砂質シルト・黒褐色シルト、そして遺構面である暗灰黄色砂質シルト層である。現地表下約1.1mで遺構面が検出され、溝3条、ピット、土坑を検出した。

S D 01

調査区の中央を南北方向に流れる溝である。幅約3m、深さ約80cmを測り、溝底は平らで、断面の形状は逆台形を呈している。溝埋土の下層は、黒灰色系のシルトが堆積していて、水が流れる際減んでいたことが判る。上層の埋土は周囲の土が徐々に流入し、堆積して埋まったことが断面観察で判る。なお、この上層の埋土から弥生時代後期頃の土器が少量出土している。



第88図 第32-1次調査区 平・断面図

SD02

調査区西隅で検出された溝である。SD01と平行に南北方向に流れ、幅約1.8m、深さ約65cmを測る。溝の断面形状はU字形を呈している。溝内からの遺物の出土はなかった。

SD03

調査区の東側で検出された溝である。幅約30cm、深さ約10cmを測る。溝内からの遺物の出土はなかった。SD01を切っていることから後出する遺構である。

ピット

径約20cmの柱穴を数基検出した。遺物の出土はないが、SD01が埋まった後掘られたものと考えられる。

(2) 第32-2次調査

調査区内の基本層序は第32-1次調査同様、大別して上層より盛土、旧耕土、黒褐色シルト、そして遺構面である暗灰黄色砂質シルトとなる。遺構面までの深さは調査区の北側で現地表下約80cm、南側で約1mを測る。溝2条、柱穴、土坑を検出した。

SD04

調査区の南側を南北方向に流れる溝である。第32-1次調査で検出したSD01の続きと考えられ、幅約3~3.2m、深さ約80cmを測る。溝の基底はSD01同様平らで、断面形状は逆台形を呈している。この溝の上層から弥生時代中期頃の土器が少量出土している。

SD05

調査区の中央で検出した溝である。第32-1次調査で検出したSD02の続きと考えられ、SD04と平行し南北方向に流れている。幅約90cm~1m、深さ約50cmを測る。溝の基底は平らで、断面形状は逆台形に近い形をしている。溝内からの遺物の出土はなかった。

SK01

調査区に中央北寄りで検出された土坑である。最大幅約1.5m、深さ約40cmを測る。土坑内からの遺物の出土はなかった。SD05を切っていることから後出する遺構である。

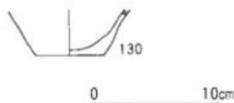
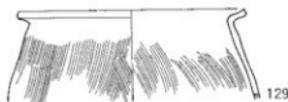
柱穴

SD05の北側で径15~30cm程の柱穴を数ヶ所検出した。柱穴は散在しているため建物として纏まりはない。遺物の出土はないが、一部これらの溝の上面で確認した柱穴もあるため、溝が埋まった後に掘られたものと考えられる。

(3) 小 結

今回の調査地は、昭和56年に松野遺跡第1次調査で古墳時代後期の豪族居館と推定される建物を確認した地点より西に60m離れた場所である。

調査で検出した2条の溝は平行して掘られていることが判った。そしてこれらの溝は方位と一致することも注目される。SD01・04から少量ではあるが弥生時代中期と後期の土器が出土しており、この2条の溝は弥生時代中期~後期にかけて同時に掘削され、埋没したと考えたい。同一面で溝と柱穴、土坑を検出したが、2条の溝が埋没した後に掘削されたもので、包含層の状況等から古墳時代後期頃のものと考えられる。



第89図 SD04 出土遺物実測図

第3節 第33次調査の成果

(1) 第33次—1次調査

調査区内の基本層序は上層より盛土、旧耕上層（灰黄色砂質土）、遺物包含層（黒褐色砂混じりシルト）となり、現地表下約75cmの暗灰黄色細砂質シルト層面で柱穴、上坑を検出した。

径20～35cmの柱穴を散在した状態で10数基検出した。いずれの柱穴からも遺物の出土はなかった。また幅約2.5m、深さ約1.1mの上坑を検出した。全体の半分程を確認したが、上坑内からは遺物が投棄された状態で出土した。時期は中世末から近世頃と思われる。

今回の調査地は、平成13年度の調査で弥生時代中期と後期の土器を含む溝2条を確認した南側にあたるが、遺物包含層からの出土土器は極めて少なく、時期の判明する遺物に乏しい。

また柱穴からの出土遺物もなく遺構面の時期については判らない。検出面の高さや上層堆積状況から判断して弥生時代中期以降のものと考えられる。

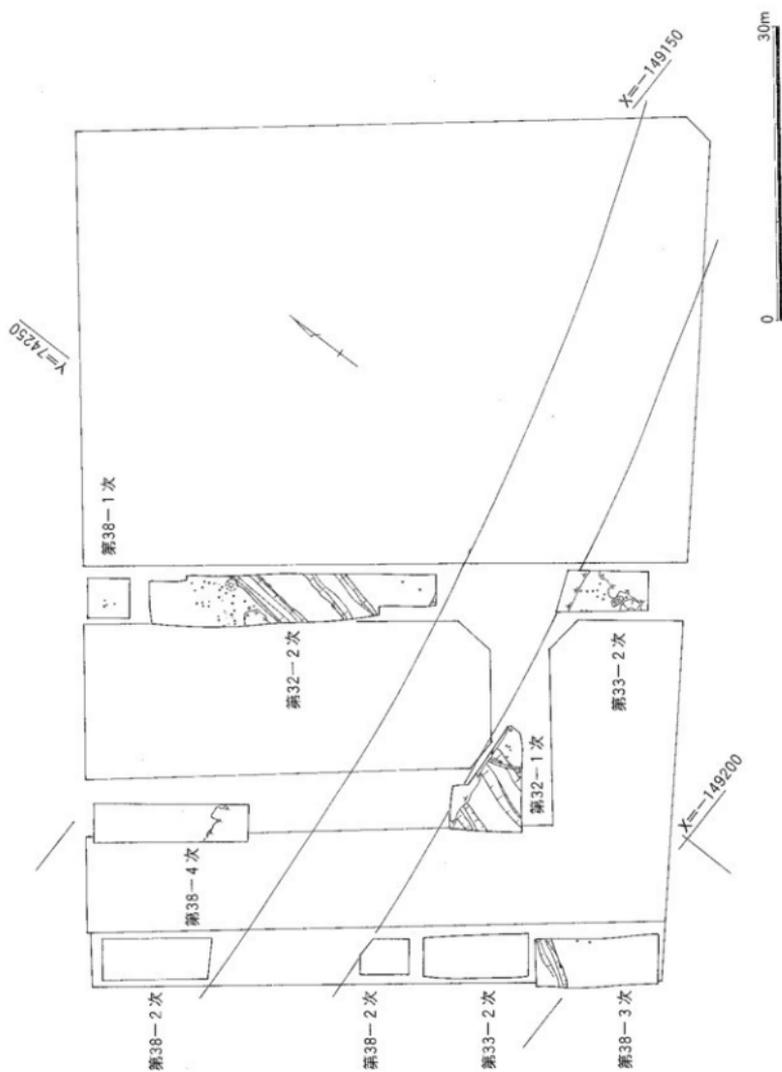


第90図 第33—1次調査区 平・断面図

(2) 第33—2次調査

調査区内の基本層序は盛土、旧耕土、淡黄灰褐色砂質土、暗灰褐色砂質土（遺物包含層）、暗灰色シルト（遺物包含層）、暗黄灰色シルト、黄灰色シルトとなる。

暗灰色シルト層上面及び暗黄灰色シルト層上面で精査を行ったが遺構は確認できなかった。遺物は暗灰褐色砂質土層から、極めて細かな弥生土器か土師器の破片が微量出土しただけである。細かく磨耗もしており、弥生土器か土師器かの区別もつけがたい。須恵器を含まないことと、周囲の調査で弥生時代後期の溝が確認されていることから、おそらく弥生時代後期の土器片であろう。



第91图 松野遺跡 調査区全体図

第4節 松野遺跡 第38次調査の成果

(1) 第38次-1次調査

調査区の西半分は擾乱されており、文化財は存在しない。東半分も耕作などの擾乱が遺構面に及んでいるが遺構の存在は確認された。柱穴が数基確認されたが建物として纏まるものはない。

遺物は耕土層より中世の遺物が少量出土したが、遺構の時期を特定できない。

(2) 第38-2次調査

建物基礎及び市営地下鉄敷設時の擾乱により遺構面のほとんどが失われており、II耕土層が確認されたのは約30㎡である。II耕土層直下(現地地表下40cm)で地山が検出された。

耕土層上面から偶蹄目類の足跡が検出されたが、顕著な遺構は存在しなかった。耕土層より遺物が若干出土したが、小片であり時期を特定できない。

(3) 第38-3次調査

周辺地における調査において遺物の出土が報告されている暗灰褐色シルト～粘土層(厚さ約15cm)を確認し掘削を行った。調査区北端部では現地地表下約75cm、調査区南端部では現地地表下約40cmで検出される。

調査の結果、弥生土器あるいは土師器と考えられる破片が2点出土したに留まった。その下層の淡黄灰色～黄灰褐色シルト上面で遺構面を確認し、溝1条、柱穴6基を検出した。

SD01

調査区北端部で検出した幅1.5m、深さ20cmの溝で、北東～南東方向に流れる。弥生土器片1点が出土した。1点のみの出土であるため直ちにこの溝が弥生時代のものであるとは断定できない。

柱穴

計6基検出したが、うち4基は上述のSD01により切られている。南側で検出したSP06から土師器片が1点出土しているが、詳細な時期については不明である。以上の柱穴が建物に伴うものであるかどうかについては明確でないが、南側の2基について、その可能性は低いものと考えられる。北側の柱穴については可能性があるが、調査区内ではその纏まりを認めることはできない。

(4) 第38-4次調査

現地地表下約65～90cmで遺物包含層である暗灰褐色小礫混じりシルトを検出した。この層からは北西部のみ弥生時代末頃の上器が出土しており、その他では遺物は出土しなかった。その下層で周辺部での調査においては遺構面基礎層となっている黄灰褐色～褐色シルト上面を検出したが遺構は全く検出されなかった。調査区南端部は地下鉄掘削時の擾乱が存在し、遺構面は全く残存していない。

第5節 松野遺跡での調査のまとめ

今回の調査では、常磐町1丁目のほぼ中央を南流する弥生時代中期～後期の可能性のある平行する2条の大規模な溝を検出した。各調査区での出土遺物は一律に少なく、明確な時期を決定するにはやや困難が伴うが、松野遺跡の西端部の区画に伴う何らかの溝である可能性を指摘しておきたい。

また隣接地における発掘調査、あるいは試掘調査の結果からも松野遺跡の集落域が常磐町2丁目の区画には及ばないことを示しており、この溝は付近に広がるであろう、湿地状の堆積に受け込むように掘削されていたものと推測される。

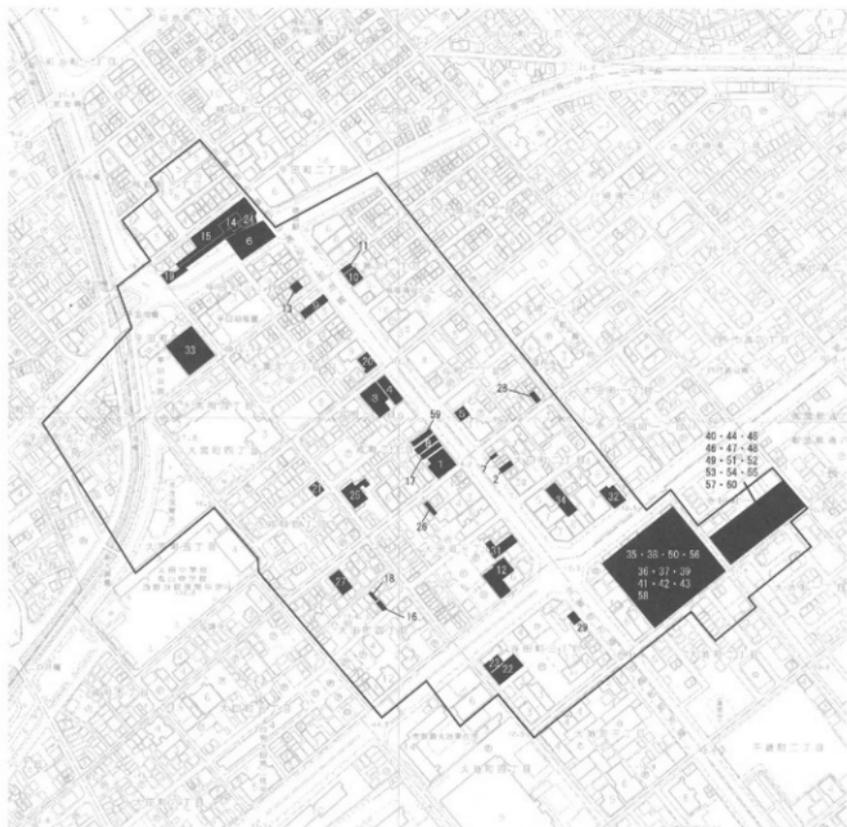
第7章 まとめ

第1節 戎町遺跡の調査について

はじめに

鷹取東第二地区復興区画整理事業に伴い、戎町遺跡・松野遺跡の調査を4ヵ年に亘り実施してきた。松野遺跡については第6章において簡単なまとめとしたが、ここでは戎町遺跡の調査について記したいと思う。

戎町遺跡では2004年12月の段階で60次に及ぶ調査が実施されている。昭和62年の第1次調査の調査原因がビルの再開発事業であったように、主に板宿駅周辺での再開発事業に伴う調査が実施されてきた。山陽電鉄板宿駅の地下化に伴い、周辺整備を含めた規模の大きな調査は実施されているものの、全般的に調査面積は小さく、調査回数に比して遺跡全体の様相が解明されるというには程遠い状況にある。



第92図 戎町遺跡 既往調査地位位置図 (S=1:6,000)

今回の調査成果について

戎町遺跡の範囲である寺田町1・2丁目の区西街路部の調査面積は約2,000㎡に及び、区西の東西、南北の広い範囲で遺跡の(残存)状況について確認することができた。但し、冒頭でも述べたが、調査は建物が移転した後に掘削可能な範囲から適宜実施したため、結果として調査区が細分化され、また複数の担当者が調査に関わることとなったため、報告の段階では調査の実施順に時系列で成果を示してきたが、若干整合性に欠ける感があることは否めない。ここでは現状で把握できる範囲でまとめておきたいと思う。

遺跡の時期

検出した主な遺構の時期は概ね弥生時代中期、第Ⅲ～第Ⅳ様式に属するものである。遺構の性格としては集落域に伴うもの、墓域に伴うものに人別できる。

遺構の詳細

まず集落域に伴う遺構は寺田町2丁目北西部を中心とする地区において検出している。今回の事業地内では竪穴住居5棟(隣接する個人住宅建設地における調査を含めると5棟)をはじめ、土坑・溝・多数の柱穴を検出している。

竪穴住居

竪穴住居は全体の規模が判明するものはないが、いずれも円形のプランで、径6～8mに復元できるものである。

第35-8次調査区検出のSB101(以降、調査番号-遺構番号で記述する)、隣接する38-2-SB101はそれぞれの調査区内で全体の4分の1ずつを検出したが、図面照合の結果、1棟の住居としては形状がやや歪となる。第35-8次調査区の東に隣接する第35-9次調査では周壁溝のみを検出した建物が2棟(35-9-SB201・202)あり、1mの間隔を隔てて隣接している。また第35-9次調査区北側の個人住宅建設地の調査(第41次)では径8mの竪穴住居を良好な状態で検出しているが、前述の35-9-SB201、202のうち、北側に位置する35-9-201を復元すると、これと重複する部分が存在するようになる。このことから建物群は複数回の建て替えがあったものと思われ、35-8-SB101と38-2-SB101も同様の状況にあるものと予想される。明確な時期差は見出せないが、出土遺物を見ると38-2-SB101が先行するようである。

その他、第41次調査検出の竪穴住居の遺物は未整理、35-9-SB201・202については出土遺物が少なく、時期については不明な部分が多い。なお、35-2-SX101の上層部分はその位置関係から35-9-SB202の続き部分である可能性が高く、仮にそうであれば35-9-SB202の時期は35-2-SX101出土遺物より第Ⅲ様式新段階に属するものと考えられる。

その他、寺田町2丁目では街区南東部の第50-3次調査区及び南に隣接する第56-2次調査区で両調査区に跨りSB01を検出している。この建物はベッド状遺構を持つ可能性のある建物である。さらに寺田町1丁目の北西部で実施した第50-1次調査区で弥生時代中期前半の竪穴住居を1棟検出したが、周囲に同時期の遺構の広がり認められない。

土坑

竪穴住居の周囲には土坑が多く存在し、竪穴住居に複数回の建て替えがある状況と同様、切り合い関係をもちながら竪穴住居に隣接して設けられている。第35-2次調査区の北西部、第35-9次調査区の西西部、第38-10次調査区及び東隣地の個人住宅建設地の第43次調査地で集中傾向が見られる。位置的には竪穴住居のすぐ近所で検出される。第35-8次調査区でも竪穴住居の周囲で多くの土坑を検出したが、不定形なものも多く、出土遺物は竪穴住居出土のものよりも新しい要素を含むものが多い。

溝

第35-1次調査区、第35-2次調査区等、寺田町2丁目の南半部に多い。また第35-9次調査区中央から東部分、第38-2次調査区の竪穴住居を検出した部分の縁辺部、第38-10次調査区に多く認められる。

小規模な溝は遺構面が安定した段階で掘削されたと考えられるが、35-1-S D01・02、38-2-S D101・201、38-10-S D09等は竪穴住居等の遺構が築かれる前段階にベース面を形成する堆積層を供給した自然流路的な遺構と考えられる。これらの溝には第Ⅱ様式の遺物を含む。

柱穴

第35-8・9次調査区、第38-10次調査区で多くを検出したが、建物として纏まるものはない。調査区に制約があるための結果でもあるが、さほど規模の大きな柱穴も存在しない。唯一、第38-10次調査区で平地式住居を構成するであろう規模を有する柱穴が確認されている。

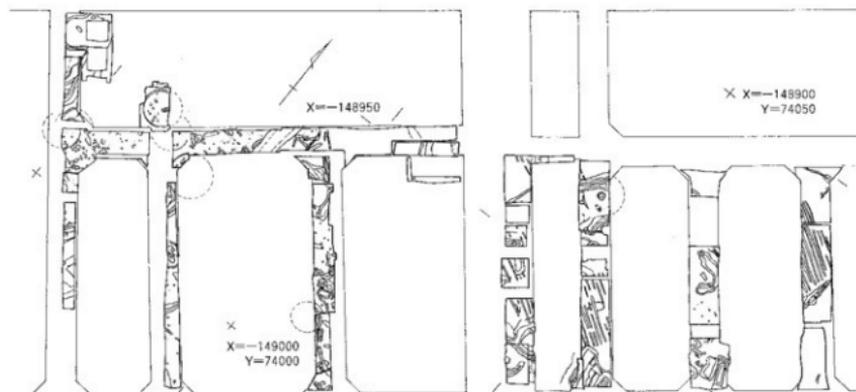
微地形の復元

集落域に伴う遺構を概観したが、これらの状況から集落域の地形について若干触れておきたい。

竪穴住居を中心とする遺構を確認した箇所は、寺田町2丁目の北西部から南東部にかけて、ほぼ直線状に位置する。この状況から寺田町2丁目には現在の攻町遺跡の範囲の中心部から南東方向に舌状に張り出した微高地が存在し、居住域はこの上に立地するもので、南側は砂層や湿地状の不安定な土壌が南下がりの地形を形成し、自然流路の貫流や、溝を掘削して居住域の区画としていたものと推測される。

さらに2丁目の街区中央部から東側は緩やかな下がり地形となり、逆に1丁目は街区の西端でやや下がり地形となっている。このことから1・2丁目間の現道部には小さな谷状地形が形成されるようで、弥生時代には遺構が希薄であるか、あるいは洪水等により削平された可能性が高い。寺田町2丁目の東端で実施した第38-7次調査では中世の溝状の落ち込みが確認されたように、この部分には幾度となく流路状の流れ込みがあり、長い間同様の地形を呈していたものと推測される。この地形的な特徴が1・2丁目間でやや異なる性質の遺構が検出される要因となっている可能性がある。

次に寺田1丁目の街区での検出遺構の中心となる方形周溝墓-墓域の形成-について見ていきたいと思う。



第93図 集落域を中心とする遺構分布図

第2節 方形周溝墓について

はじめに

今回の調査成果の中で特徴的な遺構である方形周溝墓についてまとめておきたい。

神戸市域において方形周溝墓を検出した代表的な遺跡は、戎町遺跡と同様に六甲山南麓に立地する遺跡、市域西端の平野部、明石川流域に立地する遺跡を数えると第94図・第5表に挙げた11遺跡²⁾、戎町遺跡を含めると12遺跡となる。时期的には戎町遺跡と同じく弥生時代中期（第Ⅲ様式～Ⅳ様式）に属するものが主である。これらの遺跡・遺構を比較、検討する力量も余裕も現時点では編者にはないため、本稿では戎町遺跡で得られたデータの提示に留まることをあらかじめご了承ください。

ところで「周溝墓」についての解釈はいろいろと論議のあるところである。名称をはじめ、構造についても様々であるが、一般的にはマウンド部をもち、そこに埋葬施設を設けて、その周圍を溝で区画する墳墓と解される。しかしマウンド部の大半は後世の削平により残らないことが多く、これは今回の調査でも同様である。検出遺構のほとんどは削平を受け、溝を確認しただけのものが大半であり、埋葬施設についてはより不明な部分が多い。本稿では一溝（状遺構）により方形（円形）に区画された墓の意味で一般化している「周溝墓」の名称を用いることとし、周溝墓の平面規模については、溝のマウンド側の裾部傾斜交換点間の距離を示してその規模とする。



第94図 六甲山南麓～明石川流域の方形周溝墓

番号	遺跡名	所在地	遺構の形態・検出数	時期(編)	特記事項
1	森北町遺跡	東灘区森北町	方形4基	中期(Ⅲ・Ⅳ古?)	
2	深江北町遺跡	東灘区深江北町1・2丁目	円形12基	庄内	4号墓(横溝)
3	桑崎中町遺跡	東灘区桑崎中町2丁目	円形2基+方形1基	庄内・庄内～寄席	埋没深15m
4	住吉町遺跡	東灘区住吉東町5丁目・住吉西町4丁目・住吉本町1丁目	方形5基(?含む)+円形?基	後期後半～庄内	
5	野原遺跡	東灘区野原町域の南・西	方形2基+円形5基(?含む)	後期(末)	主幹部木板墓2基
6	藤賀遺跡	灘区神前町3・4丁目	方形12基(?含む)	中期(Ⅲ古～後半)	
7	雲井遺跡	中央区雲井通6丁目・船場3・5丁目	方形5基+円形6基(?含む)	前期(Ⅰ期)・中期(Ⅱ期～Ⅳ)	
8	桃・荒田町遺跡	兵庫区荒田町1丁目・西上橋通1丁目・中央区桃町6丁目	方形8基(?含む)	中期(Ⅲ古～Ⅳ)	
9	新方遺跡	灘区玉津町高津屋・新河原、伊川谷町利和	方形5基(?含む)+円形5基(?含む)	中期前半(Ⅲ～Ⅳ古・Ⅲ古中心)	人骨
10	玉津田中遺跡	西区玉津町田中	方形44基(?含む)	前期末2基・中期(Ⅲ～Ⅳ)主体	小型木棺・横溝・両段階先端
11	比古遺跡	西区玉津町中津	円形1基+方形8基	中期(Ⅲ古)・円・方形各1(後期)	木棺(背内天溝階先端)

第5表 方形周溝墓検出遺跡一覧

方形周溝墓の検出状況

今回の調査では寺田町1丁目の街区を中心とする範囲で方形周溝墓を検出した。街路部の調査のみで完全に規模の判明する方形周溝墓の検出はなく、少なくとも一辺の大きさが判明する溝を確認したのは第35-4次調査、第38-10次調査、第38-11次調査、第50-1次調査、第50-3次調査及び第56-2次調査Ⅰ区、第50-6次調査の7箇所調査区である。まずは街路部の調査で規模の判明する周溝墓について概観する。

第35-4次調査では緩やかに弧を描くS D202の検出がコーナー部で終わっているためやや曖昧であるが、墳丘規模南北約5mに復元される周溝墓を検出した。短辺90cm、長辺1.5m以上の主体部をマウンドのやや南側で検出したが、残りが悪いため詳細は不明である。北・東の各溝から供献土器を1個ずつ検出した。

第38-10次調査では連続して「コ」の字状に廻る溝を検出し、溝で囲まれた区画の中央で長方形の土坑を検出している。溝間は約6.5mを測る。この調査区の南に続く第38-2次調査区で検出したS D102も約8mの距離を置いてほぼ平行に掘られており、連続する周溝墓である可能性を含む。

第38-11次調査でも周溝墓の北・東を区画する溝が確認され、中央部に主体部が位置する。いずれも削平により残りは悪く、両溝が接する部分以外の周溝は途切れた状態である。北辺の西端に土坑S K01があり、これを陸橋部に伴う遺構と考えてコーナー部と仮定すると、東西約6mの規模の周溝墓に復元できる。供献土器は壺底部をそれぞれの溝で検出したに留まる。

第50-1次調査では東西方向の平行する溝を検出しており、溝間は6.5mである。北側の溝は後出の溝に切られており、溝幅は不明である。南側の溝はやや弧を描きながら取束する。

第50-3次調査及び第56-2次調査のⅠ区検出のS D01は、北辺及び東辺から南辺の一部を検出した周溝墓に伴う溝である。北辺と南辺の形状はやや曖昧である。明確な南東コーナー部の様相から復元すると南北約6mに復元できる。供献土器は東辺の南端2箇所から纏まって出土している。詳細については後述する。

第50-6次調査では南北方向に長い大型の溝状の土坑を2基(S X01・02)検出し、これにわずかに間隔をあけて接する溝の端部を検出している。北側のS D01は「く」の字状に折れ曲がる溝のコーナー部を検出した。S D01、S X01及びS D03により構成される周溝墓の規模は南北長約5.4mに復元できる。

また第35-8次調査区第2遺構面でも平行、あるいは直交する溝を数条確認している。その他に溝の途中から直角に派生する溝をもつ不定形な落ち込みを確認している。形状は方形周溝墓の可能性を示唆するものであるが遺存状況が悪く明確でない。このうちS D205からは弥生時代Ⅱ様式の土器が纏まって出土した。

以上、街路部の調査からはいずれも一辺6m前後の規模をもつ周溝墓群の存在が浮かび上がる。寺田町2丁目では北西部の竪穴住居等が立地する集落域の北側や、これら遺構の下層から一段階古い時期の溝状遺構を確認しているが、その他の部分での墓域の広がりについては調査が進んでおらず、不明な点が多い。また集落域に伴う遺構との前後関係については、遺構の切り合いや出土遺物に明確な時間差を認めることが困難なことから、土地活用の詳細な状況については明らかでない。周辺での調査の進捗が望まれる。

次に街路部に挟まれた個人住宅建設地の調査が進む寺田町1丁目の範囲における状況について概観する。広い範囲で同様の溝の遺構を検出していることから、周溝墓群の復元が一部可能な状況にある。

周溝墓群の構成（予察）

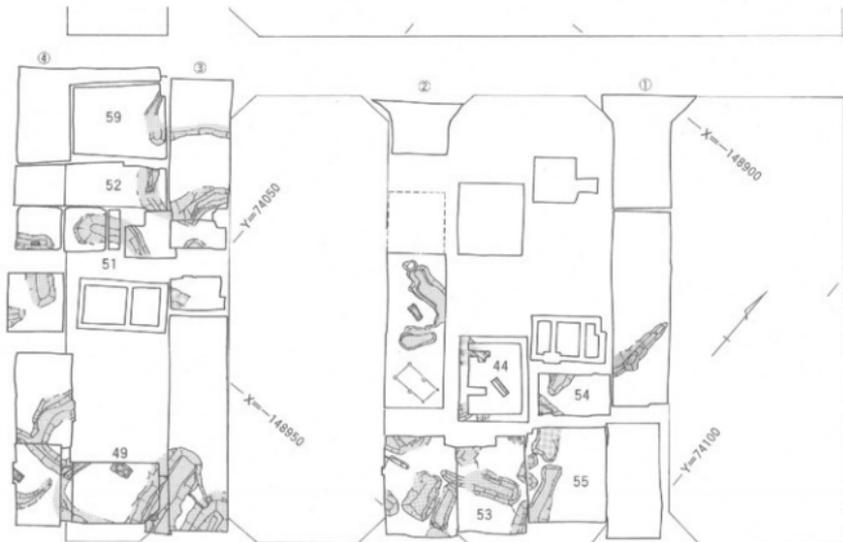
寺田町1丁目では②・③・④番街路で周溝墓を検出しており、この街路に挟まれた個人住宅建設地の調査においても多くの溝を検出している。

②番街路南端の第50-6次調査区の東隣地での調査（第53次調査）では、50-6-S X02（調査次数一・番一遺構番号）に直交する東西方向の溝と、さらにこの東西溝と直交する南北方向の溝を検出しており、50-6

一S X02と南北方向の溝間は7.5mを測る。第53次調査区の東側及び北側（第54・55次調査）にはさらに同様の溝が続き、東西6m、南北8m前後の周溝墓が形成される。同じ②番街路中央の第38-11次調査で検出した周溝墓の周囲では、東側の個人住宅建設地での調査（第44次調査）が基礎部分のみの掘削であったため明確ではないが、周溝墓が存在するようである。南側は第50-6次調査区との間に周溝墓は存在しないが、時期不明ながら1間×2間の小規模な掘立柱建物が1棟存在することが注目される。

次に③・④街路間の状況であるが、③番街路北端に位置する第50-1次調査区の西に接する個人住宅建設地（第52次調査）で50-1-S D01・02とで周溝墓を構成する東西方向の溝を検出している。溝幅約2.5m、深さは約50cmである。第50-1次調査区では供献土器の出上はないが、第52次調査では第Ⅲ様式古段階の壺が1個出土している。さらに③番街路南端に位置する第38-12次調査区では平行する長方形の土坑状の溝を検出し、38-12-S D01と第50-2次調査区S D01、ならびに西隣の個人住宅建設地（第49次調査）で検出した溝により1基の周溝墓を形成する。東西長約10m、南北長は10m以上を測り、周辺の周溝墓の中で最大の規模をもつ。突出した要素は溝内からの出土遺物の量にも現れる。第49次調査では主体部と思われる土坑を検出しており、西には50-2-S X01を共有しながら第35-4次調査区で検出した周溝墓が接する。

寺田町1丁目の範囲において今までに判明した周溝墓を見た場合、区画溝が巡るタイプを中心として検出しているが、街区の南辺に沿う一角に大型の土坑状の溝を区画溝とする周溝墓の一群が見出される。周溝墓の多くが削平された状況で検出されることから、土坑状の溝をもつ周溝墓は本来から四隅を残して溝を掘削するかが問題となるが、同じ南下がりの地形で、ほぼ同じ遺構面の高さであっても西側では周溝が巡り、東側では溝が途切れる構造をもつという違いは指摘できる。一つの背景として造墓集団の出自や性格の違いが考えられ、10mを超す規模をもつ周溝墓から漸次東に続く配置は墓群の拡張と捉えられようが、この事象については未調査部分も残ることから明言は避けたい。今後の調査に期することとする。



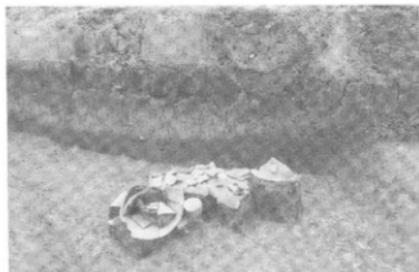
第95図 戒町遺跡における方形周溝墓分布図

戎町遺跡の周溝墓に見られる事象

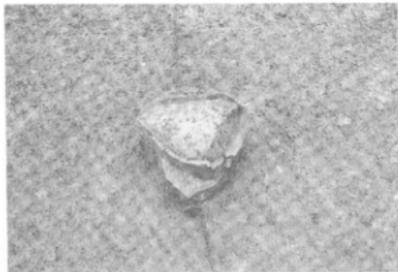
周溝墓の築造及び埋葬に際してはいろいろな段階で様々な行為が行われたと考えられる。それがどのようなものかは検出される痕跡より想像する他ない。ここでは戎町遺跡検出の周溝墓の中で何らかの行為を反映した痕跡について列挙し、今後の参考とした。 (遺構名の表記は調査番号-遺構番号で記す)

粘土を用いた密閉状況

寺田町2丁目②番街路の50-3-S D01では溝内に粘土の堆積が認められた。埋土の中間に黄色粘土が幅約1m、長さ約3mの範囲で広がっており、この層の上下には土壌化した黒色シルト層が緩やかに堆積し、粘土層を挟んでいる(挿図写真6)。供献土器は粘土層直下の下層埋土から出土しており、上層埋土からはほとんど出土していない。土器の出土状況であるが、溝の南端2箇所に分かれ、北側からは鉢と細かく破砕された甕が、南側からは壺口縁片や甕が出土している。北側の土器群の破砕された甕は粘土の下に貼り付くような位置にあった。また南側の土器群は一塊となっているが、この部分のみ土坑状に一部深くなっている。この土坑状に深くなった部分の最も深い位置から間層と同じ粘土を充填した甕が出土している(挿図写真7)。当初、粘土は調査区内における遺構の埋土の一部と考えていたが、他の遺構では同様の粘土層の堆積は認められず、また前述の甕の中に自然に粘土が流れ込む状況にないことから人為的に埋められた可能性がある。



挿図写真6 第50-3次調査 S D01土器出土状況



挿図写真7 第50-3次調査
S D01出土土器内の粘土検出状況

この一連の行為についてはあくまでも想像の域を出ないが、周溝墓が築かれ、供献土器が墳丘上、もしくは溝内に置かれ、徐々に溝内が埋まった段階で、①土器を纏める、②甕を破砕する、③密閉する粘土を充填した甕を埋め込む等の行為が行われ、粘土を貼り付け密閉したと考えられないだろうか。

供献土器に敷かれた木片

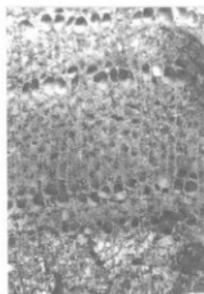
寺田町1丁目③番街路南端の50-6-S D01・S X02では、溝底から炭化した板材を検出している。50-6-S X02では板材は壺の底部に敷かれた状態にあり(挿図写真9)、同様の板材は東隣の個人住宅に伴う調査(第53次調査)で検出した溝でも確認している(挿図写真10)。50-6-S D01及び第53次調査の場合は真上に土器があったかどうかは定かでないが、炭化材横から崩れ落ちるように土器が出土した状況は、50-6-S X02に近いものと考えられる。このうち50-6-S D01・S X02の炭化材については木材組織の3方向断面を実態顕微鏡により観察し、樹種の同定をおこなった(挿図写真8)。

挿図写真8-1~3は50-6-S D01出土の炭化木材である。木口面(8-1)は4年輪分にわたる部分

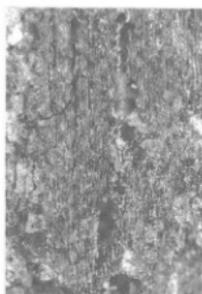
である。環孔材であり、年輪界に沿う1列ないし2列の円形の大道管が顕著で、孔圏外には10前後の小道管の集まりが斜線状に集団を形成している。柾目面(8-2)は中央に孔圏部大道管を挟み、2年輪にわたっている。道管の周囲は軸方向柔細胞が取り囲む。大道管の左方には孔圏外の小道管が見える。写真では明確でないが、異性である放射組織は、平伏細胞の上下にしゅう酸石灰の結晶を含む方形細胞が配列する。板目面(8-3)は中央に2つの放射組織、それを挟む2列の道管が見える。放射組織は7細胞幅前後の紡錘形のものである。以上の特徴により、ケヤキ(*Zelkova serrata* Makino)と同定した。

50-6-S X02出土の炭化材は劣化が激しく、木口面のみが観察できた(8-4)。材自体が末梢部で年輪界が明確でない。広葉樹の散孔材と考えられ、大道管それぞれを挟むように放射組織が平行に走っている。

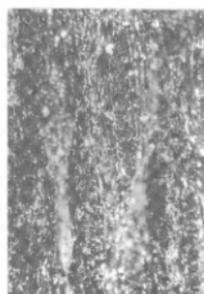
参考文献：1982島地謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社



8-1 木口面 ×10



8-2 柾目面 ×25

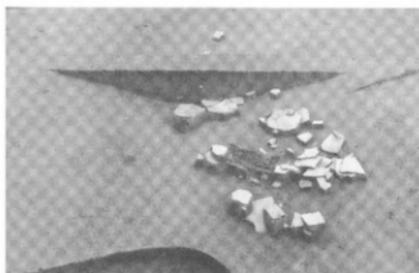


8-3 板目面 ×40

挿図写真8 出土炭化材樹種写真(右の数値は倍率)

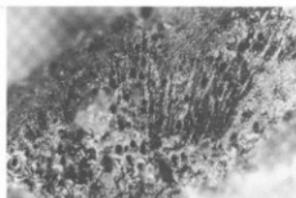


挿図写真9 第50-6次調査 S X02土器出土状況



挿図写真10 第53次調査地遺物出土状況(参考)

50-6-S X02の場合は供献土器を溝底に据えた築造当初の状態で見出ししており、流れ込みにより炭化材が土器の下に混じり込んだものではない。他の2箇所については埋土の中間層での検出であるため、明確にできないが、当初より土器を据える際に板状の木材を敷く行為が行われたことを表す可能性がある。



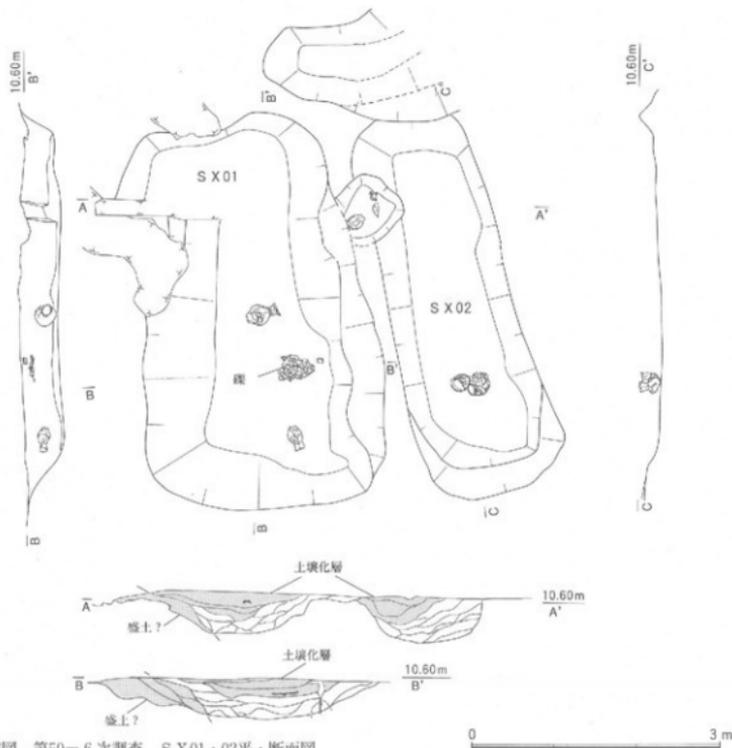
8-4

木口面 ×20

割られる甕

今回の調査において、周溝墓を構成する溝内での行為で最も多く見られるのは甕の破砕である。先述した50-3-S D01では粘土層直下で破砕された甕と、その傍らで破砕に用いたであろう拳大より一回り小さい礫を検出している(写真図版32)。この甕は接合の結果、完全に復元され、甕の破砕片も5cm角の大きさにほぼ整えられている点が特記できる。また50-6-S X01の中央で検出した甕も50-3-S D01の甕と同様、細かく破砕されているものが完全に復元できた。第50-6次調査区の東に続く第53次調査(個人住宅)検出の溝内、さらに東隣の第55次調査地(個人住宅)、その北の第54次調査地(個人住宅)において検出した溝内でも甕の破砕が行われ、甕の取り扱いとして供献、あるいは廃棄した甕の一部を破砕するのは通例の行為であるといえる。

また甕の破砕を行う段階であるが、検出した甕はいずれも溝埋土のほぼ中間、溝がある程度埋まった時点で破砕行為を受けている。50-6-S X01で見た場合、壺類はおそらく早い段階に墳丘上から転落したようであるがその状態のまま放置され、土填化層がある程度堆積した段階で甕が破砕されたと考えられる状況にある。これらは墓としての意識が残る段階で行われた行為であるのか、また墓の廃絶に伴う行為であるのか、その背景は不明であるが何らかの共通する意識をもって行われたことはほぼ間違いないものと考えられる。



第96図 第50-6次調査 S X01・02平・断面図

第3節 結びにかえて—あとがき—

鷹取東第二地区における復興区画整理事業に伴う発掘調査により得られた成果について述べてきた。そのすべてを書き連ねることはできなかったが、これは編者の力量不足によるところが大きいものの、調査開始当初の予測をはるかに超える内容によるものであることもご留意いただきたい。

4 ヶ年に亘る調査では様々な発見があり、戎町遺跡・松野遺跡に関する新たな知見を得ることができた。

まず松野遺跡だが、全体に遺構・遺物は希薄な状況であったが、その中で弥生時代後期に属する大規模な平行する2条の溝を確認した。遺跡—集落域、生業域—を画する溝の可能性はある。

周辺地域では、既に区画整理事業に伴い個人住宅建設地での調査が多く実施されているが、同様の遺構については判然としていない。但し、時期は異なるが、東に隣接する街区では古墳時代後期の柵列に囲まれた居館遺構を確認しており、これらを含めた境界意識に係わる遺構については今後の調査に期待がかかる。

さらに今回の調査で得られた大きな成果の一つとして、現段階の戎町遺跡の範囲南東端部での遺跡の様相が明らかになったことが挙げられる。寺田町2丁目北西部に弥生時代中期の集落域（墓域）が検出され、今まであまり明らかでなかった戎町遺跡における葬送の場、精神活動の反映する場が発見された。周溝墓に関しては第Ⅱ様式に属する周溝墓が2丁目北西部に立地する可能性があり、この付近に墓域の形成がはじまり、集落域の拡張とともに墓域を漸次東に拡げ、弥生時代中期には遺跡は盛行期を迎えたものと考えられる。そしてこの段階において当地域における拠点集落として位置付けられる条件を得たのではないかと考える。

今回は戎町遺跡において検出した周溝墓に見られる様々な事象を、多分に憶測を含むものであったが列挙した。周辺地域で方形周溝墓を検出した遺跡との比較や検討を行うべきであったが、余力なく、調査が進捗した段階で何らかの機会を得て稿を改めたいと思う。なお本文でも周溝墓の数については触れていないが、現状では15基程の周溝墓が復元可能かと考える。

今、街路部分での調査を終え、今後は街路間での個人住宅建設地での調査が進むものと思われる。実際、一部の調査地では連続する方形周溝墓に伴う溝を検出し、墓域の拡がりを確認している。今後も今回の調査結果と合わせ、往時の葬送儀礼についてより細かな復元が行えるような調査の実施が望まれる。



挿図写真11
方形周溝墓出土土器（個人住宅建設地調査・参考）

当地区では震災直後はほとんどの建物がその姿を消し、従前のこの町の面影を残すものは一部の建物のみであったが（挿写真12）、今年（2005年）冬、震災から10年という節目の年を迎え、まだ一部には空き地が残るものの、調査期間中から新しい家並みが見えはじめ、新しい町へと姿を変えつつある（挿写真13）。



挿写真12 震災直後の寺田町1丁目



挿写真13 震災後10年を迎えた寺田町1丁目

今後、さらなる快適な住空間づくりが行われることを切に望み、区画整理事業に伴う発掘調査のまとめとしたい。

註

岸本一宏「兵庫県下の弥生時代『周溝墓』集成」『ひょうご考古』第7号 2001年

兵庫県下の周溝墓のデータを精力的に集成され、2001年段階ではほぼそれを網羅されていると思う。今回は複数以上の周溝墓を確認した神戸市内の遺跡を代表遺跡として、岸本氏が作成した一覧表のデータを元に第5表を作成した。簡略化したため、表記が異なる部分がある。詳細は氏の一覧をご覧ください。その他に市域においては吉田南遺跡（西区）、栃木遺跡（西区）、日下部遺跡（北区）で周溝墓が確認されている。

岸本氏にはデータの使用を快諾していただいた他、戎町遺跡検出の周溝墓に関する事象について、他の遺跡と比較を行いながら懇切丁寧にお教えいただいた。

参考文献

- 寺沢薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社 1990
- 中村弘「近畿地方における方形周溝墓の出現」『網干善教先生古稀記念考古学論集』同記念論文集刊行会 1998
- 篠宮正編『玉津田中遺跡—第1分岡—』兵庫県文化財調査報告第135—1冊 兵庫県教育委員会 1996
- 丸山潔『楠・荒田町遺跡Ⅲ』神戸市教育委員会 1990
- 西岡巧次・福島孝行『雲井遺跡（第8次調査）』神戸市教育委員会 1998
- 山下史朗・山田清朝『深江北町遺跡』兵庫県文化財調査報告第54冊 兵庫県教育委員会 1988
- 野中仁・福田聖「方形周溝墓出土の木製品」『研究紀要』第10号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993
- 福田聖「方形周溝墓と土器Ⅰ」『研究紀要』第11号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 「方形周溝墓と土器Ⅱ—概観その1—」『研究紀要』第19号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2004
- 岩松保「溝内埋葬と方形周溝墓」『究班—埋蔵文化財研究会15周年記念論文集—埋蔵文化財研究会 1992

写真図版





1. 第1遺構面 調査区北半（北から）



2. 第1遺構面 調査区南半（北から）



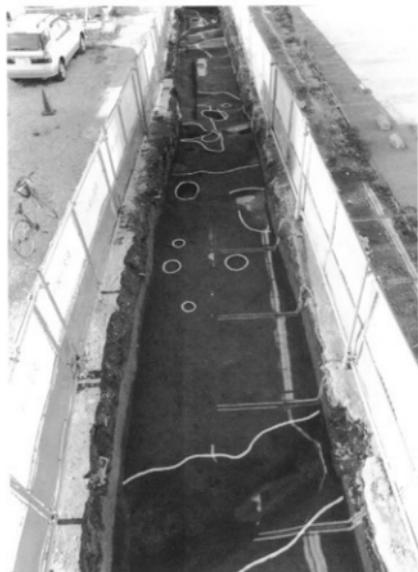
3. 第2遺構面 調査区北半（北から）



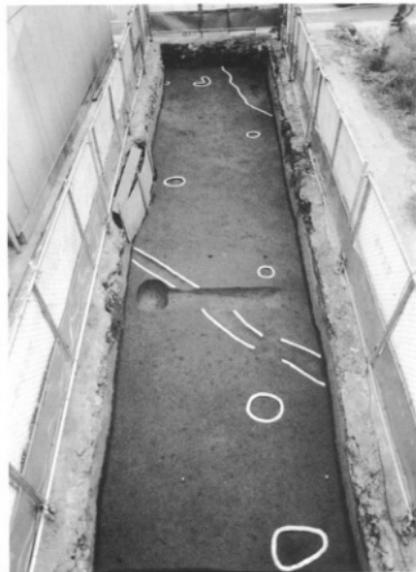
4. 第1遺構面 SD02遺物出土状況（北から）

写真図版 2

戎町遺跡第35-2次調査



1. 第1遺構面 調査区北半(南から)



2. 第1遺構面 調査区南半(北から)



3. 第1遺構面 SX101遺物出土状況(南から)